

博士学位論文（東京外国語大学）
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	トゥザ ライン
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 271 号
学位授与の日付	2019 年 3 月 12 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代ビルマ語における指示詞の研究—現場指示、文脈参照現場指示、 文脈指示をめぐって—

Name	Thuzar Hlaing
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 271
Date	March 12, 2019
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	Demonstratives in Modern Burmese—Deictic, context-referring deictic, and anaphoric expressions—

現代ビルマ語における指示詞の研究
—現場指示、文脈参照現場指示、文脈指示をめぐって—

トゥザ ライン

目次

略号一覧	v
1. はじめに	1
1.1. 本論の目的	1
1.2. ビルマ語の概要	2
1.3. 音韻特徴	2
1.3.1. 音節構造	2
1.3.2. ビルマ語の子音体系	3
1.3.3. 母音体系	4
1.3.4. 二重母音と末子音の結合関係	4
1.3.5. 声調と有声化	5
1.4. 類型的特点	5
1.4.1. 名詞を修飾する構造	6
1.4.2. 名詞分類	8
1.5. 文体	9
1.6. 研究方法	10
1.7. 本論の構成	11
2. 先行記述・研究	13
2.1. 指示用法の定義及び分類	13
2.1.1. 吉田 (2004)の記述	13
2.1.2. Diessel (2005)の記述	14
2.1.3. 岡野 (2007, 2011)の記述	14
2.1.4. トゥザライン (2016, 2018)の記述	14
2.2. 本論で扱う指示詞の用法の整理	15
2.3. 本論の立場と指示の再分類	15
2.4. ビルマ語で書かれた文献による先行記述	16
2.4.1. Myanmar Language Commission (1978-1980)によるビルマ語辞典	16
2.4.2. Myanmar Language Commission (2005)による『ミャンマー文法』	16
2.4.3. Khin Min (2007)の記述	17
2.5. ビルマ語以外の言語で書かれた文献による先行記述	18
2.6. 本論で対象とする指示詞の範囲	22
3. 口語体ビルマ語の指示詞	27
3.1. 口語体における指示詞と体系	27

3.2.	口語体の現場指示	27
3.2.1.	dì/ dà	28
3.2.2.	ʔédì/ ʔédà	31
3.2.3.	hò/ hòhà (ʔéhò)	34
3.2.4.	hò の交替可能性	36
3.3.	口語体の文脈指示	38
3.3.1.	前方照応	38
3.3.2.	後方照応	45
3.3.3.	ʔédì/ ʔédà が hò/ hòhà と交替できる例についての考察	48
3.3.4.	文脈指示の dì/ dà と ʔédì/ ʔédà の置き換え	50
3.3.5.	口語体文脈指示のまとめ	51
3.4.	心理的要因によると思われる派生的な用法	51
3.4.1.	dì/ dà の現れ	51
3.4.2.	ʔédì/ ʔédà の現れ	52
3.4.3.	心理的要因によると思われる派生的な用法のまとめ	53
3.5.	口語体にみられる「文脈参照現場指示」	54
3.5.1.	心理的な要因では説明しきれない現象	55
3.5.2.	従来の指示用法に関する問題	56
3.5.3.	「現場指示」と「文脈参照現場指示」の違いについての考察	56
3.5.4.	「心理的な要因」と「文脈参照現場指示」の区別についての考察	59
3.5.5.	情報構造からみた「文脈参照現場指示用法」の性質	60
3.5.6.	「文脈参照現場指示」のまとめ	61
4.	文語体ビルマ語の指示詞	63
4.1.	文語体における指示詞と体系	63
4.2.	研究対象および研究方法	63
4.3.	分析準備作業の結果	64
4.4.	先行記述	65
4.4.1.	Pe Maung Tin (1953)の記述	65
4.4.2.	Pe Maung Tin (1959)の記述	68
4.4.3.	その他の記述	72
4.4.4.	先行記述・研究のまとめ	73
4.5.	問題点	73
4.6.	考察	75
4.6.1.	現場指示	76
4.6.2.	文脈指示	78
4.7.	ʔì, tʰò, yín, lăgáun のそれぞれの使用	87

4.7.1.	ꨀとꨀꨃの使用	87
4.7.2.	指示代名詞 yín と lǎgáun の使用	88
4.8.	文語体における指示詞のまとめ	89
4.9.	文語体ꨀとꨀꨃの口語体との対応関係	89
5.	指示詞の周辺の用法	92
5.1.	指示表現を含むその他の現象	92
5.1.1.	hó が付加された形式の指示詞	92
5.1.2.	遠い過去や場所を表す hó	94
5.1.3.	dì と hò の特別な用法	95
5.1.4.	hòdíN/ hǎwà (hǎhwà)の用法	97
5.2.	談話中に現れるフィラー	98
5.3.	慣用表現	101
5.4.	指示表現の重複	103
5.5.	ꨀdí/ ꨀdà の異形態	104
6.	日本語との対照の観点から見たビルマ語の指示限定詞	107
6.1.	ビルマ語の指示限定詞 dì の解釈の要因	107
6.1.1.	「この」と「今の」の意味確認	107
6.1.2.	「この」と「今の」の2つの意味に解釈される dì	108
6.1.3.	「今の」の意味にしか解釈できない dì	110
6.1.4.	指示限定詞 dì の解釈を決定する条件	115
6.1.5.	「この・今の」のまとめ	116
6.2.	文脈指示に現れる「指示限定詞+N」	116
6.2.1.	指示限定詞+数詞を含む量化詞	116
6.2.2.	金水 (1999)による代行指示用法	121
7.	本論文の結論	122
8.	今後の展望	124
	参考文献	125
	用例出典 (口語体)	129
	用例出典 (文語体)	131
	付録 1: 口語体指示詞のまとめ表	133
	付録 2: 文語体指示詞のまとめ表	134
	付録 3: ヤーザクマーラ (ラージャクマーラ) 碑文	135
	付録 4: 指示代名詞 yín と lǎgáun の用例	138

表の目次

表 1 子音の音素体系	3
表 2 末子音 (2 種)	3
表 3 単母音 (7 種)	4
表 4 二重母音 (4 種)	4
表 5 声門閉鎖音/-ʔ/との結合パターン (8 種)	4
表 6 鼻母音/-ŋ/との結合パターン (7 種)	5
表 7 声調 (3 種)	5
表 8 岡野 (2010)によるビルマ語の名詞分類	9
表 9 吉田 (2004)による指示の分類	13
表 10 本論で用いる指示の再分類	15
表 11 ビルマ語辞典での指示詞とその解説	16
表 12 ビルマ語辞典での指示詞とその分析	18
表 13 藪 (1992: 582r)によるビルマ語の指示代名詞	19
表 14 岡野 (2011: 77)による指示語 (基本形) の体系	19
表 15 澤田 (1999: 8)による指示名詞の分類	20
表 16 ビルマ語以外の言語で書かれた先行記述の整理	22
表 17 口語体の指示詞	23
表 18 文語体の指示詞	24
表 19 口語体指示詞の分類	27
表 20 純粋な現場指示と文脈参照現場指示の分類	61
表 21 文語体指示詞の分類	63
表 22 指示詞の出現数(キッサン文学集-Vol.1(上段)+Vol.2(下段))	64
表 23 指示詞の出現数(国語教科書)	64
表 24 指示詞の出現数(新聞)	65
表 25 文語体指示詞の分類	87
表 26 ビルマ語の口語体・文語体の指示詞	90
表 27 ビルマ語の指示詞の全体像	91
表 28 指示限定詞 di の解釈を決定する条件	115
表 29 現場指示における遠近性	123

略号一覧

ABL	ablative	奪格
ACC	accusative	対格
ADM	admirative	感嘆
ALL	allative	向格
attr.	attributive clause marker	限定節標識
AUG	augmentative	指大辞
AUX	auxiliary	助動詞
CAUS	causative (case)	理由(格)
CLF	classifier	類別詞
COM	comitative	共格
COND	conditional	条件
COP	copula verb	繫辞動詞
CNSQ	consequential clause marker	結果節標識
CNTR	contrastive	対比
csubj	contrast subject	対比された主語
DET	determinative	限定詞
DIM	diminutive	指小辞
DIS	discourse marker	談話標識
EMPH	emphasis	強調
EXCL	exclusive (case)	除外(格)
EXP	experience	経験
FN	formal noun	形式名詞
FOC	focus marker	焦点標識
FP	final particle	終助詞
GEN	genitive	属格
HON	honorific	敬称
HS	hearsay	伝聞
IMP	imperative (mood)	要求(法)
INC	inchoative (mood)	生起(法)
INS	instrumental	具格
INTERJ	interjection	間投詞
IRR	irrealis (mood)	叙想法
LOC	locative	所格
NAME	name	特定名称
nc.	noun clause marker	名詞節標識

NEG	negative (mood)	否定(法)
NMLZ	nominalization	名詞化
NOM	nominative	主格
OBL	oblique	斜格
ONM	onomatopoeia	オノマトペ
PAST	past time (case)	過去時(格)
PL	plural affix	複数接辞
PROH	prohibitive	禁止
PLT	politeness	丁寧
PURP	purposive (case)	目的(格)
Q	question particle	疑問助詞
QUOT	quotation marker	引用標識
RDPL	reduplication	畳語
RLS	realis (mood)	叙述法
SEQ	sequential	逐次
TER	terminative	到格
TOP	topic marker	話題標識
VOC	vocative marker	呼称標識
vs.	verb sentence marker	動詞文標識
[1]	1 st person	一人称
[1f]	1 st person (female)	一人称 (女性用語)
[1m]	1 st person (male)	一人称 (男性用語)
[2]	2 nd person	二人称
[2f]	2 nd person (female)	二人称 (女性用語)
[2m]	2 nd person (male)	二人称 (男性用語)
[3]	3 rd person	三人称
[3f]	3 rd person (female)	三人称 (女性用語)
[3m]	3 rd person (male)	三人称 (男性用語)
F	female speakers	女性用語
M	male speakers	男性用語

記号一覧

Ø	zero morpheme	ゼロ形態素
-	morpheme boundary	形態素境界
+	boundary between N and V in “NV” Verb, and boundary between verbs constituting serial verbs	NV 型動詞内の N と V の境界、 動詞連続をなす動詞間の境界
*	ungrammatical	非文法的
?	low acceptability	低い容認可能性
/		自由交替（意味の併記や用例区分など）
/ /		音素表記
[]		音声表記、省略
()		補足・追加的記述／引用文献の出版年など
「 」		訳語、文献のタイトル
“ ”		引用符：会話
‘ ’		引用符：会話ではないもの
{ }		地の文
< >		略語
『 』		参考した書籍のタイトル

1. はじめに

本論は現代ビルマ語における指示詞¹を体系的にまとめ、指示詞の全体像を明らかにするものである。これまでのビルマ語研究では、指示詞について言及する文献はあるものの、その大部分は単なる形式的分類と辞書的な記述程度にとどまっており、詳細で包括的な研究は極めて少ない。また、現代ビルマ語の特徴の一つとしては口語体（主として日常会話に用いられる形式）と文語体（専ら書記に用いられる形式）とで形式が異なることが挙げられるが、文語体指示詞の研究は未だ存在していない。更に、ビルマ語の口語体と文語体の違いとして指示詞や助詞類の形式などの異なる点が挙げられており、ビルマ語の言語変種の特徴を考えるためには指示詞の研究が欠かせないものである。ビルマ語の指示詞はこのような特徴を有しており、特に研究する意義があると考えられる。以上の理由から、本論では口語体と文語体の指示詞の全体像を明らかにし、少しでもビルマ語の指示詞研究が他言語の指示詞研究に役に立つことを目指す。

1.1. 本論の目的

本論では、現代ビルマ語における指示詞を体系的にまとめ、指示詞の全体像を示すことを最終目的とする。その目的を達成するためには、次の2つの手順を設定する。

第一は、先行研究を参考にして指示用法の分類を整理し、「現場指示」と「文脈指示」のほかに、「文脈参照現場指示」²が存在することを示す。これまでの指示詞の研究に採用されてきた指示用法には現場指示と文脈指示という用法がある。しかし、このようによく知られている現場指示用法と文脈指示用法の分類基準では、ビルマ語の指示詞を説明するには不十分である。現場指示は眼前にある指示対象を何の前提もなしに直接指し示す場合に用いられ、先行文脈は存在しない。一方、文脈指示は、指示対象の同定に発話や文章内の文脈が関与する場合に用いられる。しかしながら、ビルマ語の指示詞には、眼前にある指示対象を即座に直接指し示しているにもかかわらず、言語的先行文脈を必要とする、現場指示と文脈指示の機能が同時に働いていると考えられる例が存在する。このような潜在的な文脈情報を持っている場合に用いるものとして文脈参照現場指示という用法を提案する。

第二は、これまで研究されてなかった文語体指示詞の考察を試みることで、口語体と文語体指示詞の全体像を明らかにする。先行記述としてミャンマー国内における Myanmar Language Commission の出版物や Pe Maung Tin (1953, 1953)、Khin Min (2007) などがあるものの、いずれもが学習の観点からの説明に過ぎず、単なる意味の解説にとどまっている。中でも Pe Maung Tin (1953, 1953) は参考書の中で最も優れた本であるといわれるほど、解説には多くの用例を扱っている。しかし、取り扱っている用例はほとんどが20世紀以前のものである。そのため、本論では、20世紀初頭から現在までの文献を対象として構築した自らのコーパスデータを利用し、実例・用例に偏りのないような記述を心懸ける。具体的には、ꠌ, ꠌꠌ,

yín, lǎgáunの4つの文語体指示詞について詳細な考察を行い、それぞれの機能を明らかにした上で、口語体と文語体指示詞の全体の構成を整理する。

1.2. ビルマ語の概要

ビルマ語はミャンマー連邦共和国における唯一の公用語であり、同国を構成する最大民族であるビルマ族の言語である。ミャンマーの人口5,141万人(2014年9月「ミャンマー入国管理・人口省(当時)発表」)の約70%を占めるビルマ族および同国内に居住する民族の一部が母語としている言語である³。

系統的にはビルマ語は「シナ・チベット語族、チベット・ビルマ語派、ロロ・ビルマ語群(あるいは語支)に属する。チベット・ビルマ語派を構成する言語のうち、チベット語とならんで、多くの話者人口と、古くから豊富な文献を有する有力な言語である。11世紀後半ないし12世紀初頭に、インド系のモン(Mon)文字に範をとって考案された、ビルマ文字(最初は方形、のちに円形)によって表記される(藪1992: 567r)。

本論では1.3以降で参考する先行文献の記述や引用の例文などは、本論の方式に統一して音素表記で示すが、ビルマ文字がないと分かり難い用語などはビルマ文字も併記する。

1.3. 音韻特徴

1.3.1. 音節構造

音節には以下のように声調を持つ通常の音節と、声調を持たない弱音節がある。弱音節は単独では現れず、必ず後続の音節とともに複音節の形で現れる。弱音節の母音は常に[-ă]になる。

主音節：頭子音 (+介子音) +母音 (+末子音) / 声調

$C_i (C_m) V (C_f) / t$

例 1 : မြန်မာ /myàn/ 「速い」

弱音節：頭子音 +ă

例 2 : မိမိ /mì/ 「母」

例 1 の/myàn/という単語での/m/は頭子音、/y/は介子音、/a/は母音、/N/は末子音であり、母音の上に書かれる/ゝ/は声調を表す。例 2 の/mì/という語は二音節からなる。第一音節目は頭子音/m-/と弱音節の母音/ă/の組み合わせであるが、これは単独では現れることができず、後接の音節/mè/と共起することによってはじめて意味のある語となる。

以下に現代ビルマ語の音素表記一覧を表す。

1.3.2. ビルマ語の子音体系

以下に子音の音素体系を示す。必要に応じて音声表記を[]で付記する。

表 1 子音の音素体系

調音法	調音位置									
	両唇音		歯音	歯茎音		硬口蓋音		軟口蓋音		声門音
破裂音	p-	b-	t- [t̚ (θ)~ɗ̚ (ð)]	t-	d-			k-	g-	ʔ-
	p ^h -			t ^h -				k ^h -		
破擦音						c- [tɕ]	j- [ɕ]			
						c ^h - [tɕ ^h]				
摩擦音	f- [ɸ~f]			s-	z-					h-[h~ɦ]
				s ^h -						
鼻音	hm- [ṁm]	m-		hn- [ṇn]	n-	hny- [ɲ̃ɲ]	ny- [ɲ̊ɲ̊]	hŋ- [ŋ̊ŋ̊]	ŋ-	
接近音	hw- [ɰw]	w-		hl- [ɭl]	l-	hy- [ç]	y- [j̥~j]			
弾き音				r- [ɽ~ɽ]						

/f/と/r/は外来語にのみ現れる。

以下に末子音を示す。

表 2 末子音 (2 種)

	声門閉鎖	鼻音
	-ʔ	-N

声門閉鎖音/-ʔ/は単母音(a-, i-, u-, ε-)とすべての二重母音と結合し、声調は外来語を除いて常に下降調である。

鼻音/-N/は単母音(a-, i-, u-)とすべての二重母音と結合し、すべての声調と結びつく。/-N/は、実際には鼻母音として実現する。

1.3.3. 母音体系

以下に母音体系を示す。

表 3 単母音 (7 種)

	前舌	後舌
狭 口	-i [i]	-u [u]
半狭口	-e [e]	-o [o]
半広口	-ε [ε]	-ɔ [ɔ]
広 口	-a [a]	

表 4 二重母音 (4 種)

	前舌	後舌
半狭口 → 狭 口	-ei[ɛʰ]	-ou[öʰ]
広 口 → 半広口	-ai[äʰ]	-au[äʰ]

二重母音は必ず末子音を伴う。以下にその結合関係を示す。

1.3.4. 二重母音と末子音の結合関係

以下、二重母音と末子音の結合関係を声門閉鎖音/-ʔ/との結合パターン(表 5)と鼻母音/-N/との結合パターン(表 6)に分けて示す。

表 5 声門閉鎖音/-ʔ/との結合パターン (8 種)

	-a	-i	-u	-ε	-ai	-ei	-au	-ou
-ʔ	-aʔ [aʔ]	-iʔ [iʔ]	-uʔ [uʔ]	-εʔ [εʔ]	-aiʔ [aʰʔ]	-eiʔ [eʰʔ]	-auʔ [aʰʔ]	-ouʔ [oʰʔ]

表 6 鼻母音/-N/との結合パターン (7 種)

	-a	-i	-u	-ai	-ei	-au	-ou
-N	-aN	-iN	-uN	-aiN	-eiN	-auN	-ouN
	[ã]	[ĩ]	[ũ]	[aĩ]	[eĩ]	[aũ]	[oũ]

1.3.5. 声調と有声化

1.3.5.1. 声調

通常の音節には低平調、高平調、下降調の 3 つの声調がある。弱音節は無声調であり、母音は常に/-ă/となる。

表 7 声調 (3 種)

	低平調 (22)	高平調 (44)	下降調 (41)
	-à	-á	-â

1.3.5.2. 有声化

ビルマ語には、無声の初頭音を持つ形態素が前の要素と強く結びついた場合に以下のように有声化するという現象がある。いわゆる順行同化である。直前にある要素の形態素末が声門閉鎖音/-ʔ/である場合は有声化しない。

以下、有声化のパターンを示す。

無声音	p-, p ^h -	t-, t ^h -	s-, s ^h -	c-, c ^h -	k-, k ^h -	ʈ-
	↓	↓	↓	↓	↓	↓
有声音	b-	d-	z-	j-	g-	(ɖ-)

なお例外的に順行同化ではない有声化現象もある。

1.4. 類型的特点

基本語順は SOV 型であり、名詞類の文法関係などが後置詞によって標示されるなど、膠着語的な特徴を有している。文の末尾に現れる述語は動詞だけではなく、名詞の場合もある。厳密には述語 (V) が文の末尾に現れることが重要で、述語以外の語順は比較的自由である。ただし、他動詞である場合には目的語 (O) が述語 (V) の直前に現れるのが最も自然である。また、ビルマ語は名詞の格変化や動詞の活用などがなく、語形変化の乏しい言語でもあり、孤立語的な特徴も有している。

1.4.1. 名詞を修飾する構造

統語的には、基本的に修飾(限定)要素が被修飾(被限定)要素に先行するが、修飾要素が被修飾要素に後続することもある。

統語的修飾：【修飾語+被修飾語】

မ္ၚးမ္ၚး စးပါ။
myámyá sá-pà-Ø
many.RDPL eat-PLT-vs.IMP
たくさん食べてください

ဂရုတစိုက် ကြည့်ပါ။
găyûtāsai? cî-pà-Ø
carefully look-PLT-vs.IMP
ちゃんと見てください

ကောင်းကောင်း သွားပါ။
káungáun twá-pà-Ø
good.RDPL go-PLT-vs.IMP
気を付けて行ってください

語彙的修飾：【修飾語+被修飾語】

အဖြူရောင် အင်္ကျီ
ʔăp^hyù-yàun ʔéinjì 【修飾語+被修飾語】
white-colour shirt
白い服

အင်္ကျီ အဖြူရောင်
ʔéinjì ʔăp^hyù-yàun 【被修飾語+修飾語】
shirt white-colour
白い服

အင်္ကျီ ဖြူ
ʔéinjì-byù 【被修飾語+修飾語】
shirt-white
白衣

အင်္ကျီ ဖြူဖြူ
 ʔéin̄jì pʰyùbyù 【被修飾語 + 修飾語】
 shirt white.RDPL
 白衣

また、修飾(限定)要素が被修飾(被限定)要素に先行する場合の修飾要素として指示詞や限定節などがある。

【指示詞 + N】

ဒီစာအုပ်
 dī sàʔou?
 this.DET book
 この本

【限定節(名詞修飾節) + N】

ဒီဆရာရေးတဲ့ စာအုပ်
 [dī sʰǎyà yé-t̚ɛ̃] sàʔou?
 this.DET teacher write-attr.RLS book
 この先生が書いた本

ဒီဆရာရေးတဲ့စာအုပ်	／	ဆရာရေးတဲ့ဒီစာအုပ်
dī [sʰǎyà yé-t̚ɛ̃] sàʔou?	／	[sʰǎyà yé-t̚ɛ̃] dī sàʔou?
this.DET teacher write-attr.RLS book	／	teacher write-attr.RLS this.DET book
この、先生が書いた本	／	先生が書いたこの本

【属格／下降調化(名詞句) + N】

ဒီဆရာရဲ့စာအုပ်
 [dī sʰǎyà-yê] sàʔou?
 this.DET teacher-GEN book
 この先生の本

ဒီဆရာရဲ့စာအုပ်	／	ဆရာရဲ့ဒီစာအုပ်
dī [sʰǎyà-yê] sàʔou?	／	[sʰǎyà-yê] dī sàʔou?
this.DET teacher-GEN book	／	teacher-GEN this.DET book
この、先生の本	／	先生のこの本

ဒီဆရာစာအုပ်

[dì s^hăyâ] sà?ou?
this.DET teacher.OBL book

この先生の本

ဒီဆရာစာအုပ်

dì [s^hăyâ] sà?ou?
this.DET teacher.OBL book

この、先生の本

/

ဆရာဒီစာအုပ်

/

/

/

[s^hăyâ] dì sà?ou?
teacher.OBL this.DET book

先生のこの本

1.4.2. 名詞分類

本論での名詞分類は岡野 (2010)に従う。岡野 (2010: 239-240)によれば、名詞はその意味的な素性が格標示形式の分布や意味と密接な関係を持っており、その分布的特徴から、非位置的 (non-locational)と位置的 (locational)⁴とに分類される⁵。非位置名詞は主語や目的語といった動詞の項となることができる名詞であり、位置名詞は動詞の項とはなり得ず、イベントや事象の発生する空間的・時間的位置や起点・着点を表すのにもっぱら用いられる名詞である。格助詞は非位置名詞に後接する場合と、位置名詞に後接する場合とで意味が異なる。これに加え、これらの名詞の代替表現も異なる。代替表現は、代名詞と疑問名詞である。

(1) a. bà = φ s^hau? = tǎ = lé — cáun = φ / dà = φ s^hau? = tè
何=ABS 建てる=vs.RLS=Q — 学校=ABS/これ=ABS 建てる=vs.RLS
何を建てたか? — 学校を/これを建設した。

b. bè = φ tǔwá = mǎ = lé — cáun = φ / hò = φ tǔwá = mè
どこ=ABS 行く=vs.IRR=Q — 学校=ABS/あそこ=ABS 行く=vs.IRR
どこへ行くの? — 学校へ/あそこへ行く。

(ibid.: 240)

岡野 (2010)によれば、上記 a. では ‘cáun’ 「学校」に対応する代名詞は ‘dà’ 「これ」、疑問名詞は ‘bà’ 「何」であるのに対し、b. では代名詞は ‘hò’ 「あそこ」疑問名詞は ‘bè’ 「どこ」である。つまり同一の名詞ではあるが、その意味素性は異なっており、a では非位置名詞、b では位置名詞となっている⁶。

次に岡野 (2010: 240)は、非位置名詞は更に人間名詞 [+human]や無生名詞 [-animate]といった細かい分類ができると述べている。そして、位置名詞は大きく空間的位置名詞と時間的位置名詞(以下、それぞれ「空間名詞」「時間名詞」)とに分けられる。これは空間名詞と時

間名詞とが一部異なる格標示を持つからであり、代替表現も異なるからであると説明し、代替表現との交替可能性から考えて、少なくとも次の下位分類範疇を認めるべきであるとしている。

- (2) a. tù「彼／彼女」, bǎdù「誰」等と交替可能
- b. dà「これ」, bà「何」等と交替可能
- c. dì「ここ」, bē「どこ」等と交替可能
- d. dì = ʔăc^hèiN「この時」, bē = ʔăc^hèiN「どのとき;いつ」等と交替可能

(ibid.: 240)

岡野 (2010: 240)は、(2)の a.を人間名詞、b.を無生物名詞、c.を空間名詞、d.を時間名詞と呼んでいる。

従って、岡野 (2010)で述べた名詞分類のことを次の表 8 のようにまとめることができる。

表 8 岡野 (2010)によるビルマ語の名詞分類

名詞			
非位置名詞		位置名詞	
人間名詞	無生物名詞	空間名詞	時間名詞

1.5. 文体

ビルマ語は、主として発話に用いられる口語体と、書記に用いられる文語体とがある。藪 (1992: 593)は、ビルマ語の文体について以下のように述べている。ビルマ語には「書記言語として、『ビルマ文語 (WtB⁷)』とよぶべきものが存在する。ビルマ文語は、15~16 世紀以降、多くの古典文学作品が生み出されていく過程で、正書法（綴り字法）整備と相まって成立したものと考えられる。現代ビルマ語において、口語と文語の違いは、ほかの多くの言語と同様に、文体上の違いにしかすぎない。口語は、日常の口頭言語としての文体であり、文語は、改まった書記言語としての文体である。しかし、両者の間に、必ずしも、截然たる区別があるわけではない。口頭言語であっても、演説などは、かなり文語的な調子を帯びるものである。また、逆に、軽い筆致で書かれた随筆などには、口語体のものが少なくない。現代ビルマ語の、口語と文語の文体上の差異を大きく特徴づける点として、次の2つをあげることができる。」

a) 従属語（助詞）などを使い分ける⁸。

b) 文語では、口語の単音節語を2音節語に、2音節語を4音節語にひきのばす。

(ibid.: 593)

また、藪 (1992: 593)は、この2点のほかに、「文語は、パーリ語起源の語を多用するとか、俗語風の言い回しを用いないとかいった傾向がみられる。これは、文語が本来もっている格式性 (formality)を示す特徴といってよい」と述べている。

澤田 (2012: 1)は「ビルマ語の特徴の一つとして、特に文法機能を担う機能語（各種小辞や指示表現など）において口語体と文語体の差異が大きいことがあげられる」と述べている。

文体の違いについては Khin Min (2010: 69)⁹の記述もある。Khin Min (2010: 69)はビルマ語の散文には「話し言葉の散文」と「書き言葉の散文」があり、ビルマ語を実践する際にはそれぞれをきちんと使いこなす必要があると述べている。話し言葉の散文は「日常会話での話し方のように軽い文体で書いてあるため口語と似ており、軽く進む。そのため、会話体で書く手紙やせりふなどでは話し言葉の散文で書く習慣がある」¹⁰と述べ、書き言葉の散文は「文語体で伝統的に書き続けてきた散文の種類であるため文語らしい文語で、立派な形式であると考えられている。そのため、年配者や親、上司等へ書く手紙、報告書、企業による公式文書、記録、学問関連などでは書き言葉の散文で書く習慣がある」¹¹と述べている。このようにビルマ語には、口語体を文字表記した「話し言葉の散文」と文語体の「書き言葉の散文」がある。ただ、1938年代に書かれたとみられる Po Kya の『著者の個人経験による小説』という本のまえがきには、「立派なビルマ語の文章を書くとき『-lô (引用節)¹²、-tê (名詞限定節)、di (指示限定詞)、dà (指示代名詞) などの』直接話しかけるような言葉を挟んで使うとビルマ語の価値に傷つけることになる」¹³という記述がある。

先行研究をまとめると、口語体と文語体の主な違いは助詞類のセットが異なることであり、名詞や動詞などの使われる語彙が異なる場合もある。両者の間に、必ずしも、明確な区別があるわけでもない。口頭言語であっても、演説などは、かなり文語的な調子を帯びるものである。

1.6. 研究方法

指示詞の意味はその使用場面や状況に大きく依存しており、指示詞の研究には背景情報を含めた言語資料の収集が精密な記述には不可欠である。しかしながら、ミャンマーでは現代ビルマ語を対象とした言語研究は決して盛んだとは言えず、指示詞を含むいくつかの文法現象の研究蓄積も充分であるとは言えない。また、ビルマ語は Unicode に対応するのが遅れたこともあり、いまだ、大規模な言語コーパスが存在していない。そのため、まずは、そ

れぞれ文語体と口語体の用例を収集し、小規模ではあるが、おおよそ 750,000 音節¹⁴からなる自らコーパスを構築した。用例収集は主にキッサン文学¹⁵が興隆した 20 世紀初頭から現在までの文献を対象にした。口語体のデータについてはテレビドラマの SCRIPT や小説の会話部分に加えてビルマ語の母語話者の自然会話データを収録した。文語体のデータについては、文学作品をはじめ、教科書や新聞など各方面からの資料を収集した（詳細は第 4 章を参照されたい）。

本論で取り上げた多くの用例は自らのコーパスより得られたものであるが、オンライン上の検索による用例と、作例もある。ただし、第 6 章で扱った用例のみ、岡野賢二氏（2016 年 3 月 14 日収集）に音声データを提供していただいた。現時点（2018 年 12 月 03 日）で岡野氏のデータは未公開である。なお、本論で扱う全ての用例を掲載するにあたり、会話参加者の承諾を得た。また、本論で採用するビルマ語の用例は、本論で採用するにあたり、音韻転写し、逐語訳と和訳と付けた。用例の自由訳を作った際に南田（1983, 1998）の作品を参考にしているが、この南田（1983, 1998）は文学的な翻訳であり、原文と訳語の要素が必ずしも一対一で対応しているわけではないため、参考するにとどめた。用例出典はそれぞれの用例の下に記す。日本語訳がある作品は作者名の頭文字と出版年の略語で記す。作例の場合は記さない。

1.7. 本論の構成

全 8 章からなる本論は、現代ビルマ語の口語体と文語体の指示詞について考察し、それぞれの指示詞が持っている意味・機能を体系的にまとめ、指示詞の全体像を示したものである。

第 1 章では、本論の目的やビルマ語の概要など本論を進める上で最低限必要な事柄について概観する。

第 2 章では、指示用法の定義及び分類について検討し、本論で扱う指示用法の整理を行う。次に、ビルマ語の指示詞についての先行記述・研究を紹介し、ビルマ語の口語体と文語体におけるそれぞれの指示詞および指示体系を考える。

第 3 章では、口語体ビルマ語にみられる現場指示、文脈指示と、文脈参照現場指示について詳細に考察し、記述を行う。

第 4 章では、文語体ビルマ語における指示詞の記述的考察を行う。

第 5 章では、指示詞の周辺的な用法などについて触れる。

第 6 章では、日本語との対照を試みる。

第 7 章は、本論の結論である。

第 8 章では、今後の展望について述べる。

以上、本章では、本論の目的やビルマ語の概要など本論を進める上で必要最低限なものを概観した。次の第 2 章では先行記述・研究を参考し、指示用法の整理とビルマ語の口語体と

文語体におけるそれぞれの指示詞および指示体系を考える。第 3 章からは本論の主要内容に移る。なお、本論は 2014 年度から 2017 年度までの拙論(トゥザライン 2015, 2016, 2017, 2018)を発展させたものであるが、本論としてまとめるにあたり、全体の内容に合わせて加筆修正を行い、ところどころ改変した。また、第 2 章以降で扱う実例・用例には音韻記号を使用し、ビルマ文字はその都度必要な場合にのみ表示する。

2. 先行記述・研究

本章では先行記述・研究による指示用法の定義及び分類の整理を行い、ビルマ語の指示詞に関する先行記述・研究をまとめる。

2.1. 指示用法の定義及び分類

2.1.1. 吉田 (2004)の記述

吉田 (2004)は日本語の指示詞コソアの振る舞いについての研究である。吉田によれば、「直示」(deictic, deixis)は「現場指示」あるいは「場面指示」とも言い、「文脈指示」の anaphoric とは、本来「前方照応」のことである。また、文脈指示は前方照応が基本であるが、一部「後方照応」(cataphoric)もあるとしている。吉田は指示を次のように分類している。

指示の種類には、発話場面に存在する対象を指示する「直示¹⁶⁾」(deictic, deixis)と、話し言葉と書き言葉の文脈に現れた対象を指示する「文脈指示」(anaphoric¹⁷⁾)に大別される。後者は、話し言葉の「談話文脈」¹⁸⁾と、書き言葉の「文章文脈」¹⁹⁾とに下位分類される。

吉田(2004: 31)

談話文脈について吉田 (2004)は、「談話とは二人の人間が交互に話を交わすことであり、ここでは『聞く』という作業の中で指示活動がなされる。直示領域が空間系列にあったのに対し、談話文脈領域は時間系列にある。語られた音声は片端から時間の中に消えていき、残るのは音声言語によって触発された表象である」(ibid.: 41)とし、文章文脈については「直示領域における対象は、空間系列における構図であった。それに対し、談話領域における対象は時間系列に置かれていた。文章はそういった概念対象を、再び時空系列の中に文字言語として解き放ったものである。ページや画面の空間の中で文字は可視的であるし、時間の中に消えた文字もまたページや画面を翻して確認することができる」(ibid.: 51)と説明している。

吉田の分類に従えば、ビルマ語において口語体の形式は専ら話し言葉の「談話文脈」に現れ、文語体の形式は書き言葉の「文章文脈」に現れることが期待されることになる。この吉田の分類はビルマ語の指示用法を考察する際にも有効だと考えられ、本論での指示用法は、吉田 (2004)の基準を参考する。

表 9 吉田 (2004)による指示の分類

現場指示 (直示) deictic	文脈指示 anaphoric			
直示 deixis	談話文脈 discourse		文章文脈 textual	
	前方照応 anaphora	後方照応 cataphora	前方照応 anaphora	後方照応 cataphora

2.1.2. Diessel (2005)の記述

指示詞について Diessel (2005)は次のように定義している。

Demonstratives serve important pragmatic functions in the communicative interaction between the interlocutors. They are primarily used to orient the hearer in the speech situation, focusing his or her attention on objects, locations, or persons, but they also serve a variety of other pragmatic functions.

Diessel (2005: 93)

指示詞は、会話参加者の間の伝達の相互作用に重要な語用論的な機能を果たす。これらは物や場所、または人に対して聞き手の注意を向けさせ、聞き手を発話状況に適応させるために第一に使われるが、更に様々な語用論的な機能も果たす。

Diessel (2005: 93)の筆者訳

2.1.3. 岡野 (2007, 2011)の記述

岡野 (2007: 41)は指示詞の用法について、「指示詞には二つの用法がある。ひとつは相対的な空間的位置、すなわち話し手から近い位置にあるものと遠い位置にあるものとを指し分ける(直示的用法)。もうひとつは文脈上『すでに話したこと』や『これから話すこと』を指し示すものである(照応的用法)」と述べている。つまり、直示的用法は指示対象の同定に発話時における空間的位置が関与する場合の現場指示のことであり、照応用法は指示対象の同定に発話や文章内の文脈が関与する場合の文脈指示のことである。

岡野 (2011: 77)は指示語という用語を用い、ビルマ語の指示語の分類を a.指示詞と b.指示名詞とにした上、更に後者を i)位置指示名詞、ii)非位置指示名詞とに分け、「ビルマ語の名詞はその文法的振る舞いから非位置名詞（[-locational, -animate]）と位置名詞（[+locational, -temporal]）の2種類に大きく分けられる。非位置名詞は動詞の表す事態の参加者になる名詞であり、位置名詞は動詞の表す事態の時間的・空間的位置を表す名詞である。モノ名詞は非場所名詞の一種で、無生物の名詞を指す」としている。ただし、岡野 (2011: 77)にもあるように、非位置名詞の dà は人を指すことがある。

本論では岡野 (2011)の分類に従って、ビルマ語の指示詞を位置指示と非位置指示とに分ける。

2.1.4. トウザライン (2016, 2018)の記述

拙論 (2016, 2018)では、これまで多くの指示詞の研究に採用されてきた現場指示(直示)と文脈指示(照応)が、場合によっては切り離せない状況にあるということを指摘し、「文脈ありの現場指示」用法を設けることを提案した。文脈ありの現場指示とは、眼前にある指示対象を即座に直接指し示したにもかかわらず、言語的先行文脈を必要とし、現場指示と文脈指

示の機能が同時に働いていると考えられる場合に用いられる用法のことを指す。言語的先行文脈とは、聞き手にとっての旧情報や共有知識(聞き手が知っていると話し手が信じていること)といった何らかの暗示的な文脈情報のことを指す。なお、トゥザライン (2016, 2018) では、「文脈ありの現場指示」という用語を使用してきたが、本論文を機に「文脈参照現場指示」に改める。

2.2. 本論で扱う指示詞の用法の整理

本論で扱う指示詞とは特定の人や物などの対象を話し手・聞き手、書き手・読み手の間で同定できるように指し示す場合に用いる語とする。指示詞の用法は一般的に現場指示と文脈指示とに分類される。現場指示とは、指示対象の同定に発話時における発話者と指示対象の空間的位置が関与する用法であり、文脈指示とは、指示対象の同定に発話や文章内の文脈が関与される用法である。文脈指示には前方照応と後方照応とがある。前方照応は、テキストの中で指示対象が指示詞の前に現れているもの、後方照応は、テキストの中で指示対象が指示詞の後ろに現れるものである。それに加え、新たに提案する文脈参照現場指示とは、眼前にある指示対象を即座に直接指し示すにもかかわらず、言語的先行文脈を必要とし、現場指示と文脈指示の機能が同時に働いていると考えられる用法である。また、「文脈」の定義としては、竹内 (2003)による文脈効果 (context effect)という概念としての「文脈」という定義を採用する。文脈効果 (context effect)というのは「単語や文の記憶及び理解に対して、文脈が与える促進効果のこと。この場合、文脈には言語的なものだけではなく、記憶とその再生時の環境、会話参加者の発する非言語情報、話題に関する背景知識なども含まれる (ibid.: 2003: 530)」。

2.3. 本論の立場と指示の再分類

本論で扱う指示詞の用法の分類は基本的に吉田 (2004)の分類に従う。ただし、口語体の指示詞を考える際には、吉田 (2004)の分類に加えて拙論 (2016, 2018)で提案した「文脈参照現場指示」用法を用いる。

表 10 本論で用いる指示の再分類

現場指示 (直示)		文脈指示			
(純粋な) 現場指示	文脈参照現場指示	文脈指示			
		談話文脈		文章文脈	
		前方照応	後方照応	前方照応	後方照応

2.4. ビルマ語で書かれた文献による先行記述

ビルマ語で書かれた文献による先行記述としてミャンマー国内における Myanmar Language Commission²⁰の出版物や Pe Maung Tin (1953, 1953)、Khin Min (2007)などがある。以下にそれらの記述を概観するが、Pe Maung Tin (1953, 1953)はほぼ文語体指示詞の記述であるため、文語体指示詞を扱う第4章の方で述べることにする。

2.4.1. Myanmar Language Commission (1978-1980)によるビルマ語辞典

以下の表 11 は Myanmar Language Commission (1978-1980)に掲載されている指示詞（ဟံ/hà/や အရာ/āyà/などの形式名詞の要素が付加されていない、いわゆる基本形の形式を含む）を抽出し、解説とともに整理したものである。

表 11 ビルマ語辞典での指示詞とその解説

指示詞 (見出し語)	解説
ဒီ/dī/ ²¹	ဤ/ṭi/, သည်/ti/と同様。(Vol. 2: ဆ-န) p.172
သည်/ti/ ²²	近くにあるものを指す語。ဤ/ṭi/, ဒီ/dī/と同様。(Vol. 4: ရ-ဋ) p.218
ဤ/ṭi/ ²³	近い過去や近い未来と近くにある有生物や無生物などを指す語。 (Vol. 5: အ) p.198
အဲသည်/āyà/ ²⁴	示したいことやもの等または示したことやもの等を指す時に使用する語。(Vol. 5: အ) p.165
ထို/tʰò/ ²⁵	① 時間や場所において離れている有生物や無生物を指す語。 ② 有生物や無生物を表す語。(Vol. 2: ဆ-န) p.146
ယင်း/yín/ ²⁶	① あるものを再び指す時に使う語。ငါး/lāgáun/, ထို/tʰò/と同様。 ② ထိုအရာ/tʰò?āyà/, ငါးအရာ/lāgáun?āyà/と同様。(Vol. 3: ဝ-ဃ) p.222
ငါး/lāgáun/ ²⁷	① (前略) ယင်း/yín/の代わりに ငါး/lāgáun/を用いる。 ② ယင်း/yín/と同様。(Vol. 4: ရ-ဋ) p.155
ဟံ/hà/ ²⁸	① 指したやや遠くにいる・あること。ထို/tʰò/と同様。 ② 過去時にいた・あったことあるいはなかったこと。(Vol. 4: ရ-ဋ) p.243

2.4.2. Myanmar Language Commission (2005)による『ミャンマー文法』

ミャンマーの学校文法で用いられる Myanmar Language Commission (2005: 168)の『ミャンマー文法』（簡約版）によるビルマ語の伝統文法では、指示詞を指示代名詞と指示形容詞と2つのタイプに分けている。

指示代名詞について、ビルマ語の指示代名詞を、人称代名詞(私、あなた、彼、彼女など)、指示代名詞(コ、ソ、アなど)、疑問代名詞(どこ、なに、だれなど)、数量代名詞(1人、2人、3匹、4つ、全部、幾つ、少し、半分など)²⁹という4つの代名詞の中に位置付け、「ひとつの名詞句を指し示す代名詞」³⁰であると定義されている(ibid.: 46)。

一方、指示形容詞については、ビルマ語の形容詞をその意味によって1) 特徴を表す形容詞(賢い、良い、悪い、甘い、苦いなど)、2) 指示形容詞(コ、ソ、ア、何か、他など)、3) 数量形容詞(1、2、3、3つ、2つ、3つ、幾つ、全部、あらゆるなど)、4) 疑問形容詞(いくら、どれ、どこ、どの、など)³¹というふうに4つに分類され、指示形容詞は「名詞を指し示しながらその名詞を修飾する要素」³²であると定義している(ibid.: 58-59)。

また、指示詞形容詞について、i) ဤ/ṽ/、သည့်/ṽ/は近くにある何かを指す、ii) ထို/ṽ/は遠くにある何かを指す、iii) ထို/ṽ/、ငါးလွှာ/ṽ/、ယင်း/ṽ/、(ဤသို့သော/ṽ/、ထိုသို့သော/ṽ/)は表した名詞を指す³³、というように3つに分けて説明を行っている(ibid.: 168)。

2.4.3. Khin Min (2007)の記述

Khin Min (2007: 34)は、「ဟို/ṽ/と သည့်/ṽ/を昔は ထို/ṽ/、ဤ/ṽ/として使っていた。今も文語として使われている。口語の方はすでに ဟို/ṽ/、ဒီ/ṽ/となっている。話し手から遠いものを ထို/ṽ/(ဟို/ṽ/)で示し、近い所を ဤ/ṽ/(ဒီ/ṽ/)で示すということは一般に知られていることである」³⁴と述べている。つまり、現代ビルマ語の指示詞は現場指示の場合、ဒီ/ṽ/と ဤ/ṽ/はそれぞれ口語と文語の近称であり、ဟို/ṽ/と ထို/ṽ/はそれぞれ遠称であるということである。

2.4.1~2.4.3で紹介した文献のうち、Myanmar Language Commission (2005)は、指示詞の分類を行っているが、記述の方はほぼ Myanmar Language Commission (1978-1980)の内容を受けているため、以下では、主に Myanmar Language Commission (1978-1980)で概観された指示詞表 11 を活かし、その性質を表 12 にまとめる。Myanmar Language Commission (1978-1980)の記述で、近くないとされているものは遠称とみなす。

なお、Myanmar Language Commission (1978-1980)では、အဲဒီ/ṽ/が見出し語として掲載されていないが、これはビルマ語の歴史的な事情により正書法上 ဒီ/ṽ/を သည့်/ṽ/と書くのが正しいとされているためで、意味的に ဒီ/ṽ/と သည့်/ṽ/は全く同じである。同様に အဲဒီ/ṽ/と အဲသည့်/ṽ/も意味的に同じである。

表 12 ビルマ語辞典での指示詞とその分析

指示詞 (見出し語)	口語体	文語体	現場指示		文脈指示
			近称	遠称	照応
ဒီ/di/	○	×	○	×	○
သည့်/ti/	×	○	○	×	○
ဤ/yi/	×	○	○	×	○
အဲဒီ/ʔédi/	○	×	○		○
အဲသည့်/ʔéti/	×	○	○		○
ထို/tʰò/	×	○	×	○	○
ယင်း/yín/	×	○	×	○	○
၎င်း/lǎgáun/	×	○	×	○	○
ဟို/hò/	○	×	×	○	○

また、Khin Min (2007: 34)の指摘からは、ビルマ語母語話者は、口語形式の ဒီ/di/と ဟို/hò/は文語形式では ဤ/yi/と ထို/tʰò/にそれぞれ対応するという直観を一般に持っていることが分かる。これはビルマ語ネイティブである筆者の直観とも一致する。いずれにしても以上で紹介した文献は特に学習の観点を中心に書かれているものであり、辞書的な記述にとどまっている。Myanmar Language Commission (1978-1980)も簡約版と銘打ってあるものの、ミャンマーで公刊された辞書の中では最も大部な辞書である。しかし、あまり口語が重視されなかった時代に編纂されたからか、現代の口語体ビルマ語の指示詞として欠かせない形式である အဲဒီ/ʔédi/は掲載されていない。

2.5. ビルマ語以外の言語で書かれた文献による先行記述

日本語で書かれたビルマ語の指示詞に関する主な先行研究として、藪 (1992)、岡野 (2008, 2011)の記述がある。しかし、藪 (1992)は大辞典の記述であり、ビルマ語の指示詞について詳細に記述されている研究としては岡野 (2008, 2011)が唯一と言ってよい。この2つ以外にも大野 (1983)や澤田 (1999, 2012)、加藤 (2015)などいくつかの記述はあるが、入門書など学習の観点を中心に書かれているものもあり、辞書的な記述にとどまっている。日本語以外の言語では Okell (1969)、Wheatley (1982)、Myint Soe (1999)、と Jenny and San San Hnin Tun (2016)などの記述がある。以下にそれぞれの記述を概観する。

藪 (1992)の記述

藪 (1992)は、ビルマ語の指示代名詞を近称と遠称の区別が基礎となっておりとし、「di と hò の対立が基本となっているが、それにʔé³⁵を前接することによって、話し手と聞き手のあいだで既知のこと、了解済みのこと (ʔédi, ʔéhò)を示し、hó-を前接することによって、眼前

にあるもの (hódi, hóhò)を指し示すはたらきをするというように、di と hò の機能が拡大される³⁶⁾と述べ、?édi と ?éhòはそれぞれ di と hòの拡張形であると考えている。

表 13 藪 (1992: 582r)によるビルマ語の指示代名詞

	〈#+〉 ³⁷⁾	〈?é+〉	〈hó+〉
近称	di	?é-di	hó-di
遠称	hò	?é-hò	hó-hò

岡野 (2008, 2011)の記述

岡野 (2008, 2011)も藪 (1992)と同様な考えをしており、「ビルマ語の指示語は基本形と、それに接頭辞が付加された拡張形がある」と述べ、接頭辞として?é と hó を挙げている。2.1.3にも述べたように、岡野 (2011)はビルマ語の指示名詞を位置指示名詞と非位置指示名詞とに分け、以下のような体系を立てている。

表 14 岡野 (2011: 77)による指示語（基本形）の体系

		近称	遠称	不定称
指示詞		ဒီ- /dì= /	ဟို- /hò= /	ဘယ်- /bè= /
位置指示代名詞		ဒီ /dì/	ဟို /hò/	ဘယ် /bè/
非位置 指示代名詞	複合形	ဒီဟာ /dì = hà/	ဟိုဟာ /hò = hà/	ဘယ်ဟာ /bè = hà/
	融合形	ဒါ /dà/	ဟဝါ /hàwà/	ဘာ /bà/

大野 (1983)の記述

大野 (1983: 123)は、「ビルマ語の指示代名詞は、大別すると、近称、中称、遠称の3つに分かれる。けれども、この3区分は、必ずしも日本語の〈これ、それ、あれ〉に該当するわけではなく、状況によってはビルマ語の近称が日本語の中称に、中称が遠称に相当するような場合もある」とし、また「近称形と遠称形には、それぞれ hó という接頭辞が付き得るが、それは接頭辞がない場合に較べると、対象を強調する役割を果たす」と記述している。

澤田 (1999)の記述

澤田 (1999: 8)はビルマ語の指示詞を以下のように分類している。

表 15 澤田 (1999: 8)による指示名詞の分類

	指示			疑問
	近い	少し離れた	かなり離れた	
もの	dà「これ」 (dìhà)	ʔédà「それ」 (ʔédìhà)	hòhà「あれ」	bèhà「どれ」, bè「何」
場所	dì「ここ」	ʔédì「そこ」	hò「あそこ」	bè「どこ」
名詞修飾形	ʔédì-N「この N」	ʔédì-N「その N」	hò-N「あの N」	bè-N「どの N」, bà-N「何の N」

澤田 (1999: 8)はものの指示名詞について、dà と ʔédà はそれぞれ dì + hà, ʔédì + hà が融合してできたもの」とし、「原則として、ものや事柄を指す。人を指せるのは dà, ʔédà だけで、それらもごく限られた場合である」と説明している。場所の指示代名詞については「必ずと言ってよいほど、格句をつくる小辞-kò (着点), -hmà (位置), -kâ (起点) と共に用いられる」とし、特に「場所の指示名詞は、主語や名詞文の述部になれない。だから、『ここはどこですか?』³⁸という日本語の文をビルマ語で厳密に直訳することはできない」と述べている。また、指示名詞の名詞修飾形については「普通名詞を限定修飾する。人／もの／事柄／場所／時間を問わず用いられる」と述べている。

澤田 (2012)の記述

口語体と文語体の対応については澤田 (2012)の記述がある。澤田 (2012: 16)は指示詞を指示名詞と指示限定詞に分け、 $\text{ɔ̀/}h\text{ò/}$ と $\text{ɔ̀/}t^h\text{ò/}$ を遠称、 ɛ́/dì/ と $\text{ɛ́/}t^h\text{ì/}$ を近称、 $\text{à}^h\text{ɛ́/}ʔ\text{édì/}$ と $\text{wá}^h\text{ɛ́/}yín\text{,}$ $\text{qá}^h\text{ɛ́/}l\text{á}gáun\text{/}$ を照応に分類している。

加藤 (2015)記述

加藤 (2015: 37)は「ビルマ語の指示詞には、日本語の『コ・ソ・ア』の区別に似た 3 つの系列がある」とし、次のような定義をしている。

- dì 「この」 自分の領域内にあるものを指す
- ʔédì 「その」 話し相手の領域内にあるものを指す
- hò 「あの」 自分の領域と話し相手の領域の両方の外側にあるものを指す

(ibid.: 37)

Okell (1969)の記述

Okell (1969)は dì と hò はいわゆる指示詞、dà と hǎwà はそれぞれ dì と hò が派生した形であると分析している。ʔédì, ʔédà と ʔéhò に対しては dì, dà と hò に間投詞 ʔé- が前接された形であるとしている。

Okell and Allott (2001)

Okell and Allott (2001)は、*dì* を“this, that N, this place, here”とし、*ʔédi, ʔédà, ʔé hò*などを“more emphatic than simple *ဒါ ဒါ့ ဟို*”としている。また、*hò* を“that N; that place, there”として“usually at a distance from both speaker and listener”と記述されている。Okell and Allott (2001)では、文語体指示詞についての記述もあるが、文語体についてはその都度言及することにする。

Wheatley (1982)及び Myint Soe (1999)の記述

Wheatley (1982: 101-102)³⁹と Myint Soe (1999: 44-45)⁴⁰は、*dì* を近称、*hò* を遠称と記述している。

Jenny and San San Hnin Tun (2016)の記述

Jenny and San San Hnin Tun (2016: 144)によれば、*dì* は発話現場における話し手と聞き手の近くにある人間や事物を直接指す。対象が話し手と聞き手の間にあって両者の近くにある場合においても *dì* は常に話し手に近いことを指す。*dì* は常に定である。*hò* は話し手と聞き手から遠くにある人間や事物を指す。*hò* で指し示される人は必ずしも特定 (specific)あるいは指示的 (referential)⁴¹である必要がなく、現在の発話状況において無関係である。*hò* は話し手と聞き手の両方にとって未知である可能性がある。そして、*ʔédi* でマークされる人あるいは物は常に特定 (specific)かつ指示的 (referential)であり、話し手と聞き手両方にとって既知である可能性があるとしている。また、対象が話し手と聞き手の間にある場合、通常*ʔédi* は聞き手に近いことを指すとし、*ʔédi* には現場指示用法があるようなことを述べている。

更に、Jenny and San San Hnin Tun (2016)は、口語体ビルマ語の指示詞の体系について、以下のように述べている。

Colloquial Burmese has a three-way system of demonstratives, indicating different degrees of remoteness, relevance to the speech situation, and specificity. The demonstratives are always attached to nouns or other elements and do not occur on their own. They occur as prenominal modifiers in noun phrases, or with postposed case markers or similar elements in adverbial phrases.

(ibid. 2016, pp.143-144)

口語ビルマ語は、距離の遠近性、発話状況との関連性、特定性を表す指示詞の3項体系を持っている。指示詞は必ず名詞やその他の要素に付随しており、単独では現れない。名詞句内の名詞に前置された修飾語、または名詞に後置された格助詞またはそれに類似した副詞句内の要素として現れる。

(ibid. 2016, pp.143-144) の日本語訳

従って、以上で挙げた先行記述から分かるように、ビルマ語の指示詞を 2 項対立と考える立場（Okell 1969; Wheatley 1982; 藪 1992; Myint Soe 1999; 岡野 2008, 2011）もあれば、近称・中称・遠称という 3 項対立と考える立場（澤田 1999; 澤田 2012; 加藤 2015）もある⁴²。また、Jenny and San San Hnin Tun (2016)のような、遠近性、発話状況との関連性、特定性という 3 通りの体系を持っていると考える立場もある。

表 16 ビルマ語以外の言語で書かれた先行記述の整理

	dì	hò	ʔédì	ʔéhò
Wheatley (1982); Myint Soe (1999)	近称	遠称		
Okell (1969); Okell and Allott (2001); 藪 (1992); 岡野 (2008, 2011)	近称	遠称	近称 (dì の拡張形)	遠称 (hò の拡張形)
澤田 (1999); 加藤 (2015)	近称	遠称	中称	
澤田 (2012)	近称	遠称	照応	
Jenny and San San Hnin Tun (2016)	遠近性、発話状況との関連性、特定性			

いずれにしても以上で紹介した文献のうち、藪 (1992: 582-583)と岡野 (2008, 2011)の記述以外は、学習の観点を中心に書かれているもの（大野 1983; 加藤 2015; 澤田 1999, 2012 など）や、単なる分類にとどまっているもの（Okell 1969; Jenny and San San Hnin Tun 2016 など）であり、Wheatley (1982)と Myint Soe (1999)の方も記述が簡略である。本論では以上で述べた記述については、その都度必要な個所で言及することにとどめる。

2.6. 本論で対象とする指示詞の範囲

口語体の指示詞には ခီ /dì/、အဲခီ /ʔédì/、ဟို /hò/とそれぞれの指示詞に形式名詞 ဟံ /hà/が複合した ခီဟံ /dìhà/、အဲခီဟံ /ʔédìhà/、ဟိုဟံ /hòhà/という形式と更に音声的に融合した ဒါ /dà/、အဲဒါ /ʔédà/、ဟဝါ /hāwà/あるいは ဟဝှာ /hāhwà/（以下、ဟဝါ /hāwà/）という形式があり、本論では、それらの形式についての記述を行う。ခီ /dì/、ခီဟံ /dìhà/、ဒါ /dà/（dì 系）は話し手に近い対象を指す場合に用いるものであり、「近称」と呼ぶ。ဟို /hò/、ဟိုဟံ /hòhà/、ဟဝါ /hāwà/（hò 系）と အဲခီ /ʔédì/、အဲခီဟံ /ʔédìhà/、အဲဒါ /ʔédà/（ʔédì 系）はそれぞれ話し手から離れているあるいは離れていく対象を指す場合に用いるので「遠称」と呼ぶことにする。この 2 系は近称と排他に関係にあるという点で「非近称」と呼ぶ方がふさわしいかもしれないが、本稿では記述上の混乱を避けるため、「非近称」は採用しない。第 3 章以降でみるように、ʔédì 系は使用場面によっては hò 系とニュアンスが異なる場合や、ʔédì 系を hò 系とは単純に入れ替えられない場合があることなどを考慮し、この 2 つを区別して hò 系を遠称①、ʔédì 系を遠称②と呼ぶことにする。

表 17 口語体の指示詞

	近称	遠称	
		遠称①	遠称②
基本形	ᵐᵐ /dì/	ᵐᵐ /hò/	ᵐᵐ /ʔédì/
複合形	ᵐᵐᵐ /dihà/	ᵐᵐᵐ /hòhà/	ᵐᵐᵐ /ʔédihà/
融合形	ᵐᵐ /dà/	ᵐᵐᵐ /hǎwà/	ᵐᵐᵐ /ʔédà/

1) 口語体の現場指示の例

近称の例

- (3) (a) **dì-kò** là-pà-Ø.
 here-ALL come-PLT-vs.IMP
 ここへ来てください。

- (b) **dihà** pé-pà-Ø. / dà pé-pà-Ø.
 this give-PLT-vs.IMP / this give-PLT-vs.IMP
 これを下さい。

遠称①の例

- (4) (a) **hò-kò** ʔwá-pà-Ø.
 there1-ALL go-PLT-vs.IMP
 (あ) そこへ行ってください。

- (b) **hòhà** pé-pà-Ø. / hǎwà pé-pà-Ø.
 that1 give-PLT-vs.IMP / that give-PLT-vs.IMP
 それ／あれを下さい。

遠称②の例

- (5) (a) **ʔédì-kò** ʔwá-pà-Ø.
 there2-ALL go-PLT
 (あ) そこへ行ってください。

- (b) **ʔédihà** pé-pà-Ø. / ʔédà pé-pà-Ø.
 that2 give-PLT-vs.IMP / that2 give-PLT-vs.IMP
 それ／あれを下さい。

2) 口語体の文脈指示の例

(6)と(7)は口語体指示詞の文脈指示の例である。(6)の **di** は前文の大学卒業者や学のある人がだんだん多くなっているということを指し、(7)の **ʔédi** はゆうべ寝たところを指す。

- (6) bwêyâ-twè pyìnnnyàdaʔ-twè-kâ tǎp^hyébyé myá + là + nè-pì. nàun s^hò-yìn
graduate-PL educated person-PL-NOM gradually many+come+stay-vs.INC future say-COND
hmò-lò pauʔ-tô-mè. **di** já-t^hé-hmà kò-kâ mǎ-t^hújùn-yìn
mushroom-as grow-nearly-vs.IRR this.DET interval-inside-LOC oneself-NOM not-excellent-COND
ʔǎlägá-pé....
useless-FOC...

大学卒業者や学のある人がだんだん多くなっている。今後雨後の筍のように学者が増えてくる。この中で自分が優秀でないと無意味だ。

(MSD2012: 21)

- (7) mǎnê-nyâ-kâdô ʔǎhyê-beʔ-kán-kâ cauʔ-gù tǎ-k^hù-t^hé-hmà ʔeiʔ-tè.
last-night-CNTR east-side-beach-ABL rock-cave one-CLF-inside-LOC sleep-vs.RLS
ʔédi-kâ lè-lé ʔeiʔ mǎ-taiʔ-phú c^hìn-kaiʔ-lé ʔeʔtâ-tè.
there-ABL wind-DIS.also very not-blow-vs.NEG mosquito-bite-DIS.also better-vs.RLS

ゆうべは東の海岸の岩穴で寝た。**あそこ**は風もあまり吹かねえ。蚊に刺されるのもまじだった。

(MTT1995: 120), (MDM1983: 110)

次に、文語体の指示詞の例を挙げる。文語体では **ɲi/ʔi/**、**o^o/t^hò/**、**ωċ:/yín/**、**qċ:/lägáun/** の4つの形式を扱う。

表 18 文語体の指示詞

指示詞		
ɲi/ʔi/	現場	近称
	文脈	あり
o ^o /t ^h ò/	現場	遠称（遠称①／遠称②）
	文脈	あり
ωċ:/yín/, qċ:/lägáun/	現場	—
	文脈	あり

3) 文語体の現場指示の例

現代では文語体の形式を現場指示として実際に使うことはない。ただし、行事や式典、仏教儀礼などで使われる決まり文句の表現としては現在でも使われている。以下(8)と(9)はそれぞれ式典と仏教儀礼などにみられる例である。

近称の例

- (8) ʔi-twìn ʔāk^hánʔǎná pís^hóun-çáun cènyà-ʔaʔ-pà-tì.
here-LOC ceremony finish-fact announce-AUX-PLT-vs.RLS

これをもって閉会させていただきます。

- (9) yǎnê-yǎk^hû pyû-ʔaʔ-tó ʔi káun-hmû ʔǎsûzû...
today-now do-AUX-attr.RLS this.DET good-NMLZ the whole collection...

本日行ったこのすべての善い行い...

遠称（遠称①／遠称②）の例

現代では実際に現場指示として t^hò を使わなくなったため、遠近の距離を確認することができないが、(10)でみられるようにかつては遠称①と遠称②を区別せずに、遠称の用法として使われていたと思われる。

- (10) [...]t^hò-hmà-ká hywègùjǐ t^hò ʔǎní-ká ʔaʔbǎnyû[...]
[...]there2-LOC-DIS.csubj NAME.temple that2.DET near-DIS.csubj NAME.temple[...]

（前略）そちらにはシュエグージー、その近くにはタッピンニュ（後略）。

キッサン文学: Theippan Maung Wa, p.38

例(10)では、第一の指示代名詞 t^hò は話し手が存在している場所から離れたどこかを指し、第二の指示限定詞 t^hò は文脈指示であり、シュエグージーの近くという意味で用いられていることが読み取れる。

4) 文語体の文脈指示の例

以下(11)~(14)はそれぞれ ʔi、t^hò、yín、lǎgáun が文脈指示として使われている例である。(11)の ʔi は前述の「上品に食べる」ことを指し、(12)の t^hò は「インドにいるタキン・テインペーから届けられた密書」を指す。(13)の yín と(14)の lǎgáun はそれぞれ、前に述べた和平交渉協議と、青くて透き通った海底の珊瑚礁や魚など自然の美しさで有名なボツ島を指す。

- (11) t^hámín sá-hlyìn ʔǎtàn myì-ʔaun mǎ-sá-yâ-Ø. yìnyìncéjé sá-yâ-tì.
rice eat-COND sound sound-PURP not-eat-AUX-vs.NEG-vs.IMP politely eat-AUX-vs.RLS

ʔi-tô pyûmù-ç^hín-tì kòʔámùʔǎyà yìncé-ç^hín p^hyiʔ-tì.
 this.DET-as do-NMLZ-DIS attitude polite-NMLZ COP-vs.RLS

ご飯を食べる時、音をたてて食べてはいけない。上品に食べるのだ。このようにするのが丁寧な態度である。

Grade-3, Lesson-15, p.25

- (12) [...]ʔ^hò sà-hmà 1944-k^hûhniʔ zùnîâ-kòun zùlànîâ-ç^hán-lauʔ-hmà yauʔ+là-tì.
 [...]that.DET letter-DIS 1944-year June-end July-begin-approximately-LOC reach+come-vs.RLS
 [ファシスト革命に対する心の準備は早くからあった。しかし、団体行動はインドにいるタキン・テインパー (ウー・テインパーミィン) から届けられた密書から始まったと言える。]
 その手紙は 1944 年の 6 月下旬か 7 月上旬かに届いてきた。

Kyaymon: 2016/04/01, p.6

- (13) [...]yín sh^hwénwébwé-myá tâN+twá-ç^hê-tì.
 [...]that.DET meeting-PL stop+go-AUX-vs.RLS
 [パキスタンは 7 月に第一回の (和平) 交渉協議 を行ったがタリバンの最高指導者ムハンマド・オマルの死亡に伴い、タリバン側の確認が遅れたため] その協議が中断してしまった。

Myanmar Time: 2015/12/31-2016/01/06, p.50

- (14) [...]pyìdwín síbwáyé-louʔhán-hyìn-myá-kâ-lé lăgáun cún-twìn hòtè-myá
 [...]domestic economy-business-owner-PL-NOM-DIS.also that.DET island-LOC hotel-PL
 tìs^hauʔ-nàin-yàn seiʔwìnzá-hmû myá+là-çáun tî-yâ-tì.
 construct-can-PURP interest-NMLZ many+come-fact know-AUX-vs.RLS
 [青くて透き通った海底の珊瑚礁や魚など自然の美しさで有名なボツ島へ日帰りレジャーで観光する人が日々増加している。]
 国内の企業経営者たちも その島 でホテルを建てることに関心が高まってきているということが分かった。

Kyaymon: 2016/04/01, p.20

以上、本章では、指示用法の定義及び分類について検討し、指示用法の整理とビルマ語の口語体と文語体におけるそれぞれの指示詞および指示体系を考えた。次の第 3 章では、口語体指示詞について考察し、その次の第 4 章では、文語体指示詞について詳しくみていく。

3. 口語体ビルマ語の指示詞

本章では、口語体における指示詞の記述を行う。まず、口語体の指示詞とその体系を紹介し、次に、現場指示と文脈指示、及び新たに導入した文脈参照現場指示についての考察を行う。

3.1. 口語体における指示詞と体系

ビルマ語の指示詞は指示限定詞と指示代名詞の 2 つに分けることができる。指示限定詞としては ခံ /dì/, အံခံ /ʔédì/, ဟံ /hò/がある。指示代名詞は、更に位置指示代名詞の ခံ /dì/, အံခံ /ʔédì/, ဟံ /hò/と非位置指示代名詞の ဒါ /dà/, ဒီဟံ /dihà/, အဲဒါ /ʔédà/, အဲဒီဟံ /ʔédihà/, ဟံဟံ /hòhà/ (ဟံဟံ/hàwà) に分けられる。指示代名詞の dihà, ʔédihà, hòhà は指示限定詞と形式名詞 ဟံ/hà/が複合した形式であり、「これ(=この+もの)、それ(=その+もの)、あれ(=あの+もの)」に相当する。更に dihà, ʔédihà には融合形式の dà, ʔédà がそれぞれ存在する。hòhà にも融合型 hàwà⁴³が存在するが、純粋な指示代名詞としてはあまり使われない。

指示限定詞と位置指示代名詞は同形であるが、指示限定詞は名詞に先行してその名詞を限定する。位置指示代名詞は、(-kâ ‘ABL’ 「～から」や -kò ‘ALL’ 「～へ」、-hmà ‘LOC’ 「～に」などの) 格助詞(CM)を伴って空間上の相対的な位置を表す。非位置指示代名詞は物や生物を指示し、(-kâ ‘NOM’ 「～が」や -kò ‘ACC’ 「～を」などの) CM を伴う場合もある。

表 19 口語体指示詞の分類

語類			指示詞		
指示詞	指示限定詞		dì + N 「この」	ʔédì + N 「その」	hò + N 「あの」
	指示代名詞	位置指示代名詞	dì + CM 「ここ」	ʔédì + CM 「そこ」	hò + CM 「あそこ」
		非位置指示代名詞	dà/ dihà (+CM) 「これ」	ʔédà/ ʔédihà (+CM) 「それ」	hòhà (hàwà) (+CM) 「あれ」

3.2. 口語体の現場指示

2.2 で述べたように、現場指示とは、指示対象の同定に発話時における話し手と指示対象の空間的位置が関与する場合のことである。ビルマ語における現場指示は、身ぶり・手ぶり、顔の表情や視線などの身体動作⁴⁴がしばしば観察される。そのため、小説などの用例を引用する際には、口語体で書かれているあらゆる会話文だけではなく、場面や背景を描いた地の文なども考察対象となる。なお、用例を引用する際には、地の文と会話文を区別するために、会話文のせりふなどは “ ” で示し、日本語訳には 「 」 で示す。

本論で研究対象とする口語体形式には近称の *dì/ dà*、遠称①の *hò/ hòhà* と、遠称②の *ʔédì/ ʔédà* があるが、考察の際には説明の関係から、近称、遠称②、遠称①の順で記述する。現場指示は基本的に物理的な距離によって指示詞の選択が異なるものであり、例えば、近称 *dì* を用いた(15)と(16)のような例は発話時における発話参加者がいる場所を指す状況を表し、もし、*dì* を遠称②の *ʔédì* と入れ替えると、それぞれの発話参加者と指示対象である場所との距離が離れているという状況を表すこととなり、遠称①の *hò* と入れ替えると、それぞれの場所までの距離が近くない（少し離れている場合も非常に離れている場合もあり得る）という状況を表すことになる。

3.2.1. *dì/ dà*

dì/ dà は指示対象が話し手に近いと感じられる時に使われる。本論で紹介した全ての先行記述・研究でも *dì/ dà* が話し手に近い対象を指す近称であるとしている。

- (15) *ʔín ʔägû-t̚ʂ t̚kʰămyà t̚è-hyà-pì. dì ʔeìn là-tóungâ ɲà-nê*
 well now-CNTR [3].OBL-DIM die-AUX-vs.INC this.DET house come-when [1]-COM
ʔằtùdù hó-hò ná-hmà t̚hàin-pí zăgá-t̚wè pyó-lai?-câ-t̚à.
 together INTERJ-there1.DET near-LOC sit-SEQ language-PL say-AUX-mutual⁴⁵-nc.RLS
 うーん．．．今彼女はもう死んだ、この家に来た時は私と一緒にあそこら辺に座って話し込んでいたのに。

(MSD1994: 236)

- (16) *dà-p̚. dì n̚yà-hmà là-pí hnă-yeʔ lounloun mê + n̚-t̚à*
 this-FP this.DET place-LOC come-SEQ two-CLF completely forget+stay-nc.RLS
kân + káun⁴⁶-t̚à-p̚ hò cauʔs̚h̚aun-já-hmà-t̚à lé + n̚-yìn yè-t̚h̚é
 luck+good-nc.RLS-FP that1.DET rock.mass-interval-LOC-only topple+stay-COND water-inside
myó + t̚wá-p̚.
 flow+go-vs.INC
 ほんとだ。ここへ来てまるまる二日気を失ってたんだって（よかったね）、あの岩場の間で倒れてりゃ、水に溺れてしまう。

(MTT1995: 120), (MDM1983: 110)一部改変

(15)(16)は指示限定詞 *dì* を用いた例であり、発話時における話し手の存在している場所をそれぞれ *dì ʔeìn* 「この家」、*dì n̚yà* 「この場所」として直接指す場合である。このように話し手が発話時にいる場所を指す場合、身体動作を伴わなくても聞き手は理解可能である。

(17) “**dì** **dá-čí-kò** **bè-kâ** **pyàn + twê + là-tà-lé** **hìn.**”

this.DET knife-AUG-ACC where-ABL return+find+come-nc.RLS-Q INTERJ

{**yémyîn-kâ** **dá-kò** **s^hâ-cî-ywê** **yán-yín** **mé-tì.**}

NAME.person-NOM knife-ACC scrutinize-test-SEQ wave-while ask-vs.RLS

「ねえ、この刀、どこで見つけたんだ？」

矯めつ眇めつ刀を振りながら、イエミンが尋ねた。

(MTT1995: 262), (MDM1983: 262)

(17)は **dì** が発話者の手に持っている対象物を指す近称として用いられている場合である。対象物であるこの刀は、台風で舟が壊れて無人島に流れ着いて生き残っていた彼らにとって唯一の近代的な道具であり、みなが大事にしてきた物でもある。

(18) “**cănò-tô-hmà** **dà** **hyî-pà-tè** **?úlé-yâ.**”

[1m]-PL-LOC this exist-PLT-vs.RLS uncle-FP

{**yémyîn-kâ** **he?-k^hăné** **tă-c^hé?** **yì-pí** **báunbì-?ei?-t^hé-hmâ**

NAME.person-NOM laugh-ONM one-CLF laugh-SEQ trousers-pocket-inside-ABL

tăzòuntăyà-kò **s^hwé + t^hou? + pyâ-tì.**}

something-ACC pull+put.out+show-vs.RLS

「小父さん、僕等にやよ、これがありますよ。」

フンと笑ってイエミンは、ズボンのポケットから何かを引っぱり出して見せた。

(MTT1995: 49), (MDM1983: 36)

(19) {**tànjáun-kâ** **tì?ywe?-c^hau?-p^hyîn** **t^hou? + t^há-tì** **?ăt^hou?** **tă-t^hou?-kò** **hlán + pé-tì.**}

NAME.person-NOM leaf-dry-INS wrap+put-nc.RLS parcel one-CLF-ACC step+give-vs.RLS

“**dà-kâ** **bà-lé.**”

this-NOM what-Q

“**s^há-?ăp^hyi?** **tóun-p^hô-lè** **wăyòun-pyâ.**”

salt-as use-sake-FP bamboo.bush-ash

タンジャウンが枯葉で包んだ包みを一つ差し出す。

「何だ、これは？」

「塩に使うだ。竹の灰。」

(MTT1995: 232), (MDM1983: 222)

(18)と(19)は指示代名詞 **dà** の例である。(18)は発話者の発話と行為が同時に起きるという状況であり、所有物である対象の刀を引っぱり出して見せながら話しているという状況である。(19)は相手に差し出されてきた対象物を見て発話するという状況であり、聞き手であ

る相手が対象物である枯葉の包を話し手である自分のほうに差し出してきたので、受け取る側の話し手にとって自己に関わりが強いものとして **dà** が用いられるのである。この(19)の例で、**dà** で表された指示対象の包みというのは、発話時点ではまだ聞き手の手元にあるものなので、**?édà** と入れ替えることも可能である。もし、**?édà** で指し示された場合は、聞き手の存在を配慮することになり、人称の要因が関与することになる。人称の要因については 3.3.3.1 で後述する。

次にアンティーク雑貨屋で収集した自然会話の例を挙げる。店員 (A) が店に遊びに来た友人 (B) とその友達 (C と D) に店内の品物について案内している場面である⁴⁷。以下の(20)は店員 A が現場にいる人全員 (B, C, D) に対して話している場面であり、(21)は A と B が話している場面である。(20)と(21)からも分かるように、A は自分の近くや発話の場所である店を指す場合は **dì** を使用し、自分の近くにある人形などの品物を指す場合は **dà** を使用している。

(20) アンティーク雑貨屋での会話

A: **?ǎyou?**-twè **?ǎyou?**-twè. **dà**-twè s^hò **?ǎ-háUN**,
doll-PL doll-PL this-PL say NMLZ-old,
dì-hmà **dà**-twè s^hò **?ǎ-tì?**
here-LOC this-PL say NMLZ-new
人形、人形。(こちらの) これは中古品、これは新品。

2016/3/7 収録の自然会話

(21) アンティーク雑貨屋での会話

A: **dà** **ɲà** **?ùnláin**-hmà **yáUN + nè-tè**
this [1] online-LOC sell+stay-vs.RLS
これを私はオンライン (ショッピング) で売ってる。

B: **bè-hà-lé**
which-FN-Q
どれ？

A: **dì** **pyi?**sí-twè-kò
this.DET goods-PL-ACC
この品物を。

B: **?ùnláin-kânè** **yáUN-tà-lá**

online-ABL sell-nc.RLS-Q

オンラインで売っているの？

A: ?é mǎ-hou?-p^hú dī-hmà-lé là + wè-lô yâ-tè
INTERJ not-right-vs.NEG here-LOC-DIS.also come+buy-because get-vs.RLS
dàbè^mê ?ùnláin-hmà-lé yâ-tè
but online-LOC-DIS.also get-vs.RLS

うん。違う。ここに来て買ってもいい。でも、オンライン上でも大丈夫。

2016/3/7 収録の自然会話

以上の(15)~(21)の例から分かるように、dī/ dà は物理的に近い対象を指す場合に使われる。このような物理的距離が近いと感じられる場合の dī/ dà を近称と呼び、近称の dī/ dà は常に遠称①の hò/ hòhà と遠称②の ?édī/ ?édà と対立をなす。

従って、dī/ dà は現在話し手がいるところを含む場所や話し手に接近あるいは近いところにある対象物を指し示す場合に用いられる。

3.2.2. ?édī/ ?édà

?édī/ ?édà は、話し手から離れている、あるいは離れていく指示対象を指さし行為やそれに相当する行為を使って指し示すことができる。藪 (1992) と岡野 (2011) では、?é- が前接された場合は、「話し手と聞き手のあいだで既知のこと、了解済みのこと」を指すとしているが、(22)~(28)の例は、聞き手のことを考慮せず、話し手が示したいことやものを、何の前提もなしに直接指すことが可能である。

- (22) “?ǎkò ?édī t^hǎmèin-ṣà-lé cǎmâ yù-mè-nò.”
brother that2.DET htamein-fabric-DIM [1f] take-vs.IRR-FP
{kò^hwé-ḵâ sei?nyi?le?nyi? pyó-mî-tùlé méinmâ-ḵâ wèhmyâ-pí
NAME.person-NOM unhappily say-AUX-although wife-NOM share-SEQ
mǎ-k^hànzá-pè-Ø. t^hǎmèin-ḵò mǎsh^himǎsh^hàin sh^hwé+yù-tì.}
not-feel-FP-vs.NEG htamein-ACC extraneously pull+take-vs.RLS

「お兄さん、そのタメイン(ミャンマーの伝統衣装。女性が下半身に纏う筒状のスカート。)を私がもらうよ」

コ・トエーが不機嫌な様子で言ったのに、奥さんは夫の様子を気にしない。周囲を気にすることなくタメインを掴み取る。

(MSD2012: 55)

(23) {pètó ʔáyâwántà ʔàn-jeiʔ-hnîN lé-ŋá-hlân ʔă-kwà-kâ leʔsʰínkân + yù-yàn
 NAME.person happily iron-hook-INS four-five-step NMLZ-far-ABL hand.over+take-PURP

leʔ ʔă-hlân}

hand NMLZ-step

“ʔédì pán-çʰeín-kʰǎlé-kò tù-nê-ʔătù yó + ʔǎjò + pé-pà-Ø.”

that2.DET flower-basket-DIM-ACC [3]-COM-together mix+cremate+give-PLT-vs.IMP

ペートウはほくほくして、鉄フックから四、五歩離れた所で、受け取ろうと手を差し伸
べや矢先.....、

「その花籠は彼女と一緒にしてください....」

(KMT2004: 115), (MDM1998: 177)一部改変

(22)のʔédì は、受け手である奥さんが自分から離れているところにある指示対象であるタ
 メインを掴み取る場面であり、(23)のʔédì は、話し手が自分の手から受け取る側のペートウ
 の方へ離れていく花籠に対して言及する場面である。ʔédì で示される対象物は、基本的には、
 話し手から離れているものであるが、(23)のように離れていく瞬間の対象物を示すこともあ
 る。

(24) {yà-beʔ bé-hmâ ʔăkʰán-kò hnyún-ywê}

right-direction side-ABL room-ALL point-SEQ

“ʔédì-hmà nyâ-nyâ bìdiyò pyâ-tè-lè.”

there2-LOC night-night video show-vs.RLS-FP

右側の部屋を指して...

「あそこで毎晩ビデオを上映するの」

(KMT2004: 14), (MDM1998: 35)

(25) {tù-kâ dá-ʔwá-kò leʔ-nê puʔ + sán-yín dǎzòuntăkʰû

[3]-NOM knife-blade-ACC hand-COM rub+test-while something

cànsì + nè-pòun + yâ-tè. nauʔ cămâ ʔăkʰán-tʰè-kò myeʔsì + gǎzá-yín}

intend+stay-figure+get-vs.RLS then [1f] room-inside-ALL eye+play-while

“ʔédì sàywɛʔ-twè-kâ bà-ʔwè-lé”{-tê}

that.DET paper-PL-NOM what-PL-Q-HS

彼は刀の刃を手で触りながらあることを意図しているようである。そして私の部屋を
見回して「その資料はなんだ」と（私に尋ねてきた）。

(MKM2010: 73)

(24)のʔédì は、右横の部屋を漠然と何の前提もなしに指しており、(25)のʔédì は、相手の部

(26) {dì	méinmâ	myàN-myàN	seiʔ + pyɛʔ-yìN	myàN-myàN
this.DET	woman	quick-RDPL	mind + destroy-COND	quick-RDPL
pyàN-hmà-pé-hû	hyɛʔúzwa	tǎyeʔpìn-kò	twê-lè-yà}	
return-nc.IRR-FOC-QUOT	fast	NAME.tree-ACC	see-FP-place	
“ʔédà	tǎyeʔpìn	kʰò-tɛ̃”		
that2	NAME.tree	call-vs.RLS		

「それ、マンゴーの木と呼ぶ。」

Po Kya ‘ရိုဇင်တင့်ထူး’ 「ロージーキンティントウン」より

(MTT1995: 122), (MDM1983: 112)

次の(28)はアンティーク雑貨屋での自然会話で、店員 A が C の質問に対応する場面である。この時、A は B と D に違う話題について話しており、C は一人で店内を回りながら突然、近くにある珍しいものを指して話しかけたのである。A はその指示対象の珍しいものが自分から少し離れている場所にあるため、?édà を用いて C の話に対応する。A は実際に物理的に離れている場所にある珍しいものを指している。この珍しいものとは一度 C が指した対象であり、A は C の話を受けて答えようとしている。従って、A が用いた第一の?édà を現場指示として解釈することはやや不適切かもしれない。しかしながら、第二の?édà は A が対象についての説明に取り込もうとして指したものであり、対象に焦点を当てている場面であるため、現場指示の解釈は可能である。

C: dī ʔouʔsà-lé-kâ t^húzáN-tè.
this.DET thing-DIM-NOM strange-vs.RLS
これは珍しい。

A: ʔín, ʔò, ʔédà mǎ-houʔ-pʰú ʔédà ɲá pʰán-tê-hà
 INTERJ, ADM, that2 not-right-vs.NEG that2.OBL fish catch-attr.RLS-FN

うん、あ、それ違います。それは釣り具。

(中略)

ɲá pʰán-tà-lè dàbèmê dì-hmà tù-kâ mǐlóun taʔ-pí ʔǎ-hlá louʔ-tà
 fish catch-nc.RLS-FP but here-LOC [3]-NOM bulb put.on-SEQ NMLZ-beautiful do-nc.RLS

釣り用だよ。でも、ここで、彼・彼女（／これ）が、電球をつけて飾るのよ。

2016/3/7 収録の自然会話

以上、ʔédi/ ʔédà は指さし行為やそれに相当する行為さえあれば、漠然とした指示対象を何の前提もなしに指すことができるということを確認した。

3.2.3. hò/ hòhà (ʔéhò)

指示対象が会話参加者の視界内にあり、かつ話し手の手の届かないところにある場合、hò/ hòhà が用いられる。なお、ʔéhò の表現は hò とほぼ同様である。ただし、岡野 (2011: 83)は「『話し手の手の届く範囲にない』という遠称の空間指示的な意味を ə̀oʔ-/ʔé-hò=/が引き継いでいると考えている」としながら、拡張形ʔé-が付されているため、これを照応とみなし、空間指示ではないとしている。

(29) “houʔ-tè ʔulé cúN yauʔ-tô-mè. hò-hmà hò-hmà”
 right-vs.RLS uncle island arrive-nearly-vs.IRR there1-LOC there1-LOC
 {yémyîn-kâ hlán+ʔò-tǎpʰyîn kònàndà hlán+cí-laiʔ-tì.}
 NAME.person-NOM step+call-CAUS NAME.person step+look-AUX-vs.RLS

「ほんとだ、小父さん。島に着くぞ。ほら、あそこ、あそこ。」

イエミンが叫んだので、ナンダーは目を凝らして見た。

(MTT1995: 90), (MDM1983: 79)

(30) “hò-hmà hò-hmà myîn-yê-lá.”
 there1-LOC there1-LOC see-AUX-Q
 {tànjàun-kâ lèdàn-pʰyîn pyó-tì. kònàndà tànjàun pyâ-yà-tô cí-laiʔ-tì.}
 NAME.person-NOM whisper-INS say-vs.RLS NAME.person NAME.person show-place-ALL look-AUX-vs.RLS

「ほら、あそこ、見えるかね？」

声をひそめてタンジャウンが言う。

ナンダーはタンジャウンの指先を見た。

(MTT1995: 193), (MDM1983: 183)

(29)は、話し手の位置から少なくとも 10 マイルは離れた広大な海原の真ん中に浮かぶ長い小島が雨粒の中にぼんやり見えるという状況であり、(30)は、竹一竿あるかないかの場所にある一本の枝を指す場面である。

- (31) “kòtànjáun hò-hmà hò-hmà pò+là-pì. pé-Ø cǎnò pyi?-mè.”
 NAME.person there1-LOC there1-LOC float+come-vs.INC give-vs.IMP [1m] shoot-vs.RLS
 {yémyîN-kâ myú+nè-tó ɲámán-kò pyâ-tì.}
 NAME.person-NOM play+stay-attr.RLS shark-ACC show-vs.RLS

「タンジャウンさん、ほら！あっちに！あっちに！出て来やがった！おくれ、僕が投げる。」

イエミンが遊んでいる鯨を指す。

(MTT1995: 209), (MDM1983: 198)一部改変

- (32) “ɲà-kâ hò cau?s^hàun-já-t^hè-hmà lé+nè-tà-kwâ.”
 [1]-NOM that1.DET rock mass-interval-inside-LOC topple+stay-nc.RLS-FP.M
 {kònàndà-kâ pìnlè-hláiN-tô táwóunwóun yai?+nè-tó cau?s^hàun-kò
 NAME.person-NOM sea-wave-PL ONM strike+stay-attr.RLS rock.mass-ACC
 hnyùNpyâ-tì.}
 point-vs.RLS

「俺はあの岩場の間に倒れてたんだよ。」

ナンダーは、ゴーゴーと波の打ち寄せる岩場を指差した。

(MTT1995: 120), (MDM1983: 110)一部改変

(31)は高い岩場から鯨を指示する場面であり、(32)は、以前倒れていたという場所を指示している。

次の(33)は店員の A が店に見学に来た友人とその友達らに店の奥にある木琴を見せている場面の自然会話である。

(33) アンティーク雑貨屋での会話

- A: hò-hmà hòhà-kâ-cádô hò-hmà si?bǎyìn hòhà pa?tálá⁴⁸.
 there1-LOC that1-NOM-CNTR there1-LOC chess that1 xylophone

あそこ、あれは、あそこには将棋、あれは木琴。

2016/3/7 収録の自然会話

以上、現場指示として使われる hò が話し手の手の届かないところからぼんやり見えると

ころまでの範囲にある対象物を指し示すことができることを見た。

(34)は、会話参加者の視界内にある毛布をʔéhò を用いて直接指し示す場合であり、hò と入れ替えが可能な例である。このように眼前にあるものを指している場合は、物理的距離の遠近により、ʔédi や di を用いることもできる。

- (34) dàp^hyîN-byà ʔéhò cou? saùN-çí-kò yù + ʔwá-Ø.
well-PLT.M that1.DET [1m] blanket-AUG-ACC take+go-vs.IMP
それじゃ、あの俺の毛布を持って行け。

(TDS2012: 16)

- (35) wúnjí-kâ mã-hyî-pà-p^hú-k^hămyâ mã-hyî-pà-p^hú.
minister-NOM not-exist-PLT-vs.NEG-PLT.M not-exist-PLT-vs.NEG
ʔásiʔăwé tă-k^hû-t^hé yau? + nè-pà-tè-byâ
meeting one-CLF-inside arrive+stay-PLT-vs.RLS-PLT.M
ʔéhò ʔásiʔăwé-k^hán-t^hé-hmà-pà-k^hămyâ
that1.DET meeting-room-inside-LOC-PLT-PLT.M

大臣はいらっしゃいません。いらっしゃいません。ある会議に出席しています。その会議室の中でございます。

https://www.rfa.org/burmese/program_2/students-march-what-what-02062015134606.html (2018/7/7 取得)

3.2.4. hò の交替可能性

本小節では、hò の代替可能性についての考察を行う。(36)~(38)は hò との交替が不可能な例であり、(39)~(41)は hò との交替が可能な例である。

近称の例

- (36) ((3) (a) - 再掲)

dì-kò là-pà-Ø.
here-ALL come-PLT-vs.IMP
ここへ来てください。

- (37) ((3) (b) - 再掲)

dihà (/dà) pé-pà-Ø.
this.DET give-PLT-vs.IMP
これを下さい。

- (38) **dihà** (/dà) cǎnô tá-pà.
 this.DET-FN [1m].OBL son-PLT
 これは私の息子です。

(36)は発話時に話し手がいるところを示す場合であり、(37)~(38)は、話し手が近くにある対象物を指示する場合である。

遠称①と遠称②の交替可能な例

- (39) **hò/ ?édì-kò** twá-pà-Ø.
 there1/ there2-ALL go-PLT-vs.IMP
 (あ)そこへ行ってください。

- (40) **hòhà/ ?édìhà** pé-pà-Ø.
 that1/ that2 give-PLT-vs.IMP
 それを下さい。 / あれを下さい。

- (41) **hòhà/ ?édìhà** cǎnô tá-pà.
 that1/ that2 [1m].OBL son-PLT
 それは私の息子です。 / あれは私の息子です。

(39)~(41)はそれぞれ話し手と聞き手が現在いる場所や見える範囲内の物あるいは人を指す場面である。(39)は話し手と聞き手が同じ場所において、話し手が聞き手に現在いる場所から離れた場所に移動するように言う場面である。この場合、**hò** のほかに**?édì** が使われる。(39)の**?édì** は **hò** と同様に話し手からも聞き手からも近くない場所を、何の前提もなしに指示できると言える。(40)は見える範囲内のものを指す場合に **hò** と**?édì** が交替できる例であり、話し手がやや離れているところにいる聞き手の近くにあるものを要求する場面である。(41)は話し手から離れているところにいる人を直接指す場合に **hò** と**?édì** が交替できる例であり、父親が隣にいる友人にやや離れているところにいる息子のほうを指して言う場面である。(39)~(41)の **hò** と**?édì** はいずれも同一の対象を指すことができる。

以上(39)~(41)から分かるように**?édì** には遠称①の **hò** と交替できる現場指示用法がある。なお、**?édì** には、**hò** と交替できる例においても使用場面によってニュアンスが異なる場合や、**hò** のようになかなか遠いところまでの対象を指し示すことができないことなどの制約がある(3.3.3で後述)。

従って、本論ではビルマ語の指示詞の体系を、話し手に近い対象を指す場合を「近称」と

し、話し手から離れている対象や離れていく対象と遠くにある対象を指す場合を「遠称」とする、という 2 項対立の立場を取る。用例を考察した結果、*dì/ dà* は話し手に近い対象を指す場合に用いられる「近称」であり、*ʔédì/ ʔédà* と *hò/ hòhà* は話し手から離れているところにある対象を指す場合に用いられる「遠称」であることが確認できる。

指示詞の区分に関して 3 つの形式を持つ他言語の事情についても簡単に見てみよう。日本語では、一般的にはコを近称、ソを中称、アを遠称と分けているが、三上 (1970, 1992) のように「コレ・ソレ・アレは triplet ではなくて、double binary である」という考え方もある。東南アジアの言語においても、クメール語では 2 段階と考える学者もいれば、3 段階と考える立場もあり (上田 2009)、ラオ語も 3 つに分類しているのがみられる (鈴木 2002)。ベトナム語は近称・中称・遠称という中称を認めて 3 つに分けているようである (安達 2009)。2 項対立と、3 項対立のどちらが優勢とは言えない。

ビルマ語の場合、上述の通り学者によって 2 区分と考える立場 (藪 1992; 岡野 2008, 2011 など) と、3 区分と考える立場 (大野 1983; 澤田 1999; 加藤 2015 など) とがある。ただ口語体の指示詞に 3 形式あるといっても、上記の考察からは 3 項対立を積極的に支持する根拠はみられなかった。また 2 項対立というのはほとんどのネイティブの直観とも合致している。また第 4 章でみるように文語体は 2 項対立であることが明白である。

3.3. 口語体の文脈指示

2.2 で述べたように、文脈指示とは、指示対象の同定に発話や文章内の文脈が関与する場合のことである。口語体ビルマ語における文脈指示 (談話文脈) には前方照応と後方照応の両方の照応が観察される。前方照応は、テキストの中で指示対象が指示詞の前に現れているものを指し、後方照応は、テキストの中で指示対象が指示詞の後ろに現れるものを指す。つまり、指示詞が先行文脈内に現れる対象を照応する場合を前方照応と言い、後方文脈に現れる要素を照応する場合を後方照応と言う。第 2 章で述べたように、ビルマ語の文脈指示を吉田 (2004) の分類方法に従って、口語体は話し言葉の「談話文脈」、文語体は書き言葉の「文章文脈」とする。「文章文脈」については文語体の指示詞を扱う第 4 章で述べる。

ビルマ語については、岡野 (2011: 79) は「近称には前方照応と後方照応とがあり、遠称には前方照応がある。ただし、遠称の前方照応は『発話時の文脈において活性化されていない』という特徴がある」と述べている。なお岡野 (2011) は *ʔédì/ ʔédà* を *dì/ dà* の拡張形としているので、岡野の言う近称には *dì/ dà* と *ʔédì/ ʔédà* が含まれ、*hò/ hòhà* のみが遠称ということになる。

3.3.1. 前方照応

前述のように、前方照応とは、テキストの中で指示対象が指示詞 (照応) の前に現れているものを指す。特に、指示詞の直後の文末が *pé* 「~だけだ」で終わる文の場合は、前方照応

のみが使われる ((46)と(47)を参照)。以下にそれぞれ文脈指示として使われる口語体指示詞の用例を観察する。

3.3.1.1. dĩ/ dà

dĩ/ dà は単に、先行文脈内に現れる事物や事柄を指す場合に用いられる。

(42) ((6) - 再掲)

bwêyâ-twè	pyìnnnyàda?-twè-kâ	tăp ^h yébyé	myá + là + nè-pì.	nàun	s ^h ò-yìn
graduate-PL	educated person-PL-NOM	gradually	many+come+stay-vs.INC	future	say-COND
hmò-lò	pau?-tô-mè.	dĩ	já-t ^h é-hmà	kò-kâ	mă-t ^h újùn-yìn
mushroom-as	grow-nearly-vs.IRR	this.DET	interval-inside-LOC	oneself-NOM	not-excellent-COND
ʔălägá-pé.					
useless-FOC					

大学卒業者や学のある人がだんだん多くなっている。今後雨後の筈のように学者が増えてくる。この中で自分が優秀でないと無意味だ。

(MSD2012: 21)

(43) ...hín	c ^h ò-p ^h ôʔătwèʔ	băzùn-ç ^h auʔ	ŋăpî-nê	ŋànbyàye-kò	tóun-çâ-tê.
...cuisine	sweet-sake	shrimp-dry	fish.paste-COM	sauce-ACC	use-mutual-vs.RLS
ʔănyà-kâ	lù-twè-ʔăp ^h ô	dĩ	tóun-myó-kâ	míbòjàun-tóun	
upper.Myanmar-ABL	man-PL-sake	this.DET	three-kind-NOM	kitchen-use	
lêʔ + mă-hluʔ-nàin-tê		pyiʔsí-pô.			
hands+not-release-can-attr.RLS		goods-FP			

...料理の場合、旨味のため干しエビ、魚のペーストと魚醤を使う。上ミャンマーの人たちにはこの三種が台所に手放せないものなの。

(DAM2000: 150)

(44) hmyauʔ + pé-yâ-hmà-pô-kwâ.	dà	ʔămyóđáyé.
flatter+give-AUX-nc.IRR-FP-FP.M	this	national.affairs
勧めなきや、これは国のためだ。		

(MSD2012: 19)

(45) mín-kò	káun-pê	s ^h ò-tê	cáun-hmà	t ^h á-tê.	dàhà	p ^h èp ^h è-tô
[2]-ACC	good-EMPH	say-attr.RLS	school-LOC	put-vs.RLS	this	father-PL
paiʔs ^h àn	pó-lún-lô	mă-houʔ-p ^h ú.				
money	plenty-to.excess-because	not-right-vs.NEG				

お前を一流の学校に通わせる。**それは**お金が余っているわけではない、……

(MSD2012: 21)

(42)と(43)は指示限定詞 *dì* の前方照応であり、(44)と(45)は指示代名詞 *dà* の前方照応である。ただし、(42)~(45)での *dì*/*dà* は *ʔédì*/*ʔédà* と交替することが可能であり、その理由についてはまだ不明である。

また、次の(46)と(47)のように、指示詞の直後の文末に *pé*「~だけだ」で終わる文の場合は、前方照応のみに限られる。*pé* によってこの直後で談話の終結が宣言されているからではないかと思われる。更に、この2例の *dà* は *ʔédà* と交替すると不自然に感じられる。その理由としては、文章の文末で使われている *dà* には、前述の内容を締めくくるというまとめの役割を持っているからだと思われる。

- (46) *ʔé mā-taʔnáiN-pʰú-twè bà-twè louʔ + mā-nè-nê mín tàwùn-pé*
 INTERJ not-able-vs.RLS-PL what-PL do+not-stay-vs.IMP [2m] responsibility-FOC
mín paiʔsʰàn-tʰé-kâ pyaʔ-yâ-lêin-mè. dà-pé.
 [2m] money-inside-LOC cut-AUX-will-vs.RLS this-FOC
 ん？できないのなんのとほざくな。お前の責任じゃ。お前の金からさっ引くぞ。それだけだ。

(MTT1995: 84), (MDM1983: 73)

- (47) *ké ... kʰǎlé-tô-yè pòunbyìn-lé-kâdô dà-pà-pé-kwè.*
 INTERJ ... children-PL-VOC fable-DIM-CNTR this-PLT-FOC-FP
 さあ、みんな、お話は**これ**でおしまい。(直訳：これだけですよ。)

(MSD2012: 181)

3.3.1.2. ʔédì/ ʔédà

ʔédì/*ʔédà* も *dì*/*dà* のように、直前の先行文脈内に現れる事物や事柄を指す場合に用いられる。

- (48) ((7) - 再掲)
mǎnê-nyâ-kâdô ʔǎhyê-beʔ-kán-kâ cauʔ-gù tă-kʰù-tʰé-hmà ʔeiʔ-tè.
 last-night-CNTR east-side-beach-ABL rock-cave one-CLF-inside-LOC sleep-vs.RLS
ʔédì-kâ lè-lé ʔeiʔ mǎ-taiʔ-pʰú cʰín-kaiʔ-lé ʔeʔtâ-tè.
 there2-ABL wind-DIS.also very not-blow-vs.NEG mosquito-bite-DIS.also better-vs.RLS
 ゆうべは東の海岸の岩穴で寝た。**あそこ**は風もあまり吹かねえ。蚊に刺されるのもまし

だった。

(MTT1995: 120), (MDM1983: 110)

- (49) gûnâ pyó + twá-tê ʔǎyéci-tê sʰò-tê ʔǎcʰεʔ-kò hmaʔmî-tê-nò.
a.moment.ago say+go-attr.RLS important-vs.RLS say-attr.RLS fact-ACC remember-vs.RLS-FP
ʔédi ʔǎcʰεʔ-kò təcʰà laiʔnà-yâ-mè.
that2.DET fact-ACC certainly obey-AUX-vs.IRR

先ほどの話に大切だと述べた点を覚えているでしょう。その点をちゃんと守らなければなりません。

(48)と(49)はʔédi を用いた前方照応の例である。(48)のʔédi はゆうべ寝たところを指し、(49)のʔédi は前に述べた大切な点を指す。(48)の例は di と交替することができない。なぜならば、発話時における発話者の位置が関与しているからである。文脈内に現れるゆうべ寝た場所はなくまでも前述の文脈であり、発話時には話し手・聞き手の視界内の対象ではない。(49)のʔédi は di と交替できる。交替によって大きな意味の違いは生じないが、前に述べたことを更に展開する場合にはʔédi の方が用いられる傾向がある。

- (50) tūdābá-kò seiʔsʰínyé-sè-yìn ʔédà-nê nyìhmyâ-tê seiʔsʰínyé-hmû-myó
others-ACC miserable-CAUS-COND that2-COM equal-attr.RLS miserable-NMLZ-kind
kô-sʰi pyàn + yâ-sè-tê sʰò-tà-lé ɲèɲè-kǎdégà
myself.OBL-place return+get-CAUS-vs.RLS say-nc.RLS-DIS.also young-since
swé + là-kʰê-tê ʔǎswé tă-kʰû-pé.
believe+come-AUX-attr.RLS belief one-CLF-FOC

他人を惨めにさせたら、それに等しい惨めさが自分の元に戻ってくるってことも、子供の時から肝に銘じてきたモットーの一つよ。

(KMT2004: 51), (MDM1998: 85)

- (51) pídô ʔǎmê seiʔ-tʰé tìnkàyānân mă-kín-tà tă-kʰû hyî-té-tè.
then mother.OBL mind-inside suspicion not-free-nc.RLS one-CLF exist-still-vs.RLS
ʔédà-kâ ʔǎmê-tô sá + nè-tê sʰi-pà.
that2-NOM mother-PL eat+stay-attr.RLS oil-PLT

更に、疑っているのがまだ一つあります。それは私たちが食べている油です。

(DAM2000: 151)

(50)と(51)は ʔédi を用いた例であり、それぞれ、他人を惨めにさせることや疑っているものを指す。

(52) dǎgê pyaʔtǎnà-kâ ɲwè. houʔ-tè. ɲwè. tû-yê sáwuʔnèyé-ʔǎpyìn cánmàyé-nê
 real.OBL problem-NOM money right-vs.RLS money [3].OBL-GEN livelihood-besides health-COM
 pyìnnyàyé ʔédà-twè-ʔǎtwèʔ kòuncâ-mê ɲwè ʔédi ɲwè-kò bèdù pé-mǎ-lé
 education that2-PL-sake cost-attr.IRR money that2.DET money-ACC who give-vs.IRR-Q
 本当の問題は金、そうだ、金、あの子の生活のほかに健康と教育、そのためにかかる金、
 その金を誰があげるの？

(MSD1994: 153)

(52)では、最初のʔédà は子供の生活(衣食住)・健康・教育を指し、次のʔédi はそれらに必要なお金を指す。

3.3.1.3.hò/ hòhà (ʔéhò)

hò/hòhà は di/ dà と ʔédi/ʔédà とは異なり、直前の先行文脈内に現れる対象を指すことはしない。hò/hòhà の用法には、1) 遠くにある文脈内の要素と照応する場合(53) (54)と、2) 規定された場合での母語話者にとっての自分の身の回りの世界に関する知識・世界知識⁴⁹や固有名詞などの先行文脈内の対象を照応する場合(55) (56)の2つの特徴がある。なお、3.2.3にも述べたように、ʔéhò の表現は hò とほぼ同様であるため、例文のみを示す。ただし、岡野(2011: 79)は、hò には後方照応がないとし、「遠称は発話時点で共有している文脈では特定できないということであり、活性化 (activate)されていない情報である」と述べ、ʔéhò には ʔé-が付加されているので直示の意味を引き継いでいることはあり得ないとしている (ibid.: 82)。

1) 遠くにある文脈と照応する場合

(53) hò-câdô kòzòwín-nê-lé tàinbìn-ʔóun-Ø-pô. mǎ-twè-yìn twè-ʔàun
 there1-CNTR NAME.person-COM-DIS.also consult-AUX-vs.IMP-FP not-meet-COND meet-PURP
 hyà-pí-tà kʰǎ-kʰê-pè-tô.
 search-SEQ-only call-AUX-FP-soon

あっちでゾーウィンさんとも相談するのね。見つからなきゃ、見つかる迄捜して連れ戻す迄よ、……

(MTT1995: 38), (MDM1983: 24)

(53)は、家出した子達を捜すことについて親戚が悩んでいる場面での発話の一部である。話題の始めは、10 日くらい前に、家出した子達をモーラマインという所に見つけたと、地元のゾーウィンという知り合いから情報が入り、そこに行って捜すことであった。話題の中にはモーラマインという地名を数回も指して話を進めていたが、それ以外の地名のことは一切触れていなかった。そのため、この(53)のような、話が途切れた後の発話に hò を用いて対象のモーラマインを指すことができるのである。つまり、この話題の中にモーラマインという地名以外に、ほかに選択できる別の固有名詞がないため、途中で話が切れ

たとしても hò の使用によって指示対象を確実に指し示すことができるのである。

また、以下の(54)は、「ある女友達が息子を連れて遊びに来た」と、親子のことから話を始めたが、途中で別の話題に移り、しばらく経ってから、話の最後に hò を用いて冒頭に述べた親子を指した例である。この(54)は、話の中に、最初に出た親子以外に、ほかに別の親子が現れないため、聞き手や読み手に誤解を与えることは生じない。要するに他にも選択できるような内容の先行文脈に当たる要素がない場合、文脈内の相当離れたところでも照応できると言える。

- (54) “ʔämè-tô meiʔswè ʔämyódämi tă-ʔú tû ʔá-lé-nê ʔämê-sʰi
 mother-PL friend woman one-CLF [3].OBL son-DIM-COM mother.OBL-place
 ʔälè + là-çâ-tè.” (中略)
 visit+come-mutual-vs.RLS (中略)
 “hò ʔäʔämî-nê-tô tʰaʔ + mã-twê-yâ-tê-pʰú...”
 that1.DET mother.and.child-COM-CNTR repeat+not-meet-AUX-still-vs.NEG...
 「(私の) ある女友達は自分の息子を連れて私のところに遊びに来た。」(中略)
 「あの親子と (私) はその後会ってはないが、…」

(DAM2000: 21)

(53)と(54)には、指示詞と先行文脈内の要素との間に別の話題が挿入されているにもかかわらず、聞き手・読み手は迷うことなく話し手・書き手の指したい指示対象を読み取ることができ、全体の文脈も理解できる。このように指せるのは、hò には現場指示の場合は遠いところを、文脈指示の場合は時間軸上で現在から遠い位置(遠い過去)のこと(例えば、hò nè 「あの日」や hò kʰiʔ 「あの時代」など)を表す用法があるため、談話中であってもかなり前に述べたことも指すことができると思われる。

2) 世界知識

- (55) kànkáun-lé-kâ nènè-kʰǎlé hyî-té-tà gèhà-kò-tô ʔwá + mã-pô-laiʔ-pà-nê
 NAME.person-DIM-NOM young-DIM exist-still-nc.RLS home-ALL-CNTR go+not-send-AUX-PLT-vs.PROH
 ʔúkáun-yè-nò. hò-câdô tû-kò bèdù-kâ gǎyû + saiʔ-hmà-lé.
 NAME.person-FP-FP there1-CNTR [3].OBL-ACC who-NOM attention+set.up-nc.IRR-Q
 カンカウンちゃんはまだ幼いから施設へは送らないでね、ねえ、カウン小父さん、あつちでは誰が彼の面倒をみるの？

(MSD1994: 127)

- (56) yàngòun yauʔ-yìn-tô mín-tô louʔ-pʰô mã-lò-pà-pʰú hò-hmà
 NAME.place arrive-COND-CNTR [2m]-PL do-PURP not-required-PLT-vs.NEG there1-LOC

ʔălouʔtāmá ʔaʔʔaʔ hyî-tè.
labourer separately exist-vs.RLS

ヤンゴンに着いたらお前等がする必要はない。あそこには別に人夫がおる。

(MTT1995: 76), (MDM1983: 66)一部改変

(55)と(56)でhò が使用できる理由は、(55)では gèhà 「施設」という総称名詞の概念が人々の間で世界知識として知られていること、(56)ではヤンゴンという固有名詞によるからである。

(57) ...s^hò-pí tû-ʔá-k^hálé-kò tăyouʔ-k^hauʔs^hwé-s^hàin k^hò + ʔwá-pí
...say-SEQ [3].OBL-son-DIM-ACC chinese-noodle-shop call+go-SEQ
ʔéhò myózòun-hínjò-kò wè + taiʔ-ʔă-tê
that1.DET various.kind-soup-ACC buy+feed-vs.RLS-HS

…と言って、彼女の息子を中華そばの店に連れて行き、その具沢山のスープとやらを飲ませてやったそうだ。(岡野 2011: 82)

Po Kya ‘အခဲကုလီထမ်းခြင်း၏အကျိုး’ 「ただでクーリーに担がせる利点」より

(57)はʔéhò の文脈指示の前方照応の例であり、示される対象の中華そば屋の myózòun-hínjò 「具沢山のスープ」というのもビルマ人がよく知っている中華料理の一品なので、世界知識であると言える。

また、hò には明らかに現場指示ではなくかつ文脈指示だとも認めがたい、言語化されない場合の文脈用法も存在することを指摘しておきたい。

(58) “hò hlàingáun-çí-nê pìnlē-cauʔs^hàun-hmà”
that1.DET cave-AUG-INS sea-rock.mass-LOC
“ŋámán + hmyá-tê cauʔs^hàun-lá.”
shark+fish-attr.RLS rock.mass-Q
{yémyîn-kâ gáun + nyeiʔ-tì.}
NAME.person-NOM head+nod-vs.RLS

「あの、洞窟のある、水の中の岩場で……」

「鯨を釣る岩場か？」

イエミンが頷いた。

(MTT1995: 234), (MDM1983: 224)

(58)は話し手、聞き手とも洞窟が視界内にはない場面での会話である。聞き手の知識が実際

にどうであれ、話し手は聞き手が特定可能だと想定している。すでに対象が話し手と聞き手のあいだで共有している情報なので、話し手は聞き手が対象を知っていると信じて hò を用いて示したのであり、聞き手は確実に対象を特定できるとは限らない。このような(58)には談話中に具体的な先行文脈が現れないが、広い意味での話し手と聞き手が共有している知識という点で文脈用法と特徴が共通していると考えられる。hò で示される対象を聞き手が確実に特定できない場合が生じるというのも、その対象が聞き手にとっての狭い意味での一種の世界知識であるからだと思われる。このようなことについて、岡野 (2011: 79)は、「遠称は発話時点で共有している文脈では特定できないということであり、活性化 (activate) されていない情報である」と指摘している。2.5 で紹介した、Jenny and San San Hnin Tun (2016: 144)の言う、特定 (specific)あるいは指示的 (referential)になる必要がないという場合の hò もこのようなことを意図していると考えられる。

3.3.2. 後方照応

後方照応について吉田 (2004)は、前方照応と異なる特徴を指摘している。ビルマ語の後方照応も、吉田 (2004)が言う文脈領域において、日本語のコが後方照応できることと同様であると考えられる。吉田 (2004: 54)は、日本語のコが後方照応できることを「時間的ズレのある直示」とし、「文脈指示に際して後方照応のコ系語が用いられた場合、その指示対象は単語でなく、『センテンスか段落で示される長い語り』が多いことである」と述べ、(ibid.: 55)に「センテンスや段落は長いので、話し手はとりあえず『こんな○○』『この○○』とコ系語指示をすることで『今すぐ直示しますよ』というサインを送り、相手の期待を繋いでおいてから、後でゆっくりと内容を展開するのである。このように、コ系語が後方照応可能なのは、コの直示性という基本性格によるのである」と説明している。

ビルマ語の場合も、用例を観察したところ、dì, ?édì, hò の後方照応が用いられる際、吉田 (2004)の言う通り、「センテンスか段落で示される長い語り」が多い。ただ、hò の照応には揺れがあり、(64)のように、後方文脈内の要素が固有名詞であれば、長い話の場合ではなくても hò を用いることができる。

以下にそれぞれ dì/ dà, ?édì/ ?édà, hò/ hòhà の後方照応の例を挙げる。ただし、本論での分析対象のデータから ?édì/ ?édà と hò/ hòhà が後方照応できる例として検出したのは以下(61)~(64)がすべてである。

3.3.2.1. dì/ dà の例

(59) dì	?ácáun-nê	pa?te?-lô	k ^h ămyá-kò	pyópyâ-yìn	k ^h ămyá
this.DET	case-COM	concern-CNSQ	[2m]-ACC	explain-COND	[2m]
yòun-ç ^h ín-hmâ	yòun-mê.	tăk ^h à-kâ	cănò	myín	ṭă-kàun
believe-want-even	believe-vs.IRR	once-PAST	[1m]	horse	one-CLF
p ^h yi?-k ^h ê-p ^h ú-tê.					

この話をあなたにしても、おそらく信じてはもらえない。ある時ぼくは、一頭の馬になっ
てしまったことがある。

(KMT2004: 1)一部改変, (MDM1998: 15)

- (60) ʔé tǎnídǒ thì pauʔ-tè shò-yâ-hmà-pé. dī-lò-kwê.
INTERJ otherwise lottery win-vs.RLS say-AUX-FOC. this-as-FP
ʔǎtǒ tʰú-dè. mǎhniʔkâ-kwè....
quite strange-vs.RLS last.year-FP

うん、ある意味、宝くじがあたったようなもんだ。こうだよ。(つまりね、) かなり珍しい。去年だよ。(後略)

Po Kya ‘ᑐᑭᑦ’ 「まじめな人」より

(59)と(60)は、dī の後方照応の例である。この場合、dī が指している指示対象は、(59)のように、相手に信じてもらえないという話を具体的に語るセンテンスと、(60)のように、友人に自分がお店を持つようになった経緯を語る長い語りの形で現れる。(59)と(60)は、ʔédì/ʔédà を用いて表現すると前方の文脈を受けて内容を展開する場合になり、後方照応の読みができなくなる。

3.3.2.2. ʔédì/ʔédà の例

- (61) “kòkò ʔǎyìn tǎ-paʔ-kâ pyàn + là-té-lá”
NAME.person ahead one-CLF-NOM return+come-still-Q

“pyàn + mǎ-là-pʰyiʔ-pʰú.

return+not-come-AUX-vs.NEG

sàmébwé ní-lô ʔǎmè-kâ kʰǎnâkʰǎnâ pyàn + mǎ-là-nê-tê.
examination near-because mother-NOM frequently return+not-come-vs.PROH-HS

ʔédà pyó-mǎ-lô kòkò sàmébwé pí-tê-ʔǎthì tàunḡù-hmà nè-tô-hmà
that2 say-vs.IRR-QUOT NAME.person examination finish-attr.RLS-TER NAME.place-LOC stay-soon-nc.IRR
tʰátʰá-nê twê-nàin-hmà mǎ-houʔ-pʰú kòkò pyó-kʰê-çʰin-tà-twè hyî-tê”
NAME.person-COM meet-can-nc.IRR not-right-vs.NEG NAME.person say-AUX-want-nc.RLS-PL exist-vs.RLS

「ココさん先週帰ってきたっけ？」

「帰れなかった。試験が近づいてきたので母がしょっちゅう帰ってこないでって。それを言おうと、ココ(私)は試験が終わるまでタウン・グーにいることにするから、ター・ターさんとは会えなくなる。ココ(私)は伝えたいことがある。」

(MM1987: 151)

(62) ʔé-ʔé-ʔédà mé-mă-lô nyí pyó+pyó+nè-tà hò pyé dì pyé-kâdô
 INTERJ-INTERJ-that2 ask-vs.IRR-QUOT [2f] say+say+stay-nc.RLS there run here run-CNTR

t^há-pà-t̚-Ø ʔé-ʔédi-ʔă^hou? s^hò-tà-kâ
 put-PLT-soon-vs.IMP INTERJ-there-parcel say-nc.RLS-NOM

そ、そ、それを聞こうと思ってるんだけど、あなたはよく駆けずり回っていると言っているけれど、そ、その小包というのは？

(MSD2012: 94)

(61)と(62)はʔédà の後方照応の例である。ʔédà の指示対象は(61)では今後のことについて述べるセンテンスであり、(62)ではこれから尋ねようとしている事柄である。話し手は「○○を言おうと」、「○○を聞こうと」と言って、吉田 (2004: 55)の表現を借りると「相手の期待を繋いでおいてから、後でゆっくりと内容を展開する」のである。また、(61)と(62)のʔédà はその文脈から考えるに、「ところで」という意味の ə̀ə̀l̩ /ʔédàn̩/という接続詞から ə̀ /n̩/が脱落した形の ə̀ə̀ /ʔédà/であると解釈することも可能に思われるが、(61)と(62)のʔédà はその直前に主語名詞を置くことが可能であるのに対し、ʔédàn̩ では主語名詞を直前に置くと非文になってしまうことから、(61)と(62)のʔédà は接続詞ではないと判断した。

しかし、(59)と(60)の dì をʔédi と交替させると後方照応の読みができなくなることを考え合わせると、本来ʔédi/ ʔédà は先行文脈を受ける場合にのみ用いられると考えるべきかもしれない。一方、(61)と(62)の 2 例は吉田 (2004)の定義から考えると後方照応の例であるが、2 例とも‘~mä-lô’「~ようと」で終わっている節内の要素で、この節に続く部分が言い忘れたことを追加的に述べている要素であると解釈できる。従って、ここでは一種の言い淀みのフィラーであるとも考えられる。

3.3.2.3. hò/ hòhà (ʔéhò)の例

後方照応の hò/ hòhà は dì/dà やʔédi/ʔédà のように単に後続文脈の長い語りを照応するだけでなく、固有名詞を照応する例もみられる。

(63) k^hínk^hín-kâdô hò ʔăc^hín-t̚^hé-kâ-lò câ+nè-pì
 NAME.person-CNTR that1.DET song-inside-ABL-as fall+stay-vs.INC

... s^hò-t̚ ʔăc^hín-k̚^hălé-nê sâun-lai?-yâ-tà
 ... say-attr.RLS song-DIM-INS wait-AUX-AUX-nc.RLS

キンキンはあの歌のようになっている。... (歌詞)と歌われているように待っていたよ。

(TPM1998: 77)

(63)は hò の後方照応の例である。話し手は、まず、指示対象の「歌」を hò で指して次に歌を歌ってみせる。これは吉田 (2004)が言う「段落で示される長い語り」の例である。

また次の(64)は、後続文脈内の要素が固有名詞であれば、長い語りでなくても hò を用いて対象を同定することができる特殊な例である。分析対象のデータから hò が固有名詞を後方照応できる例として検出できたのは(64)の一例のみである。(65)はサイサイというチャンマーで有名な歌手の固有名を使った作例である。

(64) {tù da? mǎ-tì-tù-myá-ḳâ-mù} dī lū-hnè
 [3].OBL nature not-know-person-PL-NOM-CNTR this.DET person.OBL-TOP
 ?ùtùdùcàuntàundàun-nê hò-ḳâ p^hei?-lô zǎyei? fǎrí yā-pí
 foolish-INS there1-ABL invite-because cost free get-SEQ
 ?ìngǎlàn yau?-p^hú-tê dǎdínzà-s^hǎyà lāndān-pó-myá t^hā + nè-tà-lá{-hū
 NAME.place arrive-EXP-attr.RLS newspaper-teacher NAME.place-virus-any stand+stay-nc.RLS-Q-QUOT
 ?áunmê-çā-pè-myì.}
 think-mutual-FP-vs.IRR

彼のことを知らない人たちからしたら「こいつはおかしくて、あそこから招待されたので、費用をただで得てイギリスへ行ったことのあるロンドンかぶれの新聞記者だ」と思うのだろう。

(TDS2001: 25)

(65) hò-gā pwé lou?-mè-lô-tàun mǎ-pyó-yā-té-p^hú hyêzoun-gânè ṭwá-p^hô
 there1-ABL event do-vs.RLS-QUOT-EMPH not-tell-AUX-AUX-NEG first-ABL go-PURP
 hàn-pyìn + nè-tê sáínsáin-yê ?āmàgàn pǎrei?ta? tǎ-yau? s^hò-tôgà...
 gesture-prepare+stay-nc.RLS NAME.person-GEN hard.core fan one-CLF say-when...
 あそこがライブをやるともまだ言っていないのに、先に行く仕草をしているサイサイの熱烈なファンの一人であるので、...

以上、3.3.1 と 3.3.2 でみられるように、ビルマ語の指示詞には、前方と後方のいずれの照応も有している。次の 3.3.3 では、?édi/ ?édà が hò/ hòhà と交替できる例についての考察を行う。

3.3.3. ?édi/ ?édà が hò/ hòhà と交替できる例についての考察

本小節では、?édi/ ?édà が hò/ hòhà と交替できる例において、使用場面によってニュアンスが異なる場合の説明と、?édi/ ?édà と hò/ hòhà の違いについての説明を行う。?édi/ ?édà は話し手から離れている、あるいは離れていく指示対象を指さし行為やそれに相当する行為を使

って指し示すことができる。これに対し、3.2.3 で記述したように、hò/ hòhà は指示対象が会話参加者の視界内にある場合であれば、話し手の手の届かないところからぼんやり見えるところまでの範囲にある対象物を指し示すことができる。ただ、3.2.4 の(39)~(41)では hò と ?édà が交替可能だが、物理的な距離の違いがない。このように現場指示に物理的距離の差がみられない場合、hò/ hòhà と ?édi/ ?édà には以下 3.3.3.1 と 3.3.3.2 のような対立がみられる。

3.3.3.1. 人称の要因

hò/ hòhà と ?édi/ ?édà の選択は対象物に対する話し手の知識(所有者の有無や会話参加者の所有物であることなど)によるものである。例えば、以下(66)と(67)で示したように聞き手が所有している対象や手に持っているものを指して hò/ hòhà を用いて指すことは珍しいし、(68)で示したように、話し手自身が所有している対象について聞かれた相手の質問に答える場合にも ?édi/ ?édà が使われる。ただし、(66)の hò は、現場指示の読みなら可能である。

従って、ビルマ語の ?édi/ ?édà は聞き手に対する場合のみならず、話し手自身に対する対象を指す場合にも使われる。話し手と聞き手の領域内の対象には ?édi/ ?édà を、領域外の対象には hò/ hòhà を用いる傾向があると言える。

(66) 聞き手が所有しているものを指して発する場面

?hòhà/ ?édihà bèlau? pé-yâ-lé.
that1/ that2 how.much give-AUX-Q
***あれ／それは**いくらしたんですか。

(67) 聞き手が手に持っているものを指して発する場面

***hòhà/ ?édihà** bèlau? pé-yâ-lé.
that1/ that2 how.much give-AUX-Q
***あれ／それは**いくらしたんですか。

(68) 自分が所有している対象に関する相手の質問に答える場面

***hòhà/ ?édà** ṇátáun pé-yâ-tè
that1/ that2 50,000 give-AUX-vs.RLS
***あれは／それは** 50,000 チャットでした。

また、?édi 系を用いた(66)と(67)の例では、話し手は発話開始前から指示対象が聞き手の所有物であることを何らかの理由で知っており、すなわち潜在的な先行文脈を持っている。ということは、現場指示と文脈指示が同時に働いているという状況であり、次節 3.5 で言及する「文脈参照現場指示」の解釈が可能な場合でもある。

3.3.3.2. 同一の話題で同一の対象物を指示する場合

同一の話題で同一の対象物を指示する場合、初回は hò/ hòhà あるいは?édì/ ?édàが選択されても、二回目以降は?édì/ ?édàを用いる傾向がある。話題を変えない限り、一度 hò/ hòhà で指し示した対象をもう一度 hò/ hòhà で指すことは絶対しない。一度話題に登場した対象はその話題が続く限り?édì/ ?édàが用いられ、hò/ hòhà の使用は初回のみに限られる。もし、初回以外で hò/ hòhà が用いられる時、hò/ hòhà が指す対象は最初に語ったものではなく、別の対象を指すことになる。つまり、話題が変わったということを意味する。例えば、以下(69)Aと(70)Aに対する答えは(69)Bと(70)Bで示したように hò/ hòhà を用いることができない。このように文脈指示として使われる場合は、一般的には?édì/ ?édà しか用いない。dì/ dà が使われるのは指示対象が話し手の手に持っている場合になり、この場合は現場指示の解釈となる。

(69) A: mǎnê-kâ wè + là-tê hò/ ?édì le?su? bèlau? pé-yâ-lé
 yesterday-PAST buy+come-attr.RLS that1.DET/ that2.DET ring how.much give-AUX-Q
 きのう買ってきたあの指輪はいくらでしたか。

B: *hòhà/ ?édà ɲátáun pé-yâ-tè / ?édì le?su? ɲátáun pé-yâ-tè
 that1/ that2 50,000 give-AUX-attr.RLS / that2.DET ring 50,000 give-AUX-vs.RLS
 それは 50,000 チャットでした。／その指輪は 50,000 チャットでした。

(70) A: hò/ ?édì môun sá-p^hú-lá
 that1.DET/ that2.DET snack eat-EXP-Q
 あの菓子を食べたことがありますか。

B: sá-p^hú-tè *hò/ ?édì môun ?ăyán sá + káun-tà-pé
 eat-EXP-attr.RLS that1.DET/that2.DET snack very eat+good-nc.RLS-FOC
 食べたことがあります。あの菓子はすごくおいしいです。

以上、?édì/ ?édà は遠称の hò/ hòhà と交替できる場合があり、この2つの形式の使い分けがどのようになされるかについて考察した。hò/ hòhà は、日本語のア系とは異なり、相手の質問に対してオウム返しするような状況に使うことはしない。

3.3.4. 文脈指示の dì/ dà と?édì/ ?édà の置き換え

口語体文脈指示の dì/ dà と?édì/ ?édà とが相互に置き換えが可能な理由は今のところ不明である。dì/ dà は dì-lau?-pà-pè 「これくらいです」や dà-pà-pè 「以上です」などの話の締めくくりの場面でしばしば使われるし、?édì/ ?édà も前に述べたことを更に展開する場面で使われる例 ((48)~(52)を参照) などがよく観察される。この dì/ dà と?édì/ ?édà の使い分けについては更なる考察が必要ではあるが、3.3.2.2 で述べたように、?édì/ ?édà には明確な後方照応

第4章で後述する文語体指示詞にも近称の \mathfrak{N} が前に述べた説明や内容などの締めくくりを示したり、遠称の $\mathfrak{t}^{\mathfrak{h}}$ が前に述べたことを更に展開する場合に用いられたりするような傾向が観察される。

文脈指示の **dī** と **?édī** が現れる場合、指示対象はその **dī** と **?édī** の直前や直後、あるいはその近くの文に現れる。それに対し、**hò** は離れているところに現れる対象を参照するのが普通で、近くの対象を指せるのは固有名詞や世界知識に関する内容など特殊な場合に限られる。指示対象が遠く離れた文脈に現れていても、**hò** を用いることによって話し手・書き手の指し示したその指示対象を、すぐに聞き手・読み手が同定することができる。言い換えると指示対象になり得る内容が初期段階に提示されていたとしても、必要な場合に **hò** によってその文脈を呼び起こして指示することができるということである。このように遠くの文脈を同定できることは、**hò** は現場指示の場合と同様に「近くを指示していない」ため、以前に述べたことを聞き手に結果的に想起させる働きを持っていると解釈することができる。

3.4. 心理的要因によると思われる派生的な用法

3.4.1. di/ da の現れ

51

表現の一つである。つまり、指示対象に対する話し手自身の関わりが強いと感じられる場合の感情表現であると考えられる。

(71) ((44) - 再掲)

hmyau? pé-yâ-hmà-pô-kwâ. **dà** ʔămyóđáyé.
flatter give-AUX-nc.IRR-FP-FP.M this national.affairs
勧めなきや、**これ**は国のためだ。

(MSD2012: 19)

(72) cou? siʔtaʔ-tʰé wìN-mè. **dà**-hmâ myàNmà pì-mè.
[1m] military-inside enter-vs.IRR this-the.very NAME.people prefect-vs.IRR
dà-hmâ yauʔcá pì-mè.
this-the.very man prefect-vs.IRR
俺、軍隊に入る。これこそ、ビルマ人らしい。**これ**こそ、男らしい。

(TPM1998: 140)

(71)と(72)は、国のためだという愛国心が強く表されている文脈指示の例である。

3.4.2. ʔédi/ ʔédà の現れ

ʔédi/ ʔédà が用いられる要因が物理的な距離の基準では説明できない例として(73)と(74)のような例がある。これは指示対象に対して心理的距離があると感じられる場合、あるいは、指示対象との間に距離を置きたいと思う場合など、指示対象に対する話し手自身の関わりが強いと感じられない場合である。

(73) kʰɛʔ-tà-pé-nò. màuncò-màuncò lù-yó-kʰǎlé. mín bà-hmâ
difficult-nc.RLS-FOC-FP NAME.person- NAME.person person-honest-DIM [2m] what-even
mǎ-tʰi-pʰú. **ʔédà** mín tá-ʔǎsi? mǎ-houʔ-pʰú...
not-know-vs.NEG that2 [2m] son-pure not-right-vs.NEG...

困るなあ。マウン・チョー、マウン・チョー、真面目な子。君は何も知っていない。**それ**は君の实の息子じゃない...

(TPM1998: 124-125)

(74) **ʔédà**-hmâ nâ tá-kwâ.
that2-the.very [1].OBL son-FP.M
それこそ、俺の息子だ。

(TPM1998: 146)

以上の(73)は現場指示の例であり、(74)は文脈指示の例である。(73)に、?édà が用いられるのは「実の子ではない」ことを知っているからだと考えられる。そして(74)は、息子に対しての褒め言葉にもかかわらず、?édà が用いられているので、一定の距離感があるように思われる。

3.4.3. 心理的要因によると思われる派生的な用法のまとめ

3.4.1 と 3.4.2 に取り上げた(71)~(74)でみられるように di/ dà と ?édi/ ?édà の現れは、堀口 (1992: 77)による「対象に対する話し手の関わり方の気持ち」である。同じ状況の下で全く同一の対象のことを指す場合であっても、話し手の気持ちによって表現も自然に変わる場合がある。(75)と(76)は、同じ場面で同じ対象に対する同じ登場人物のせりふであるが、少しの時間で周囲の影響によって感情が湧き、自然に話し手による指示詞の選択が変わった例である。

- (75) ?édà-kâ pya?täna mã-hou?-pà-p^hú. ?ădikâ ?ăyécí-tà-kâ
 that2-NOM problem not-right-PLT-vs.NEG main importance-nc.RLS-NOM
 ?édi k^hălé-kò pé-çâ-mê myi?tà nau?pí găyûnà-nê sèdănà.
 that2.DET child-ALL give-mutual-attr.IRR benevolence and.then sympathy-COM goodwill
 それが問題じゃない。本当に大事なのはその子に与える慈愛、そして思いやりと誠意だ。
 (MSD1994: 155)

- (76) “di k^hăle-kò ?é?éc^hănc^hán cíbyín + là-yâ-?áuN cou?-tô ta?nàin-mè
 this.DET child-ACC peacefully grow+come-AUX-PURP [1m]-PL able-vs.IRR
 t^hin-pà-yê.” {t^hò-tô pyó-yín jû yín-t^hé-twìN t^hit^hik^hai?k^hai? p^hyi? + là-tì.}
 think-PLT-vs.IRR that-as say-while [2].OBL heart-inside-LOC hurt COP+come-vs.RLS
 「この子がのびのびと成長できるように我々がやってあげられると思う。」
 そう言って（彼の）心は苦しくなった。
 (MSD1994: 155)

(75)と(76)は、大金持ちで、非常に冷たい人間だと言われている人が、何人かの近隣の人が集まって、拾ってきた生後 6 ヶ月の幼い子を前にその子についての話をしている間に突然話に割り込んできた場面である。この大金持ちは、大量にお金が余っているが、自分が死にかかっていることを知っている。その一方、近所の人たちはお金がないが、その子をみんなで何とか頑張って育てようとする。そこで、死ぬ前に余っているお金をその子のために彼らに少し譲ろうと、最初に(75)に挙げたように、その子に対して ?édi を使用したせりふを出して彼らの話に割り込んできた。それから、その場の様子を見て、数十年前に見たことがある自分の子供たちのことを思い出し、心が和らぎ、(76)のように、拾ってきたその子に対し

ての表現が自然に di に変わっている。

(77)は父親が息子を職場の上司に紹介するという場面での例である。父親は息子を近くにまで呼び、息子の肩を掴んで紹介したにもかかわらず、近称の dà ではなく、遠称②の ?édà が用いられている。物理的距離の基準からは説明し難い例である。

(77)	{p ^h èp ^h è-kâ	cănô	păk ^h óun-kò	s ^h í-ywê	s ^h ou? + kàin-kâ}
	father-NOM	[1m].OBL	shoulder-ACC	toward-SEQ	grasp+hold-SEQ
	“?édà	tá-?ácízóun-pà	?ăkò-čí” {-hû	tòtò-hyínhyín-pìn	mei?s ^h ε? + pé-tì.}
	that2	son-eldest-PLT	brother-AUG-OUOT	short-clear-FOC	introduce+give-vs.RLS

父がおれの肩を掴んで「それは長男だよ、お兄さん」と手みじかに紹介してくれた。

Ma Sandar (2012: 6)

上記の(71)~(77)の例を観察すると、近称の di/ dà と遠称② ?édi/ ?édà には、それぞれ親近と疎遠の感情的ニュアンスが含まれていると考えられる。親近感、あるいは、疎遠感といった心理的要因がビルマ語の現場指示の用法に影響していると断言するには、更に詳しい考察を要する。しかしながら、少なくとも、心理的な問題に深く関係していると考えなければ、(75)と(77)の説明が難しい。参考までに、ベトナム語の指示詞については、親近感と疎遠感に関する報告がある（安達 2010）。

以上、di/ dà は場合によって、対象に対する話し手自身の関わりが強いと感じられる場合の感情的ニュアンスを持つ表現として用いられるのに対し、?édi/ ?édà は指示対象に心理的距離があると感じられる場合、あるいは、距離を置きたいと思う場合に用いられることがあると言えよう。話し言葉というのは話し手と聞き手の言語伝達に用いられる媒体であり、以上(71)~(77)のような物理的距離の基準からは説明できない例も観察される。本論ではこのような現場指示が物理的距離によらない場合を話し手の心理的な要因によるものと考えるところにする。

3.5. 口語体にみられる「文脈参照現場指示」

これまでの指示詞の研究に採用されてきた指示用法には現場指示(直示)と文脈指示という 2 つの用法がある。この 2 つの用法により、現場指示用法は言語的先行文脈が必要ではなく、文脈指示用法は先行文脈が必要(堤 2012 など)という考えが一般に受け入れられている。

現場指示用法: その指示対象の同定に、言語的先行文脈が必要ではない用法

文脈指示用法: その指示対象の同定に、言語的先行文脈が必要な用法

堤 (2012: 11)

しかし、このようによく知られている現場指示(直示)用法と文脈指示用法の分類基準では、ビルマ語の指示詞を説明するには不十分である。なぜなら、現場・眼前にある指示対象を指しながら、同時に言語的先行文脈を参照していると考えられる指示詞の用法があるからである。堤 (2012)のような二分法ではこのような現象を説明できない。

ビルマ語では眼前にある指示対象を直接指し示す場合に近称の *dà* ではなく遠称の *ʔédà* が用いられる場合があり、このとき潜在的な先行文脈があると考えられる。つまり、現場指示と文脈指示が同時に働いている状況である。このような状況から「文脈参照現場指示(/文脈に基づく現場指示)」という用法(以下、「文脈参照現場指示」用法)を設けることを提案する。2.1.4 と 2.2 で述べたように、文脈参照現場指示とは、眼前にある指示対象を即座に直接指し示したにもかかわらず、言語的先行文脈を必要とし、現場指示と文脈指示の機能が同時に働いていると考えられる場合に用いられる用法のことを指す。言語的先行文脈とは、聞き手にとっての旧情報や共有知識(聞き手が知っていると話し手が信じていること)といった何らかの暗示的な文脈情報(照応)のことである。

3.5.1 以降は、「心理的な要因では説明しきれない現象」と「従来の指示用法に関する問題」の2つの問題を設定して考察を行う。

3.5.1. 心理的な要因では説明しきれない現象

繰り返しになるが、3.4 では、先行研究で指摘されていなかった心理的な要因を用いることによって、物理的な距離では説明できない近・遠の問題が解決できることを説明した。本小節では心理的な要因では説明しきれない現象について考える。

指示詞というのは単に現場での物理的な距離だけを基準にしているのではなく、心理的な要因にも基づいている場合がある。指示対象に心理的距離があると感じられる場合、あるいは、距離を置きたいと思う場合には、*ʔédi/ ʔédà* で指示することができる。つまり、*ʔédi/ ʔédà* は対象に対する自己の関わりが強いと感じられない場合に用いられる。堀口 (1992: 77) による「対象に対する話し手の関わりの気持しだい」である。また、あくまで筆者の直観ではあるが、指示詞の *dà* は愛着を感じさせる指小辞-(*kʰǎ*)lé と親和性が高く⁵⁰、*ʔédà* は嫌味を感じさせる指大辞-*cí* と親和性が高いと感じられる。このような指小辞、指大辞との結び付きやすさによって、*dà* は親近感、*ʔédà* は疎遠感というニュアンスが与えられるように感じるのかもしれない。

しかしそれでも問題が残る。心理的な要因だけでは説明できない例があるからである。本論ではこのような感情的ニュアンス以外の要因が絡むと思われる例について、言語的なアプローチからの説明を試みる。その際、心理的だと考えられる *ʔédi/ ʔédà* と言語的だと考えられる *ʔédi/ ʔédà* の使用について、その選択基準がどのように規定されているかという問題が起きる。以下ではこの問題について考察する。

3.5.2. 従来の指示用法に関する問題

3.5 で述べたように、一般的には、堤 (2012: 11)の言うように、現場指示用法は言語的先行文脈が必要ではなく、文脈指示用法は言語的先行文脈が必要である。しかしながらビルマ語の場合、この 2 つの用法に当てはまらない例がある。ʔédà の一部の用法には眼前にある指示対象を即座に直接指し示したことにもかかわらず、言語的先行文脈を必要とし、現場指示と文脈指示の機能が同時に働いていると考えざるを得ないものが観察される。具体的には、話し手に近接しているものを直接指し示したにもかかわらず、近称の dà でなく遠称②のʔédà が用いられる場合である。このような傾向が現れるのは、1)過去に話し手と聞き手の間に、現在の話題について知識を共有する機会があり、2)話し手は以前の共有知識を聞き手が知っていると感じて直接言及せず、3)指示表現のみで導入する、という条件がある場合である。例えば、(77)の父親が息子を職場の上司に紹介する場面の例を取って説明すると、(77)は現場指示（直示）用法の原則に従うならば、遠称②のʔédà ではなく、3.5.3.1 で挙げる(78)のように近称の dà を使用すべきである。ただし、実際には(77)のようなʔédà を用いた用例が存在する。この(77)のように単に遠近という基準で説明できないばかりでなく、本研究で指摘した心理的な要因を考慮に入れてもなお説明が困難である。この問題を解決するにはこれまでの指示の二分法を再検討しなければならない。そこで、現場指示と文脈指示のほかに「文脈参照現場指示」という用法を導入して考察を行いたい⁵¹。

3.5.3. 「現場指示」と「文脈参照現場指示」の違いについての考察

次に dà、hò と ʔédà の性質を確認しながら、「現場指示」と「文脈参照現場指示」の違いを考察する。指示対象は、2.1.3 で述べた岡野 (2007, 2011)の指示詞の分類に従って、非位置名詞と位置名詞に分けて考える。非位置名詞には、生物名詞(人間または動物)と無生物名詞(物または事柄)があり、位置名詞は、時間的・空間的位置(時間または場所)を指す名詞である。

3.5.3.1. 現場指示用法 (近称)

2.2 と 3.2 で述べたように、現場指示とは、指示対象の同定に発話時における発話者と指示対象の空間的位置が関与する場合のことである。ただし、無生物名詞は眼前の具体的な物にしか同定できず、事柄は含まれない。事柄を対象とする場合、前方照応の読みとなる。

3.5.3.2 に述べる遠称①と遠称②の場合も同様である。

次の(78)~(80)の例は、指示対象が話し手・聞き手に近い場所にある場面である。

- (78) {p^hèp^hè-kâ cǎnô pǎk^hóun-kò s^hí-ywê s^hou? + kàin-kà}
 father-NOM [1m].OBL shoulder-ACC toward-SEQ grasp+hold-SEQ
 “dà tá-ʔácízóun-pà ʔǎkò-čí”{-hû tòtò-hyínhyín-pìn mei?s^hé? + pé-tì.}

this.DET son-eldest-PLT brother-AUG-QUOT shortly-clearly-FOC introduce+give-vs.RLS

父がおれの肩を掴んで「これは長男だよ、お兄さん」と手みじかに紹介してくれた。

Ma Sandar (2012: 6)一部改変

(79) **dà** p^hyεʔ-yâ-tê bópìn-pà.

this.DET erase-AUX-attr.RLS ball.point.pen-PLT

これは消せるボールペンです。

(80) **dà** cǎnò tεʔ-k^hê-tê cáun-pà.

this.DET [1m] climb-AUX-attr.RLS school-PLT

これは私が通っていた学校です。

(78)は父親が隣にいる息子を上司に直接紹介する場面であり、(79)は話し手が対象物を手に取って **dà** を用いて聞き手に向かって初めて紹介する場面である。(80)は、話し手と聞き手は、指示対象の学校を目のあたりにしている場面である。(78)は指示対象が人であるが、動物の場合も同様な解釈が可能である。

3.5.3.2. 現場指示用法 (遠称①／遠称②)

次の(81)~(83)の例は、指示対象が話し手・聞き手から離れているところにある場面である。

(81) **hòhà/ ?édà** tá-ʔǎcízóun-pà ʔǎkò-čí.

that1/ that2 son-eldest-PLT brother-AUG

あれ／それは長男だよ、お兄さん。

Ma Sandar (2012: 6)一部改変

(82) **hòhà/ ?édà** p^hyεʔ-yâ-tê bópìn-pà.

that1/ that2 erase-AUX-attr.RLS ball.point.pen-PLT

あれ／それは消せるボールペンです。

(83) **hòhà/ ?édà** cǎnò tεʔ-k^hê-tê cáun-pà.

that1/ that2 [1m] climb-AUX-attr.RLS school-PLT

あれ／それは私が通っていた学校です。

(81)は父親が離れているところにいる息子を上司に紹介する場面であり、(82)は話し手が **hò**を用いて離れているところの対象物を指す場面である。(83)は、話し手と聞き手から離れ

ているところにある学校を指している場面である。

3.5.3.3. 文脈参照現場指示用法

次の(84)と(85)は、非位置指示代名詞の?édà が近くにある「人間」や「物」を指す場合の例である。いずれも眼前にある指示対象を直接指し示しているにもかかわらず、近称の dà ではなく遠称の?édà が用いられる場合の潜在的な先行文脈を参照していると考えられる例である。

指示対象が人間である場合

(84) ((77) - 再掲)

[...] “?édà tá-?ácízóun-pà ?ákò-cí”{-hû tòtò-hyínhyín-pìn mei?s^hé? + pé-tù.}
[...] that2 son-eldest-PLT brother-AUG-QUOT shortly-clearly-FOC introduce+give-vs.RLS
[父がおれの肩を掴んで]「これが長男だよ、お兄さん」と手みじかに紹介してくれた。

Ma Sandar (2012: 6)

指示対象が物である場合

(85) ?édà p^hye?-yâ-tê bópìn-pà.
that2 erase-AUX-attr.RLS ball.point.pen-PLT
それが消せるボールペンです。

(84)と(85)は、話し手が自分に接近している指示対象を?édà を用いて指す場面の例である。(84)は父親が息子を上司に紹介する場面であるが、やや離れているところにいる息子を近くに呼んで、息子の肩を掴みながら上司に紹介した場合である。(85)は、話し手は談話の冒頭で聞き手の見たことのない対象物を手に取って聞き手に向かって?édà を用いて言った場合である。この(84)と(85)のように話し手が近くにあるものを?édà を用いて指し示した場合、この動作の裏にはなんらかの文脈情報があるとみられる。(84)の場合、聞き手である父親の上司は父親の長男と一度も面識がなかったものの、長男がいることやその長男は工科大学に通っていることなどを発話開始時の前から父親を通して知っている。(85)の場合も、消せるボールペンが存在する現場に到着する前に、話し手は聞き手に、このようなボールペンがあるということを話した、ということが前提になる。言い換えれば、現在の発話は過去の文脈情報によるものであり、現在の発話場面に具体的な先行文脈が現れなくても、その発話の背景にはある特定の文脈が存在している、ということである。

このような例は、日本語の指示詞にもみられる。日本語の現場指示(直示)に分類される場合での「コレ」は単純な現場指示用法では説明できない場面がある。例えば、日本語の「コレ」を用いて現場・眼前にある指示対象をいきなり「コレだ」と言って指し示した場合である。この場合の「コレだ」は、「以前に言及したことのあるものが現在目の前にあるこの対

象のことだ」「正にコレだ」という意味なので、その指示対象の同定には言語的先行文脈があるはずである。単純に現場指示とは認めがたい。「コレこそ」の場合も同様である。ただし、日本語の場合は眼前にあるものを近称で指しているの、ビルマ語のように形式と意味のずれが生じない。

以上の(78)~(85)で示したように、現場指示用法と文脈指示用法が区別できない場合もある⁵²。ʔédì/ʔédà と hò/ hòhà について注目すべきことは、(39)~(41)のような現場指示用法の場合 ʔédì と hò が交替可能であるのに対し、(84)と(85)のような現在の発話の背景に文脈があると想定される「文脈参照現場指示」用法の場合、ʔédà を hòhà と交替することは不可能である点である。

なお、(78)~(85)の例はいずれも話し手の判断を示して相手に同意を求めたり念を押したりする意味を表す場合に用いられる終助詞-lè や-pô などを伴うことによって「文脈参照現場指示」用法として用いることができる⁵³。

以上、「文脈参照現場指示」用法を用いることによって、これまで心理的な要因だけでは説明できなかったʔédà が言語的なアプローチからも説明できるようになる。なお、場所を直接指し示す場合にはこのような「文脈参照現場指示」用法はみられない。なぜならば、事物などは指し示す役割をする発話者より先に現場に存在することが可能であるが、現実の場というのは発話者が現れて初めて規定されるものであるからである。また、指示対象が事柄である場合も「文脈参照現場指示」用法は成立しない。事柄というのはあくまでも文脈情報であり、直接指し示すことができないからである。

3.5.4. 「心理的な要因」と「文脈参照現場指示」の区別についての考察

本小節では、3.4 で述べた「心理的な要因」と「文脈参照現場指示」をどう区別するかという疑問について考えてみる。その理由としては物理的な距離で判明できる場合とそうでない場合とで区別されていると考えられる。(39)~(41)のように実際に話し手から離れているところやその場にある対象物を指し示すような場合は物理的な距離であると判断できる。一方、のように眼前にある指示対象を直接指し示す場合に dà (近称)ではなく、ʔédà (遠称②)が用いられる場合があり、このときには物理的な距離ではなく、潜在的な先行文脈があると考えられる。つまり、現場指示と文脈指示の機能が同時に働いていると考えられる。ただし、ʔédà がこのように文脈の情報にかかわるものによると思われるのは 3.5.3.3 で触れたように-lè や-pô を伴わない場合のみ有効である。

本小節では、3.5.1 で述べた「心理的な要因」における現場指示と「文脈参照現場指示」をどう区別するかという疑問について考えてみる。いずれも物理的に近い物を指示するものであり、dà (近称)が本来であれば使われねばならない状況であるにもかかわらず、ʔédà (遠称②)が選択されるという現象である。(73)は物理的距離からすれば dà が選択されるはずであるが、心理的要因によってʔédà が用いられている。しかし参照できる文脈は見当たらず、

文脈参照現場指示でないことは明らかである。一方、(84)と(85)も眼前にある指示対象を直接指し示すので *dà* が使われるはずであるが、潜在的な先行文脈があるため *ʔédà* が用いられている。ただし(84)は心理的要因も同時に働いていると考えられる。つまり文脈参照現場指示であるということは心理的要因が同時に働いていることを排除するものではない。しかし(85)の例では心理的要因は一切働いておらず、文脈参照をしているがゆえに *ʔédà* が選択されたと考えられる。ただし、*ʔédà* がこのように文脈的情報にかかわるものによると思われるのは 3.5.2 で触れたように *-lè* や *-pô* を伴わない場合のみ有効である。

3.5.5. 情報構造からみた「文脈参照現場指示用法」の性質

3.5.3.3 で示したように(84)と(85)は近くにある「人」や「物」を指す場合であるが、この(84)と(85)の発話内には指示詞 *ʔédà* が指している内容と一致する具体的な同一指示が存在しない。言い換えると、同定しようとしている対象が発話時点に話し手と聞き手の視点が関与できる空間内に存在しているにもかかわらず、何と同定されるのか、発話時点までに共有しているはずの文脈を参照しない限り知り得ない。

ʔédà が指している文脈の中にある情報は、話し手と聞き手のあいだで共有している情報ではあるが、聞き手にとっては目の前にある具体的な対象との関係が話し手の発話によりはじめて明確に意識されることになる。完全に文脈(前方照応)とは言えず、単純に現場指示とも認め難い用法である。そのため、本論では、2.2 で採用した、竹内 (2003: 530)による文脈効果 (context effect) という概念での「文脈」という定義を用いて論を進めてきた。

「文脈参照現場指示」用法は、話し手と聞き手のあいだで共有している知識である既知のことを述べるという点で、情報構造の「旧情報」⁵⁴の考え方と非常に似通っている場合があるが、「旧情報」だけではなく「新情報」も解釈に不可欠である。

(84)での「*ʔédà tá-ʔácízóun-pà*(これは長男です)」は「*tá-ʔácízóun*(長男)はこれです」という意味ではなく、「私があなたに言ったことのある *tá-ʔácízóun*(長男)というのは現在のこの人(これ)です」という意味で使われているものである。「話し手に長男(*tá-ʔácízóun*)がいる」というのがこの発話が行われた時点で話し手・聞き手が共有する旧情報であり、「現場にいるこの人物がその長男である」というのがこの発話によって聞き手が新たに得た新情報で、それが *ʔédà* によって示されていると考えられる⁵⁵。同様に、(85)での「*ʔédà pʰyeʔ-yâ-tê bópìn-pà*(これは消せるボールペンです)」も「*pʰyeʔ-yâ-tê bópìn*(消せるボールペン)はこれです」という意味ではなく、「私があなたに言ったことのある *pʰyeʔ-yâ-tê bópìn*(消せるボールペン)というのは今ここにあるこの類のものです」という意味で使われているものである。ただ、(84)での *ʔédà* は *tá-ʔácízóun*(長男)という個性の高い人間を指しているため、指し示される対象(被対象)は *tá-ʔácízóun*(長男)以外の指示対象と代替することはできない。これに対し、(85)での *pʰyeʔ-yâ-tê bópìn*(消せるボールペン)は個性のない物であるため、この場合、特定の *pʰyeʔ-yâ-tê bópìn*(消せるボールペン)を指しているのではなく、総称の *pʰyeʔ-yâ-tê bópìn*(消せるボールペン)を意味していると考えなければならない。

3.5.6. 「文脈参照現場指示」のまとめ

3.5 節では物理的に話し手の近くにある対象物を指すʔédi/ ʔédà についての考察を行った。その結果、これまでよく知られている現場指示（直示）と文脈指示という用法の分類基準のみでʔédi/ ʔédà を説明するには不十分であることが分かった。本来現場指示は先行文脈を必要とせず、現場・眼前にある指示対象を何の前提もなしに直接指し示す。しかしながら、ビルマ語のʔédi/ ʔédà には、これまでの現場指示の基準に従って説明できる場合もあれば、そうでない場合も観察される。後者はこれまでのビルマ語研究で指摘されたことのない現象であり、このような例は日本語の指示詞「コレ」にもみられることを指摘した(3.5.3.3 を参照)。

以上、口語ビルマ語の指示詞の現場指示機能を再検討し、ʔédi/ ʔédà に現場指示用法があることを示した。また、現場の指示対象を直接に指し示す場合に用いられる指示詞は発話の冒頭に置かれて使用されたとしても、純粋に現場指示（直示）とは認めがたい潜在的な先行文脈を受ける例があるということを指摘した。

次の表 20 はビルマ語の純粋な現場指示と文脈参照現場指示を整理したものである。

表 20 純粋な現場指示と文脈参照現場指示の分類

(1) 心理的要因が働かない場合

距離			純粋な現場指示		文脈参照現場指示		心理
			位置	非位置	非位置		
					-lè/-pô を伴う	-lè/-pô を伴わない	
近い	近称		dì	dà	dà	×	
遠い	遠称	②	ʔédì	ʔédà	ʔédà	ʔédà	
		①	hò	hòhà	hòhà	×	

(2) 心理的要因が働く場合

距離			純粋な現場指示		文脈参照現場指示		心理
			位置	非位置	非位置		
					-lè/-pô を伴う	-lè/-pô を伴わない	
近い	近称		dì	dà	dà	×	親近感
遠い	遠称	②	ʔédì	ʔédà	ʔédà	ʔédà	疎遠感
		①	×	×	hòhà	×	関係なし

以上、本章では、口語体ビルマ語にみられる現場指示、文脈指示と、文脈参照現場指示に

についての考察を行い、口語体指示詞の機能を明らかにした。次の第 4 章では、文語体指示詞についての考察を行う。

4. 文語体ビルマ語の指示詞

本章では、文語体で書かれたキッサン文学が興隆した 20 世紀初頭から現在までの文献を中心とした文語体ビルマ語における指示詞の記述を行い、 $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$, $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$, $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$, $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$ のそれぞれの機能を明らかにする。文語体は、基本的には「文脈指示」用法のみが存在すると考えられるが、物語などの場合は現場指示用法も観察される。

4.1. 文語体における指示詞と体系

文語体の指示詞についても指示限定詞と指示代名詞とに 2 つに分けて記述する。現代文語体ビルマ語の指示詞としては $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$, $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$, $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$, $\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/$ の 4 つが挙げられる⁵⁶。本論ではこの 4 つの形式のみを考察の対象にする。限定詞の ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ はいずれも「 $(\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/\text{ၵၢ}/) + \text{N} + (\text{CM})$ 」の形で、名詞の前に置かれ、その名詞を限定する指示限定詞として用いられる付属語である。これに対し、代名詞の ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ は単独で先行名詞句の代替表現として用いられる自立語である。代名詞の場合、空間的・時間的位置を指す位置名詞を対象とする「位置指示代名詞」の ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ と物名詞句や生物名詞を対象とする「非位置指示代名詞」の ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ , ၵၢ とに更に分類される。

表 21 文語体指示詞の分類

語類			文語体の指示詞			
指示詞	指示限定詞		$\text{ၵၢ} + \text{N}$ 「この」	$\text{ၵၢ} + \text{N}$ 「その」	$\text{ၵၢ} + \text{N}$ 「その」	$\text{ၵၢ} + \text{N}$ 「その」
	指示代名詞	位置指示代名詞	$\text{ၵၢ} + \text{CM}$ 「ここ」	$\text{ၵၢ} + \text{CM}$ 「そこ」	$\text{ၵၢ} + \text{CM}$ 「そこ」	$\text{ၵၢ} + \text{CM}$ 「そこ」
		非位置指示代名詞	$\text{ၵၢ} (+ \text{CM})$ 「これ」	$\text{ၵၢ} (+ \text{CM})$ 「それ」	$\text{ၵၢ} (+ \text{CM})$ 「それ」	$\text{ၵၢ} (+ \text{CM})$ 「それ」

4.2. 研究対象および研究方法

本論は現代文語体ビルマ語を対象にしているため、文語体で書かれたキッサン文学が興隆した 20 世紀初頭から現在までの文献を中心に考察を行った。教科書についてはミャンマーの基礎教育に使用される、小学校 Grade-1~Grade-5、中学校 Grade-6~Grade-9、高校 Grade-10~Grade-11 の国語の教科書⁵⁷やミャンマー国内新聞におけるビルマ語版の記事などを対象に分析を行った。教科書は、2014-2015 年度用として定められた教科書から詩（韻文）、脚本（コンバウン王朝時代 1752~1885）及び、コンバウン王朝時代以前の文献を除く散文を対象とした。

新聞は、ビルマ語版の国営日刊紙である Myanmar Alinn Daily (မြန်မာအလင်း) と Kyaymon (ကျေးမုံ), 民営週刊紙である Myanmar Time (မြန်မာတိုင်းမ်) と The Voice Weekly、民営日刊紙であ

る The Irrawaddy (ဧရာဝတီ) の 5 紙を選択した。国営紙はいずれも 2016 年 4 月 1 日を用い、民営紙は 2015 年 12 月 31 日-2016 年 1 月 6 日の Myanmar Time、2014 年 12 月 22 日-28 日の The Voice Weekly と、2015 年 03 月 29 日の The Irrawaddy を使用した。具体的な分析対象は投書や広告などの口語体で書かれた一部を除く、同 5 紙の全記事である。

4.3. 分析準備作業の結果

分析の方法としては、それぞれの資料中に現れる指示詞を指示用法ごとにグループ化した上で、その使い分けや性質を形式ごとにまとめた。具体的には、資料にみられる各指示詞が指す指示対象がどのようなものであるかを分類し、表にまとめた。このようにグルーピングした結果、文語体の指示詞には、口語体指示詞と同様に、空間的・時間的な位置の対象を指し示す場合に用いられる形式と、物・事柄や人・動物の対象を指し示す場合に用いられる形式の 2 種類に大きく分かれていることが確認できた。分析対象の資料からは、空間・時間、物・事柄、人・動物以外の指示対象は検出されなかった。従って、1.4.2 で述べた、岡野 (2009) による名詞の分類が文語体指示詞の場合も有効であることが確認できる。指示対象が空間や時間であるか、物や事柄または人間や動物であるかによって形式を区別することができる。更に、指示代名詞の yín と lǎgáun は直接人間や動物を指示できることが確認される。具体例は 4.6 の考察の際に挙げる。

以下表 22~表 24 にそれぞれの対象資料の集計結果を示す。

表 22 指示詞の出現数(キッサン文学集-Vol.1(上段)+Vol.2(下段))⁵⁸

指示対象	空間・時間(接続表現の内数) ⁵⁹				物・事柄(接続表現の内数)				人間・動物(接続表現の内数)				合計
	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	
限定詞	36(7)	91(23)	8	0	45	46	23	0	8	28	10	0	295(30)
	58(10)	80(24)	8	0	48	68(24)	26	0	26	105	0	0	419(34)
代名詞	3	6	0	0	52(44)	62(62)	12(6)	0	0	0	28	0	163(112)
	2	2	0	0	103(88)	38(38)	5	0	0	0	4	0	154(126)
合計	99(17)	179(47)	16	0	248(132)	214(124)	66(6)	0	34	133	42	0	1031(326)

表 23 指示詞の出現数(国語教科書)⁶⁰

指示対象	空間・時間(接続表現の内数)				物・事柄(接続表現の内数)				人間・動物(接続表現の内数)				合計
	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	
限定詞	77(11)	186(116)	11	1	169(1)	248(41)	2	9	70	177	0	3	953(169)
代名詞	6	20(6)	0	0	206(160)	217(168)	7(3)	12(4)	0	0	0	14	482(332)
合計	85(11)	207(122)	11	1	377(152)	474(213)	9(3)	21(4)	71	177	0	16	1449(505)

表 24 指示詞の出現数(新聞)⁶¹

指示対象	空間・時間(接続表現の内数)				物・事柄(接続表現の内数)				人間・動物(接続表現の内数)				合計
	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	ʔi	tʰò	yín	lǎgáun	
限定詞	37	36(9)	38(1)	6	61	48(18)	83(4)	18(7)	0	7	4	9(3)	347(42)
代名詞	0	3	0	0	34(21)	88(88)	58(27)	5(2)	0	0	3	183	374(138)
合計	37	39(9)	38(1)	6	95(19)	136(106)	141(31)	23(9)	0	7	7	192(3)	721(180)

4.4. 先行記述

1.1 でも触れたように、文語体の指示詞が体系的に研究されている資料はほとんどみられない。学習の観点からの記述は少数存在するため、本論では、これまで公刊された代表的な参考書などからの記述をまとめて紹介する。なお、引用文献のうち、日本語以外で書かれた文献などに日本語の要約を付けた。例文などは音韻転写し、逐語訳と和訳を付加した。引用文献の中にすでに例文番号が付されているものは、本論の例文番号に統一し、付け替えた。

4.4.1. Pe Maung Tin (1953)の記述

Pe Maung Tin (1953: 39)は指示形容詞について、「どの人、あるいは、ものを意味するかということを示す形容詞を指示形容詞と呼ぶ。名詞の直前に置く」⁶²としている。

𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫/𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫(𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫/𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫)については、「近くの名詞を指し示す場合に 𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫/𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫, 𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫/𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫を用いる (ibid.: 40)」⁶³と述べ、以下の例を挙げている。

(86) 𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫 ʔǎyouʔ-ká ʔǎbè ʔǎyouʔ-ní
 this.DET doll-DIS.csubj what doll-Q
 この人形はどんな人形ですか。(ウー・カラー (1) : 233) ⁶⁴

(ibid.: 40)

(87) 𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫 tù-tì 𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫-ʔǎtǎ-kò sá-tǎ-ló
 this.DET person-DIS this.DET-meat-ACC eat-vs.RLS-Q
 この人はこの肉を食べますか。(マニコンダラ : 23) ⁶⁵

(ibid.: 40)

(88) 𑜏𑜢𑜤𑜰𑜫 ǵá-pá-tó tǵtǵtǵ-tô-twìn...
 this.DET five-CLF-attr.RLS witness-PL-LOC...
 この5つの証拠には(後略)。(ダマウイラーサ : 6) ⁶⁶

(ibid.: 40)

- (89) **ṡ** myauʔ-tì nâ dǎgà-tá mǎ-houʔ-ló
 this.DET monkey-DIS [1].OBL donor-son not-right-Q

この猿は私の寄進者の息子ではないだろう。(ダマウィラーサ：25)

(ibid.: 40)

- (90) **ṡ** wɛʔ mǎ-tè-pé-kò nèpyìdò-tò mǎ-pyàn-pì
 this.DET pig not-die-without-EMPH palace-ALL not-turn-vs.INC

この豚が死なない限り王宮へは戻らない。(ウー・カラー (1)：116)

(ibid.: 40)

- (91) **ṡ** cún-mùkǎ lù-tɛʔtɛʔ-kín naʔ-bǎlú-tò sàN + nè-pʰô-hû...
 this.DET island-DIS.csubj person-mere-absent spirit-demon-PL reside+stay-sake-QUOTE...

この島は人間でない神や鬼などが住むためと (後略)。(ウィザヤ：19) ⁶⁷

(ibid.: 41)

ṡ/tʰò/については、「既出の名詞を指し示す場合に ṡ/tʰò/を用いる(ibid.: 39-40)」⁶⁸と述べ、以下の例を挙げている。

- (92) **tʰò** nǎ-kò tǎnà yâ-ʔi. **tʰò** tǎnà leʔsuʔ-kò myìn-hlyìn...
 that.DET fish-ACC fisherman get-vs.RLS that.DET fisherman ring-ACC see-COND...

その魚を漁師が得た。その漁師は指輪を見ると (後略)。

(マハーピンニャーチャー：102) ⁶⁹

(ibid.: 39)

- (93) **ṡwǎyiʔ-mín-čí** mín + pyû-ʔi.
 NAME.person-king-AUG king+do-vs.RLS

- tʰò** **ṡwǎyiʔ-mín-čí-ʔi** tá-tò-kǎ tìnZÍ ʔǎmyì hyî-ʔi.
 that.DET NAME.person-king-AUG-GEN son-royal-DIS.csubj NAME.person name exist-vs.RLS

ティウイツが王になる。そのティウイツ王の息子はティンジーと言う。

(ヴェッサンタラ：21) ⁷⁰

(ibid.: 40)

- (94) tá-tò hnǎ-pá hyî-ʔi. **tʰò** hnǎ-pá-tò-twìn tá-tò-ʔǎcí
 son-royal two-CLF exist-vs.RLS. that.DET two-CLF-PL-LOC son-royal-older
 pʰyiʔ-tó ʔǎyitʰǎzǎnǎkǎ-míndǎ-ʔǎ ʔèinhyê-ʔǎyà-kò pé-ʔi
 COP-attr.RLS NAME.person-prince-ACC crown prince-rank-ACC give-vs.RLS

息子が二人いる。その二人に長男であるアイータザナカに皇太子の位を与えた。

(マハーザナカ : 14) ⁷¹

(ibid.: 40)

ωċ:/yín/については、「ωċ:/yín/の使用は ɔ̃/tʰò/と同様である (ibid.: 42)」⁷²と述べ、以下の例を挙げている。

(95) yín zǎgá-kò-lé pʰyè-nàin-pè-myì

that.DET word-ACC-DIS.also answer-can-FP-vs.IRR

その言葉にも答えられるだろう。(ヤーザーディリ : 186) ⁷³

(ibid.: 42)

(96) yín ʔăcáun-kò tʰauʔ-hlyìn ʔìhò ʔǎ-cún

that.DET case-ACC point.out-COND NAME.place one-island

lìnkàdipâ ʔǎ-cún-hnîn tù-hlâ-ʃwà-ʔi

NAME.place one-island-COM similar-AUX-AUX-vs.RLS

そのことによれば、ティーホー島、リンカーディーパ島のように見える。

(ピインティッナインガントアー : 200) ⁷⁴

(ibid.: 42)

qċ:/lǎgáun/については、「qċ:/lǎgáun/の使用は ɔ̃/tʰò/と同様である (ibid.: 41-42)」⁷⁵と述べ、以下の例を挙げている。

(97) lǎgáun ʔìngà-tò-myá-kò wùnhyìnʔò-mín-čí-kâ nànnēʔ-sʰún nêzìn kaʔhlù-ywê...

that.DET monk-royal-PL-ACC NAME.person-king-AUG-NOM morning-rice everyday offer-SEQ...

その僧侶らにウンシンドー王は毎日朝ごはんを捧げて (後略)。

(ランダンミョトアー : 4) ⁷⁶

(ibid.: 42)

(98) ʔeìnhyêmín pé-weʔ ʔăďabyà-kò ʔă-yù ʔwá-ywê ʔă-pyàn-ʔwìn

crown.prince CLF-half money-ACC NMLZ-take go-SEQ NMLZ-return-LOC

lǎgáun ʔeìnhyêmín-hnîn dǎgwâ múmaʔ-bòbà maúnmâmeiʔtàn cʰànyàn-hlyeʔ...

that.DET crown.prince-COM together councilor-general Lady.in.waiting surround-SEQ

皇太子は半アンナ (英領時代の補助の貨幣の単位) ⁷⁷のお金を取りに行つて、帰りにその皇太子とともに顧問官、将軍や女官らに囲まれて (後略)。(イエーター : 107) ⁷⁸

(ibid.: 42)

အကြင်/ṽcìn/については、「指し示している名詞をきちんと表さない場合に အကြင်/ṽcìn/を用いる。多くの場合、အကြင်/ṽcìn/文を ṽp/tʰò/文で受けて終わらせる (ibid.: 42-43)」⁷⁹と述べ、以下の例を挙げている。

- (99) ṽcìn méinmâ-tô-hnai? ṽpyi? cʰau?-pá hyî-tăí
 some.DET woman-PL-LOC sin six-CLF exist-vs.RLS

あの女たちに 6 つの罪がある。(マヌチェー : 135) ⁸⁰

(ibid.: 42)

- (100) ṽcìn ṽya?-hnai? ṽpou?-kʰou?tʰi?-câ-ṽân
 some.DET place-LOC kill-cut-mutual-vs.IRR

あの場所で殺し合い・戦いをしよう。(ダマウィラー : 3) ⁸¹

(ibid.: 42)

- (101) ṽcìn tû-ṽi lē?-hmâ dăzô-kò mă-yâ-ṽân
 some.DET person-GEN hands-ABL bribe-ACC not-get-vs.IRR
 tʰò tû-ṽi ṽnhlye?-kò mă-káun-Ø-hû kêyê-ṽi
 that.DET person-GEN dagger-ACC not-good-vs.NEG-QUOT belittle-vs.RLS

あの人 (の手) からいろいろが貰えず、その人の短剣が良くないとけなす。

(スェゾンチョーティン (2) : 76) ⁸²

(ibid.: 43)

- (102) ṽcìn ṽya?-hnai? ṽi tē-kò ṽa yâ-ṽi. tʰò ṽya?-tô ṽwá-ṽân
 some.DET place-LOC this.DET alcohol-ACC [1] get-vs.RLS. that.DET place-ALL go-vs.IRR

あの場所での酒を私は得た。その場所へ行こう。(マニコンダラ : 36) ⁸³

(ibid.: 43)

4.4.2. Pe Maung Tin (1959)の記述

Pe Maung Tin (1959)は lăgáun にまつわる問題や、tʰò、yínなどの交替について、lăgáun の由来を踏まえた上で、現在は指示詞として使われるようになっている 1) 名詞を指す形容詞 (限定詞のこと。以下、同様。) 的な lăgáun と、2) 代名詞としての lăgáun の記述を行っている。

lăgáun の由来については、「q̣c̣:/lăgáun/は『လၢၣ်/lé/』と『ကၢၣ်/káun/』が結合したものである。元来、လၢၣ်/lé/は『加えて含む⁸⁴』という意味を示す」と述べ、以下の例を挙げている。

- (103) mwèbà-lé sʰóun ṽá-lé sʰóun
 mongoose-DIS.also lose son-DIS.also lose

マングースも失い、息子も失った。

(ibid.1959: 76)

例(103)のように言う場合、「マングースと息子両方を失うと言うことを表す。マングースを失うことに息子を失うことも含む」という説明をしている。

更に Pe Maung Tin (1959: 77)は、「ꠘꠘꠄꠄ/łǎgáun/は လၢꠘꠘꠄꠄ/lé/を ကောꠘꠄꠄ/káun/で強調する လၢꠘꠘꠄꠄ/łǎgáun/である。昔、လၢꠘꠘꠄꠄ/łǎgáun/を လောꠘꠘꠄꠄ/lékáun/とも書く。ソーミンラッパヤー碑文⁸⁵（碑文 41）⁸⁶に yauꠘꠘꠄꠄ-lékáun, méinmâ-lékáun⁸⁷『男の人も女の人も』と書いてあることを参照せよ。このように書く場合 လောꠘꠘꠄꠄ/lé/の代わりに数字の ၄ (4) を書き、ကောꠘꠘꠄꠄ/káun/の代わりに末尾（・末子音）の ငꠘꠄ/-N/を書くことから ꠘꠘꠄꠄ/łǎgáun/になった」⁸⁸と述べている。

łǎgáun を並列させずに使うこともできる例を以下に挙げる。

- (104) ꠘꠘꠄꠄ? kʰũnhnă-hni? hyî-tɔ̃ tǎdôꠘꠘꠄꠄ-tì tʰò-nê-łǎgáun ꠘꠘꠄꠄyĩnyăhán + mù-ꠘꠘ
age seven-years.old exist-attr.RLS young.boy-DIS that-day-EMPH priest+make-vs.RLS
7 歳の少年はその日に僧侶にした。（パラ：30）⁸⁹

(ibid. : 81)

例(104)での「łǎgáun は前の nê を強調する (ibid.: 81)」としている。

- (105) nyĩmânꠘꠘ-tì-ká tʰò-ꠘꠘꠄꠄ-łǎgáun naꠘ-pyì-lû-pyì-tô-hnai? cìnlê-ywê...
young.sister-NOM-DIS.csubj that-same-EMPH divine-country-human.OBL-country-LOC familiar-SEQ...
女の子はそのようにあの世この世に馴染んで（後略）。（ヴェッサン：24）

(ibid. : 81)

- (106) ꠘꠘ-ꠘꠘꠄꠄ-łǎgáun mé-pyàn-ꠘꠘ
this-same-EMPH ask-again-vs.RLS
このように更にまた聞いた。（マニラ：20）⁹⁰

(ibid. : 81)

例(105)と(106)についても「łǎgáun は前の言葉である tʰòꠘꠘꠄꠄやꠘꠘꠘꠘꠄꠄを強調する (ibid.: 81)」としている。

Pe Maung Tin (1959: 81)はこのような強調の意味を表す文について、「łǎgáun を 1 回、あるいは、2 回以上用いるときには関連のある言葉の後ろに置くことに気をつけよう」⁹¹と述べ

ている。

また、指示詞としての用法について、「名詞を指す形容詞（名詞を限定する限定詞）のようにも *lǎgáun* を使用していることがみられる」とし、次のような用例を挙げている。

- (107) *cá-lé* *hyìn-lè-ŷi*. *lǎgáun* *cá-tì* *cézú + mǎ-tì-Ø*.
tiger-DIS.also alive-AUX-vs.RLS that.DET tiger-NOM grace+not-know-vs.NEG
虎も生きた。その虎は恩を知らない。（マニボン：436）⁹²

(ibid. : 82)

この例 (107) の場合、「*lǎgáun* は後ろの *cá*『虎』を指す形容詞（限定する限定詞）である (ibid.: 82)」と説明している。

- (108) ((98)と同様)

ʔeìnhyêmín *pè-weʔ* *ʔǎḍǎbyà-kò* *ʔǎ-yù* *twá-ywê* *ʔǎ-pyàn-twìn*
crown.prince CLF-half money-ACC NMLZ-take go-SEQ NMLZ-return-LOC
lǎgáun *ʔeìnhyêmín-hnîn* *dǎgwâ* *múmaʔ-bòbà* *maúnmâmeiʔtàn* *cʰànyàn-hlyeʔ*
that.DET crown.prince-COM together councilor-general Lady-in-waiting surround-SEQ
皇太子は半アンナ（英領時代の補助貨幣の単位）のお金を取りに行つて、帰りにその皇太子とともに顧問官や女官らに囲まれて（後略）。（イエーター: 107）

(ibid. : 82)

例(108)の場合は、「*lǎgáun* は後ろの *ʔeìnhyêmín*『皇太子』を指す形容詞（限定する限定詞）である (ibid.: 82)」としている。

lǎgáun と *tʰò* については、「昔の碑文などには *lǎgáun* を形容詞として使用しなかった。*tʰò* は昔から使われてきたことがみられる (ibid.: 82)」⁹³と述べ、このように *lǎgáun* ではなく *tʰò* を使用していたことについてミャザーディー碑文（ヤーザクマーラ碑文あるいはラージャクマーラ碑文⁹⁴としても知られている）での *tʰò* の実例が挙げられている。

- (109) *tʰò* *mín-ŷi* *pè-mǎyá* *tǎ-yauʔ-tʰó-ká* *tǎrlókāwātànṭākàdèwì* *myì-ŷi*
that.DET king-GEN beloved-wife one-CLF-attr.RLS-DIS.csubj NAME.person named-vs.RLS
tʰò *pè-mǎyá* *tá* *tǎmù-lé* *yàzākùmà* *myì-ŷi*
that.DET beloved-wife son as.for-DIM NAME.person named-vs.RLS
tʰò *mín-ká* *cùn* *tóun-ywà-té* *pè-mǎyá-ʔá* *pé-ŷi*
that.DET king-DIS.csubj slave three-village-EMPH beloved-wife-ACC give-vs.RLS

その王の寵妃の一人はティローカヴァタムサカーデーウィーという名であった。その寵妃の息子は、ラージャクマールという名であった。その王は奴隷 3 カ村を寵妃に与えた。その寵妃が死んだ時、王妃の装飾品と、その奴隷 3 カ村とを、その寵妃の子、ラージャクマールという名（の人）に王が与えた⁹⁵。

更に、このように *lăgáun* の形容詞としての使用がみられなかったことについて、ニャウンヤン王朝 (1596-1752) の第 9 代の王であるタニンガヌエ王時代 (1714 年～) に書かれたウー・カラー著のマハーヤーザウインジー『ウー・カラーの大王統史⁹⁶』や、1948 年の英領独立後にビルマの政権を担ったウー・ヌ首相 (1907-1995) の『ミャンマー百科事典』のまえがきに書かれていた文章⁹⁷などを参照している。

- (110) ...^hò tò-tì p^hó^hòunnyâ-pìn p^hyi?-sè-^hàmù ʔi swèzoun^hcán-cí-tì
 ...that.DET person-DIS M.zero-FOC COP-vs.IMP-although this.DET encyclopedia-AUG-NOM
^hò p^hó^hòunnyâ-^hò p^hóyàzà-ʔăp^hyi?-tò pyáunlé-pé-^hòun-lătân...
 that.DET M.zero-ACC M.King-as-ALL change-give-AUX-vs.IRR...

「(前略)その人がポー・トンニャ（無知蒙昧な輩）であるにせよ、本百科事典はそのポー・トンニャ（無知蒙昧な輩）をポー・ヤーザー（王様）に変えてあげるであらう。(後略)」

Pe Maung Tin (1959: 82)一部省略

そして、*lăgáun* の代名詞用法として次のような例を挙げている。

- (111) yózâ-mín^hdá-^há wăyâyózâ-mín, *lăgáun*-ʔi tá-^há kălăyânâ-mín...
 NAME.person-prince-DIS.csubj NAME.person-king that-GEN son-DIS.csubj NAME.person-king...

ヨーザ皇太子はワヤヨーザ王、その王の息子はカラヤーナ王(後略)。(マハーウン: 44)⁹⁸
 (ibid.: 83)

この (111) の場合、「*lăgáun* は前の *wăyâyózâ-mín* 『ワヤヨーザ王』を代替する代名詞である (ibid.: 82)」としている。

ただし、「代名詞としての *lăgáun* も古文体期⁹⁹にはみられなかった」¹⁰⁰とし、「いずれ形容詞として使うにせよ、代名詞として使うにせよ ^hò は *lăgáun* より古い」¹⁰¹と述べている (ibid.: 83)。

^hò と yín については、yín は ^hò の代わりとして使われるということを「もし、^hò を使用したくなければ、yín を使用することも可能である (ibid.: 84)」¹⁰²と述べ、「古文体期から yín が使われている」として碑文やコンバウン王朝の第 10 代のミンドン王時代の大臣であるキンウンミンジーによるフランス旅行日記などの例を挙げている。

Pe Maung Tin によれば、「1261 年（緬暦 623 年）アゾーラッ碑文の『アワンの 100 水田で

あるその水田 (ʔăyín-lè) マカヤークインアワンという村に 50、ヤタブパトーピュという村に 50、この 2 箇所組みをアワン 100 と言う』(碑文-91) ではʔăyín-lè『その水田』は前にある『アワン 100 の水田』を指す。ʔăyín は現代ʔă-が表記されなくなり、yín と表記される。つまり、tʰò の代わりに使用される形容詞である (ibid.:83)」¹⁰³。

(112) yín ʔăcáun-kò tʰauʔ-hlyìn...

that.DET case-ACC point.out-COND...

その事例を参照すると (後略)。(ピンティツ: 200)

(ibid.: 84)

この文の場合も「yín はʔăcáun『事例』を指す形容詞である」¹⁰⁴と説明されている。

(113) 542k^hŭhni? mínʔòc^hánḡà-myauf-p^hăyá-twìn lūyeʔ + sá-tḡ tḡ-ká
542year NAME.place-north-pagoda-LOC rob+eat-attr.RLS person-DIS.csubj
ḡăyḡʔăwizî-ká ʔăt^hḡ? ʔăyín-tḡ-ká ʔauʔ-ʔăt^hḡ-hlyìn p^hyiʔ-sè-kòun-tḡtḡ.
hell-DIS.csubj upper that-PL-DIS.csubj under-inside-LOC COP-vs.IMP-AUX-vs.RLS

1180 年 (緬暦 542 年) ミンオチャンター北のパゴダで (物を) 奪ったりして暮らす者は無間地獄すら (その人らの) 上になり、その人らは尽く (無間地獄より) 奥底になるように。

(ibid.: 84)

更に、1551-1593 年 (緬暦 915-955 年) の間のミンパヤウン王時代に名のあるマハーピインニャジョーは自分自身の主張に tʰò-tḡ「そのように」の代わりに yín-tḡ「そのように」をよく使用していた。

(114) ḡâ nyì nán-hyê-twìn mín-té s^hauʔ-sè
[1].OBL brother palace-front-LOC King-hut construct-vs.IMP
yín té-twìn-pìn ḡà-tḡ nè + là-ḡâ-ʔân
that.DET hut-LOC-FOC [1]-PL stay+come-mutual-vs.IRR

我が弟、王宮の前に王用の小屋を建てろ。そこに我らが住みましょう。(マニボン: 282)

(ibid.: 84)

4.4.3. その他の記述

更に、ʔì (ḡì)、tʰò (ʔḡḡ)、yín、lăḡáun のうち、ʔì と ḡì は口語の ḡì に、tʰò は口語の hò に、yín と lăḡáun は口語の ʔḡḡ に対応することから、それぞれ近称、遠称と照応用法があるような分類 (澤田 2012: 19) と、昔はʔì と tʰò が現場指示として使われていた可能性があるという

記述 (Khin Min 2007) もみられる。すでに 2.4.3 で述べたように、Khin Min (2007: 34)は、「hò と ò̃ を昔は tʰò、ò̃ として使っていた。今も文語として使われている。口語のほうはすでに hò、dì となっている。話し手から遠いものを tʰò (hò) で示し、近い所を ò̃ (dì) で示すということは一般に知られていることである」と述べ、ヤーザクマーラ碑文を例に取っている。Khin Min (2007: 34)は「ビルマ語で書かれたとされる日付があるヤーザクマーラ碑文に『tʰò mín (その王様)』『tʰò pè-măyá (その寵妃)』として使っていて、現在寄進した黄金の仏像を『ò̃ hywè-phăyá (この黄金の仏像)』として ò̃ を使っていることをみると最初にビルマ語を作るときから指示詞がはっきりと遠近に応じて使い分けられていることがみられる」としている。なお、その他の記述は、ビルマ語講座用のテキスト (澤田 2012) や雑誌の記事 (Khin Min 2007) であるため、議論の対象から除外する。

4.4.4. 先行記述・研究のまとめ

以上で紹介された先行記述・研究をまとめると、先行記述・研究などでは参考書や学者によってそれぞれ分類の仕方が異なっている。第 2 章で紹介した Myanmar Language Commission (1978-1980, 2005) では指示詞を指示代名詞と指示形容詞とに分類し¹⁰⁵、近称・遠称を表す場合と先行文脈を指すときに用いる場合があると述べ、現場指示用法と照応用法があるようなことを大まかに示している。Pe Maung Tin (1953) の記述では、単に形式と用例を列挙しており、Pe Maung Tin (1959) の記述では主に lăgáun の由来について詳細に説明し、現在使われている lăgáun の形容詞的用法は誤用であると結論付けている。

4.5. 問題点

1.1 にも触れたように、Pe Maung Tin (1953, 1959) は、参考書の中で最も優れた本であり、指示詞の用例を包括的に扱ってはいるが、解説のほうは学習の観点からの説明にすぎず、辞書的な程度にとどまっている。取り扱っている用例も本論で分析の対象としている現代ビルマ語の例が少なく、ほとんどが 20 世紀以前のものである。

Pe Maung Tin (1953) の記述によれば、ò̃, ò̃ は近くの名詞を指し示す場合に用いて、tʰò は既出の名詞を指し示す場合に用いる。そして、yín と lăgáun の使用は tʰò と同様である。つまり、ò̃ (ò̃) は近称の現場指示であり、yín と lăgáun の使用は tʰò と同様に先行名詞を指す文脈指示であると解釈される。しかし、実例などを分析した結果、ò̃ のほかに tʰò にも現場指示用法が観察され (例(115)を参照)、ò̃ と tʰò にみられない yín と lăgáun の特徴も検出された (例(116)を参照)。例(115)は tʰò が現場指示として用いられている例であり、例(116)は yín と lăgáun のみが用いられる場合の例である。

- (115) “ʔăc^{hín}-tò tʰò sùn cʰì-tó tátiʔ-kò yăk^{hû}-pìn cʰă-sè-ʔân.
 “friend-PL that.DET hawk carry-attr.RLS meat-ACC now-FOC drop-vs.IMP-vs.IRR
 ò̃n-tò myìn-lò-çâ-tă-ló”{-hû sʰò-ò̃.
 [2]-PL see-want-mutual-vs.RLS-Q-QUOT say-vs.RLS

「皆さん、あの鷹が啜えている肉片を今落として見せる。皆さん、見たいですか」と言った。

Grade-9: Lessson-4, p.14

例(115)では、話し手は会話参加者から離れている位置にいる鷹を指示限定詞の *tʰò* を用いて *tʰò sùn* 「その鷹」として直接指している。

- (116) “...”-hû yín/ lǎgáun/ *tʰò/ *ʔi-kâ pyó-tì
“...”-QUOT that/ that/ that/ this-NOM say-vs.RLS
「...」とその人（／同氏）が言った。

The Irrawaddy: 2015/03/29, p.6（一部改変）

例(116)は新聞などでよくみられる表現であり、先行文脈で現れた人物の代替表現として *yín* と *lǎgáun* が使用される。これに対し、*ʔi* と *tʰò* にはこのような用法はない。

次に、Pe Maung Tin (1959)の記述について検討する。Pe Maung Tin (1959)は *lǎgáun* の由来を中心として述べており、指示詞の使い分けの対照として扱っている引用例なども 12 世紀初頭の文献から 20 世紀までの文献が混在している。Pe Maung Tin (1959: 83)によれば、*lǎgáun* の指示形容詞としての使用は元の意味に反する使用である。つまり、*lǎgáun* の指示形容詞用法は誤用である。しかし、*lǎgáun* の誤用がいつ頃からみられるようになったかについては明示しておらず、用例についてもニャウンヤン王朝 (1596-1752)に書かれたウー・カラー著のマハーヤーザウンジーという王統史や、1948 年の英領独立後に首相としてビルマの政権を担ったウー・ヌ (1907-1995)の「ミャンマー百科事典」のまえがき¹⁰⁶に書かれていた文章などを参照している。しかしながら、コンバウン（王朝の第 10 代のミンドン王）時代の大臣であるキンウンミンジー (1821-1908)（緬暦 1183-1270）の「キンウンとパリ」には *lǎgáun nê 3 nàyi* 「その日の 3 時」、*lǎgáun tai?* 「そのコンクリート」、*lǎgáun pìnlè* 「その海」、*lǎgáun ʔàsʰauʔʔàʔòun* 「その建物」など、*lǎgáun* をよく使われているのがみられる。

実際にいつ頃から *lǎgáun* が指示詞として使い始められたかについては、本論では議論の対象とするつもりはないが、16 世紀以降の文献には *lǎgáun* の指示詞用法が数多くみられることは指摘しておきたい。かつては強調の意味で句や節の後ろに置かれていた *lǎgáun* の一部が、のちに句や節とは切り離されて再解釈され、独立した指示詞として使われるようになったという可能性が考えられる。現代の書記法では強調の場合は ၵုၵ်ႈလၢၵ်ႈ [lǎgáun] と綴られ、指示詞は表語文字 ၵုၵ်ႈ [lǎgáun] を用いて表記上の区別をしている。

(117) ((106) - 再掲)

ʔi-ʔätù-lăgáun mé + pyàn-ʔi.
this-same-that.EMPH ask+again-vs.RLS

このように更にまた聞いた。(マニラ：20)

(118) (117)を一部改変

ʔi-ʔätù lăgáun mé + pyàn-ʔi.
this-same that.DEM ask+again-vs.RLS

このようにその人（／彼）はまた聞いた。

例(117)での lăgáun はʔi-ʔätùの後ろに置かれてそのʔi-ʔätùを強調する。これに対し、(118)の lăgáun は前の文脈を対象とする指示代名詞として使われていることが分かる。

以上の例にみられるように、本来 lăgáun は(117)のように強調の意味で使われていた。それがのちに(118)のように指示詞として再解釈を受けるようになったと思われる。現代のビルマ語では、(117)と(118)は文脈によって強調、もしくは指示詞として2通りに解釈することができる。

ʔäcìn の説明についても、Pe Maung Tin (1953: 42-43)は「多くの場合、ʔäcìn 文を tʰò 文で受けて終わらせる」、大野 (2000)は「後に tʰò を伴う」としている。しかし、Theippan Maung Wa のキッサン文学で用いられている実例にあるようにʔäcìn の後に yín を伴う場合もみられる¹⁰⁷。なお、ビルマ語の指示詞には、先行記述や辞書などで挙げられているʔäcìn やʔähni と、先行研究には現れなかったʔähnaというやや古いとされる指示表現などが存在するが、本論の主な分析対象である基礎教育に使用される教科書や新聞などには文語体の表現として現れなかったため、考察の対象から外すことにする。

4.6. 考察

本節では、20 世紀初頭からのいわゆる現代の文献における指示詞の考察を行う。キッサン文学が興隆した時代の文献などをはじめ、ミャンマーの基礎教育に使用される小・中・高校の国語の教科書やミャンマー国内のビルマ語新聞の記事などにみられる指示詞の傾向を観察する。分析の対象が書かれた文の文語体であるため、基本的には文脈指示が使用される。ただし、教科書に書かれている文語体には現場指示用法もみられる。特に、教科書においては Grade-1 では初めてʔi が導入されるが、すべてが現場指示用法である (120)~(122)。Grade-2 以降はʔi に加えて、tì と、更に tʰò が導入される。lăgáun が導入されるのは Grade-4 以降の段階である。そして yín の出現は lăgáun よりも遅く、Grade-9 からである。これに対し、新聞では、文語体で書かれた現場指示用法はみられなかった。そして、キッサン文学集では

lăgáun の用法が現れなかった。

以下、それぞれ現代ビルマ語の文献や教科書、新聞からの具体例をみながら考察を行う。
なお、用例などは紙幅の都合上一部省略する。

4.6.1. 現場指示

3.2 で述べたように、現場指示とは、指示対象の同定に発話時における発話者と指示対象の空間的位置が関与する場合のことを指す。文語体ビルマ語には *ni* と *thò* の場合に現場指示用法がみられる。しかし、現代の文語体は発話を前提としない書記専用の文体であり、情報発信者が情報の受け手と場所、時間を共有しないのが普通である。文語体で書かれる日記や作文など現場の風景を述べるような場合に、口語体の現場指示に相当する用法がみられる。実際の現場で使われることは非常に稀であり、例えば、例(119)のような行事や式典などで使われる決まり文句の表現としかみられない。

(119) ((8) - 再掲)

<i>ni-twìn</i>	<i>ʔāk'hánʔānā</i>	<i>pís'óun-çáun</i>	<i>cènyà-ʔaʔ-pà-tì.</i>
here-LOC	ceremony	finish-fact	announce-AUX-PLT-vs.RLS

これをもちまして閉会させていただきます。

例(119)は式典などでよく使われる決まり文句のひとつである。口語体の表現を使わずに、敢えて文語体を言葉にして固い表現として用いられる稀な表現である。

以下 4.6.1.1 と 4.6.1.2 で述べる現場指示は書かれた文章にみられる用例に基づいたものである。

4.6.1.1. 指示限定詞にみられる現場指示相当用法

指示限定詞 *ni* と *thò* には現場指示に相当すると思われる例も実際には観察される。例(120)~(121)はそれぞれ旅の距離や家族、村などを *ni* で限定しながら直示的に指し示している例であり、例(123)は、話し手は会話参加者から離れている位置にいる鷹を指示限定詞の *thò* を用いて *thò sùn* 「その鷹」として直接指している例である。

(120) <i>ni</i>	<i>khăyí</i>	<i>ní-tă-lá</i>	(空間)
this.DET	trip	near-vs.RLS-Q	

この距離は近いですか。

Grade-1: Lesson-2, p.23

(121) 𐄂 mîṭázû p^hăyábú + là-ṛi (人間)

this.DET family worship+come-vs.RLS

この家族がお参りに来た。

Grade-1: Lessson-3, p.25

(122) 𐄂 ywà-k^hălě ṭàyà-ṭi. (物)

this.DET village-DIM pleasant-vs.RLS

この村は心地よい。

Grade-1: Lessson-11, p.49

(123) ((115) - 再掲)

“ṛăc^hín-tô ṭ^hò sùn c^hì-ṭó ṭáti?-kò yăk^hû-pìn c^hâ-sê-ṛân.
“friend-PL this.DET hawk carry-attr.RLS meat-ACC now-FOC drop-vs.IMP-vs.IRR

ṭìn-tô myìn-lò-çâ-ṭă-ló”{-hû s^hò-ṛi.}

[2]-PL see-want-mutual-vs.RLS-Q-QUOT say-vs.RLS

「皆さん、あの鷹が啜えている肉片を今落として見せる。皆さん、見たいですか」と言った。

Grade-9: Lessson-4, p.14

4.6.1.2. 指示代名詞にみられる現場指示

文語体においても指示代名詞𐄂、ṭ^hò が現場指示として用いられていると思われる例がみられる。特に、指示対象が空間的・時間的¹⁰⁸なものである場合や、現場にあるものに言及するとき ká などの助詞を伴う場合など、現場指示とみなすのが適切と考えられるケースもある。ただし、あくまで書かれた文章での表現であるため、それが書かれた当時の状況を知り得ない以上、現場指示であると断定することは困難だと言わざるを得ない。

(124) p^hăyáláun ṭá-ṇè-ṭi “mîgìn 𐄂-ká na?-s^hé-ṭóun-ṭí...”-hû[...]

future.Buddha son-DIM-NOM “Mother this-DIS.csubj god-medicine-block-EMPH...”-QUOT[...]

未来の仏陀/菩薩である息子が「お母さん、これは神の薬です。(後略)」と[言って母親の手に載せた]。

Grade-9: Lessson-1, p.3

(125) ... “𐄂-ká mwè-p^hò 𐄂-ká mwè-mâ-hû ṭìn-tô hma?ṭá-ywê

... this-DIS.csubj snake-male this-DIS.csubj snake-female-QUOT [2]-PL memorize-SEQ

mín-çí-ṛá pōs^hé?-lè-ló”-hû s^hò-ṛi.

King-AUG-ACC send-AUX-vs.IMP-QUOT say-vs.RLS

(前略)「あなたたちは、これは雄の蛇、これは雌の蛇と覚えて王様のほうに送りなさい」と言った。

Grade-9: Lesson-12, p.34

例(124)と(125)は、ꠔ を用いてそれぞれ神の薬や雄の蛇と雌の蛇を指す場面のせりふである。

(126) ((10) - 再掲)

...tʰò-hmà-ká hywègùjǐ tʰò ʔǎní-ká ʔaʔbǎnyû....
 ...there-LOC-DIS.csubj NAME.place that.DET near-DIS.csubj NAME.place....

(前略) そちらにはシュエグージー、その近くにはタッピンニュ (後略)。

キッサン文学: Theippan Maung Wa, p.38

(126)は遺跡群が広く存在するところの風景を語っているような形で書かれている文学作品からの例である。第一の tʰò は、語り手が実際に現場にいて対象物を直接指し示しているかのように表現していると解釈することができる。ただし、第二の tʰò はシュエグージーの近くという意味の文脈指示用法である。

4.6.2. 文脈指示

3.3 で述べたように、文脈指示は、指示対象の同定に発話や文章内の文脈が関与する場合である。前方照応とは、テキストの中で指示対象が指示詞の前に現れているものを指し、後方照応とは、テキストの中で指示対象が指示詞の後ろに現れるものを指す。つまり、指示詞が先行文脈内に現れる要素を照応する場合を前方照応と言い、後方文脈に現れる要素を照応する場合を後方照応と言う。第 2 章で述べたように、ビルマ語の文脈指示を吉田 (2004) の分類方法に従って、口語体は話し言葉の「談話文脈」、文語体は書き言葉の「文章文脈」とする。本小節で述べる文脈指示というのは吉田 (2004) による「文章文脈」のことである。ビルマ語の文脈指示は、表 22~表 24 にみられるように空間・時間、物・事柄と人・動物を対象とする場合に用いられる。

ビルマ語の文語体文脈指示には、口語体の場合と同様に、前方照応と後方照応がある。以下、例を示す。

(127) ((11) - 再掲)

tʰámín	sá-hlyìn	ʔǎtàn	myì-ʔaun	mǎ-sá-yâ-Ø.	yìnyìncéjé	sá-yâ-tì.
rice	eat-COND	sound	sound-PURP	not-eat-AUX-vs.NEG	politely	eat-AUX-vs.RLS
ʔi-tô	pyûmù-çʰín-tì	kòʔāmùʔǎyà	yìncé-çʰín	pʰyiʔ-tì.		
this.DET-as	do-NMLZ-DIS	attitude	polite-NMLZ	COP-vs.RLS		

ご飯を食べる時、音をたてて食べてはいけない。上品に食べるのだ。このようにするの
が丁寧な態度である。

Grade-3, Lesson-15, p.25

- (128) mé-kò yètwe? + pí-hlyìn màunlù?é-kâ ?i-tô cènyà-?i.
voting-ACC count+finish-when NAME.person-NOM this.DET-as announce-vs.RLS
màun?ápán 85-mé. màunhywécé 15-mé
NAME.person 85-CLF NAME.person 15-CLF

票を数えたあと、マウン・ルーエーはこう発表した。

マウン・ターパン 85 票。マウン・シュエヂェー 15 票。

キッサン文学集: Theippan Maung Wa, p.246

例(127)の?i は前に述べた「上品に食べる」ことを指す前方照応であり、(128)の?i は次に
来る「マウン・ターパンとマウン・シュエヂェーのそれぞれの投票結果」を指す後方照応で
ある。

4.6.2.1. 指示限定詞にみられる文脈指示

指示限定詞にみられる文脈指示には?i、tʰò、yín、lǎgáun の形式がある。以下、それぞれの
例を示す。

- (129) ?i yànbòunhwè-hmà¹⁰⁹ sìmàngéin ?ănè?ătʰá-pò mù + tì-ywê hni?-hyè
this.DET fund-DIS project situation-above basis+build-SEQ year-long
tòunswé-yàn pʰyi?-tì.
use-PURP COP-vs.RLS

[ミャンマーの平和事業、十分な食糧支援や安全性を含む警察部隊の訓練などを重視す
る追加基金として EU 連合が 70,000,000 ユーロ (US ドル 76,000,000) を支援すると 12
月 21 日に発表した。(中略)]

この基金は計画の状況に応じて(柔軟に)長期的に運用するものである。

Myanmar Time: 2015/12/31-2016/01/06, p.11

- (130) ?i dètâ-myá ?i-tô pʰyi? + nè-tì-hmà cà-pì.
this.DET region-PL this.DET-as occur+stay-nc.RLS-DIS elapse-vs.INC

[ミャンマー中部のチャウ、イエナンヂャウン、マグエ、ミンブー、パコック、ミイン
ジャン、タウンター、マライン、メイティラーなどの郡を地理学者は雨量が少ない乾
燥地方と観ている。雨が降らないという甚大な被害を常に受けている地方である。(中
略) 今、この記事を書いている私の携帯電話にニャウンウー管区ガタラウ郡のセッセ

ッヨ村でヤンゴン葬儀ボランティア団体のチョートゥー部長が井戸を機械で掘って
寄付するというニュースが出てきた。(中略)]

この地方がこのようになって久しい。

Kyaymon: 2016/04/01, p.16

例(129)と(130)でのꠤ はそれぞれ後続する基金や地方などを表す名詞の意味範囲を限定している指示限定詞である。(129)のꠤ は「EU 連合からの支援金」という先行文脈を受け、(130)のꠤ は「セッセッヨ村のように温暖化で水不足が深刻になっているミャンマーの中部地方」という文脈を受けている。

- (131) hyéʔăk^hà-kâ cwáwà-taʔ-tó cí ʔă-kàun hyî-lè-tì.
long.long.ago-PAST flaunt-tend.to-attr.RLS crow one-CLF exist-AUX-vs.RLS
ꠤ cí-tì dáun-myá-kò myìn-hlyìn dáun-kêʔô hlâpâ-lò-ʔî.
that.DET crow-NOM peacock-PL-ACC see-COND peacock-as beauty-want-vs.RLS

昔々驕り高ぶるカラスがいた。そのカラスはクジャクを見ると、クジャクのようにきれいになりたくなった。

Grade-3, Lesson-7, p.8

- (132) ((12) - 再掲)

ꠤ sà-hmà 1944-k^hûhniʔ zùnîâ-kòun zùlâinîâ-ʂ^hán-lauʔ-hmà yauʔ+là-tì.
that.DET letter-DIS 1944-year June-end July-begin-approximately-LOC reach+come-vs.RLS

[ファシスト革命の心構えは早くからあった。しかし、団体行動はインドにいるタキン・テインペー (ウー・テインペーミン) から届けられた密書から始まったと言える。]

その手紙は 1944 年の 6 月下旬か 7 月上旬かに届いた。

Kyaymon: 2016/04/01, p.6

例(131)と(132)での ꠤ はそれぞれ後ろに来るカラスや手紙を指す名詞の意味範囲を限定している指示限定詞である。(131)の ꠤ は「驕り高ぶるカラス」を指し、(132)ꠤ は「インドにいるタキン・テインペーから届けられた密書」を指している。

- (133) ((13) - 再掲)

yín s^hwénwébwé-myá tân + ʔwá-k^hê-tì.
that.DET meeting-PL stop+go-AUX-vs.RLS

[パキスタンは 7 月に第一回の (和平) 交渉協議を行ったがタリバンの最高指導者モハンメド・オマルの死亡に伴い、タリバン側の確認が遅れたため]その協議が中断してしま

った。

Myanmar Time: 2015/12/31–2016/01/06, p.50

- (134) lókouʔtără-ʔätwəʔ ʔăcô + myá-myì pʰyiʔ-tó seiʔbădí-tô,
supermundane-sake advantage+numerous-nc.IRR COP-attr.RLS rosary bead-PL
cézi-tô-kò leʔsʰaun pé-myì càn-té-ŋi. yín ʔăcàn-lé
triangular brass gong-PL-ACC present give-vs.IRR think-still-vs.RLS that.DET idea-DIS.also
pyeʔ + pyàn-lè-tì.
broke+again-FP-vs.RLS

出世間のために有利になる数珠や鐘などをプレゼントしようと思ったこともあった。
その考えもダメになった。

キッサン文学集: Theippan Maung Wa, p.232

例(133)と(134)での yín はそれぞれ後ろに来る協議や考えを表す名詞の意味内容を文脈内の要素と関連付ける指示限定詞である。(133)の yín sʰwénwébwé-myá は「(和平) 交渉協議」を指し、(134)の yín ʔăcàn は「数珠や鐘をプレゼントしようとしたこと」を指している。

- (135) ((14) - 再掲)

[...]pyìdwín-síbwáyé-louʔŋán-hyìn-myá-kâ-lé lăgáun cún-twìn
[...]domestic-economy-business-owner-PL-NOM-DIS.also that.DET island-LOC
hòtè-myá tìsʰauʔ-nàin-yàn seiʔwìnzá-hmû myá + là-çáun tì-yâ-tì.
hotel-PL construct-can-PURP (be) interested.in-NMLZ many+come-fact know-AUX-vs.RLS

[青くて透き通った海底の珊瑚礁や魚など自然の美しさで有名なボツ島へ日帰りレジャーで観光する人が日々増加している。]

国内の企業経営者たちもその島でホテルを建てることに関心が高まってきているということが分かった。

Kyaymon: 2016/04/01, p.20

- (136) [...]lêcîn-tìncá-hmû myìhmyâ lòʔaʔ-tì-kò lăgáun ʔăpʰyiʔʔăpyeʔ-myá-kâ
[...]train-teach-NMLZ how many need-vs.RLS-ACC that.DET event-PL-NOM
pyâtâ-laiʔ-tì-hû sʰò-tì.
show-AUX-vs.RLS-QUOT say-vs.RLS

[2013年に始めたその事業に関連して(今年)3月のレバダンでの学生運動に警察隊が暴行を加えて強制的に解散させたことに多くの人が気づいた。EU 連合として、120人以上の人が逮捕され、多くの負傷者が出た事件に関する暴行のことを非難し、] 訓練がどれほど必要であるかをその出来事が示していると述べた。

例(135)と(136)の *lăgáun* はそれぞれ後ろに来る島や出来事を表す名詞の意味内容を文脈内の要素と関連付ける指示限定詞である。(135)の *lăgáun cún* は前略した部分の「青くて透き通った海底の珊瑚礁や魚など自然の美しさで有名なボツ島」であり、(136)の *lăgáun ʔəpʰyiʔʔəpyeʔ-myá* は「120 人以上の人が逮捕され、多くの負傷者が出た事件」のことである。

4.6.2.2. 指示代名詞（位置指示代名詞）にみられる文脈指示

位置指示代名詞は空間的位置を対象とする場合に用いられる。位置指示代名詞には *ʔi*, *tʰò*, *yín*, *lăgáun* という形式がある。以下、(137)~(140)はそれぞれ *ʔi*, *tʰò*, *yín*, *lăgáun* が位置指示代名詞として用いられている例である。また、本論で扱っていない *t̚i* にも空間的位置を対象とする例¹¹⁰がみられる。

(137) [...] *ʔi-twìn mǎ-pí-té-Ø*.

[...] here-LOC not-finish-still-vs.NEG

[私たちも感情を抑えることができなくなった。人の心を動かすような精霊の太鼓の音を聞いたり、母親を亡くした可哀そうな得度式を受ける子供と涙を流すその父親を見たりで、私たちは見るに耐えず、どうやって気持ちを抑えればいいのか分らなかった。]

これでもまだ終わらない。

Grade-11, Lessson-35, p.39

(138) *màunnàin-t̚i mǎndǎlé-t̚ò t̚wá-t̚i. tʰò-hmā tǎsʰín mēm̐yô-t̚ò kʰǎyí*

NAME.person-NOM NAME.place-ALL go-vs.RLS. there-ABL through NAME.place-ALL trip

sʰeʔ-myì.

continue-vs.IRR

マウンナインはマンダレーへ行った。そこからメイミョーへと旅を続ける。

Myanmar Language Commission (2005), p.46

(139) [...] *yín-twìn mīm̐-hn̐n nàin̐ṇànyé-ʔǎmyìn-hn̐n kʰànyùçeʔ*

[...] there-LOC myself-COM politics-opinion-COM conviction

mǎ-tù-t̚ù-myá-ʔá dīm̐kǎrèsìyè [...] ʔǎcʰeʔ 3-çʰeʔ pàwìn-t̚i.

not-same-person-PL-ACC democracy [...] factor 3-CLF include-vs.RLS

[前述の状況において PR (Permanent Residency) でだれを呼ぶかという問題が出された。それぞれのグループが一つになって 12 月 18 日に見解を発表した。] そこでは自分と政治的な意見や信念が異なる人たちに民主主義 [や平和と人権の問題に関わること

を制限しないよう、しっかりとした基本原則を立案することを] 含む 3 つの条件が含まれている。

The Voice Weekly: 2014/12/22-28, p.11

- (140) [...] s^hàin-k^háN tòdò-myámyá táyou?lùmyó-myá pàins^hàin-pí
 [...] shop-room quite-numerous Chinese-PL own-SEQ
 lǎgáun-tò-t^hàN-hmâ tǎs^híN pyànlè + hŋáyáN-yâ-çáun [...]
 those-PL-place-ABL through return+rent-AUX-fact [...]

[2000年に開いたマハーアウンミエ宝石販売所では]大部分の店舗は中国人が所有して、その人ら（／彼ら）からまた借りることになっているし、[店舗の価格は7千万チャットで、賃貸は10万チャット以上もすると翡翠商人たちに聞いた。]

The Voice Weekly: 2014/12/22-28, p.36

以上の例(137)~(140)はそれぞれŋi, t^hò, yín, lǎgáun が空間的・時間的な位置を指し示しながらその位置の代替表現として用いられている。例(137)は「母親を亡くした子供の得度式での悲しい場面」の空間的な位置、例(138)は「マンダレー」という空間的な位置、例(139)は「PR (Permanent Residency)問題についての見解を発表した時の状況が設定される」空間的な位置、例(140)は「中国人のところから」という起点の空間的な位置を指している。

4.6.2.3. 指示代名詞（非位置指示代名詞）にみられる文脈指示

非位置指示代名詞は物や事柄を指す物名詞句の文脈（／内容）を対象とする場合と人間あるいは人間相当の名詞句や動物を指す生物名詞の文脈を対象とする場合に用いられる。非位置指示代名詞にはŋi, t^hò, yín, lǎgáun という形式があり、そのうちの yín と lǎgáun は物や事柄を指す場合にも人間あるいは人間相当の名詞句や動物を指す場合にも用いられる。これに対し、ŋi と t^hò は物や事柄を指す場合にしか用いられない。

4.6.2.3.1. 非位置指示代名詞として物名詞句の文脈を対象とする場合のŋi

非位置指示代名詞としてのŋi（と t^hò）は先行文脈内の物や前に述べた事柄を指す場合に用いられる。例(141)のŋi は直前にあるマウン・ルーエーのせりふを指示している。

- (141) “hou?-lá, k^hε?-pì. bēhnè càn-mǎ-lé. bè-lò dǎdín yâ-tǎ-lé.”
 right-Q difficult-vs.INC how plan-vs.IRR-Q how-as news get-vs.RLS-Q
 ŋi-ká màunlù?é-ŋi ?ǎtàn p^hyi?-ŋi.
 this-DIS.csubj NAME.person-GEN voice COP-vs.RLS

「そうか。困ったな。どうするんだ？ どのような情報を得たんだ？」これはマウン・ルーエーの声である。

例(141)のꨀは先行文脈である「マウン・ルーエーの発話」を代替表現として指している場合である。

また、非位置指示代名詞のꨀは前に述べた説明や内容などをまとめる際によく使われる。以下(142)は先行文脈全体をꨀで代替し、その内容に関する作者の意見や判断などが述べられている締めくくりの文章として用いられている例である。

- (142) [...] ꨀ-ká c^hwètàyé ?ăsi?-tí.
 [...] this-DIS.csubj saving real-EMPH
【一方のチームは裸。もう一方のチームも何もない。でも一方のチームは石炭を溶かして体に塗ってある。】これは本当の節約である。

キッサン文学集: Kuta, p.155

例(142)では「皮肉っぽく述べた節約の方法という内容全体」をꨀで代替し、まとめていることが分かる。

4.6.2.3.2. 非位置指示代名詞として物名詞句の文脈を対象とする場合の t^hò

非位置指示代名詞としての t^hòは (ꨀと同様に) -ká ‘DIS.csubj’ や-lé ‘DIS.also’ など¹¹¹の助詞を伴って先行文脈内の物や前に述べた事柄を指す場合に用いることが可能である。ただし、本論で分析対象として取り扱った資料には t^hòが物や事柄を対象とする代名詞の表現が現れなかったため、以下に作例で示す。

- (143) tăc^há nílán cànzi-ꨀ t^hò-lé mǎ-hou?-pyàn-Ø.
 other way think-vs.RLS that-DIS.also not-right-again-vs.NEG
 別な方法を考え出した。それもまた違う。

4.6.2.3.3. 非位置指示代名詞として物名詞句の文脈を対象とする場合の yín

非位置指示代名詞としての yín (と lăgáun) は、ꨀと t^hòのような後続助詞の制限がなく、先行文脈内の物や事柄を指す場合に用いることができる。

- (144) [...] yín-hmà pyidwín-cwémyì p^hyi?-tì.
 [...] that-DIS domestic-dept COP-vs.RLS
 【国債を売るなりほかの援助を求めるなりで、財務の赤字を解決しなければならない。国債を企業経営者に売却するというのも政府がある一定の利子で経営者にお金を借

りることである。そのため政府は返って経営者に借金をするということになる。] それは国内債である。

The Irrawaddy: 2015/03/29, p.21

例(144)の yín は前述の「国債を企業経営者に売却する場合の経営者に対する政府の借金」を指している。

4.6.2.3.4. 非位置指示代名詞として物名詞句の文脈を対象とする場合の lǎgáun

非位置指示代名詞としての lǎgáun は yín と同様に、?i と tʰò のような後続助詞の制限がなく、先行文脈内の物や前に述べた事柄全体を指す場合に用いることができる。以下(145)はインダー族の人たちが浮き畑に穀物を育てること全体を lǎgáun が指示している。

- (145) ?ínǎ-tô-tì cúnmyó-çí-myá-pò-twìn ?ǎtí?ǎhnàn sai?pyó-çâ-tì.
 Intha-PL-DIS floating.island-AUG-PL-above-LOC grain plant-mutual-vs.RLS
lǎgáun-tô-kò yècʰàn-lou?nán-hû kʰò-tì.
 that-PL-ACC hydroponic.culture-work-QUOT call-vs.RLS

インダー族の人たちは浮き畑に穀物を育てる。 それを水耕栽培業と呼ぶ。

Grade-7: Lessson-4, p.14

例(145)の lǎgáun は「インダー族の人たちが浮き畑に穀物を育てること」を指している。

4.6.2.3.5. 非位置指示代名詞として生物名詞句の文脈を対象とする場合の yín

非位置指示代名詞としての yín は人間あるいは人間相当や動物などを指示する場合に用いることができる。ここで人間相当の名詞句というのは、典型的には組織や団体、建造物などのことで、名詞句そのものが指す対象は有生物ではなく、本来それ自体が感情の主体になったり、自ら動いたり、他に影響を与えるような主体にはなり得ないが、組織や団体を構成するのが人間であり、人間と同じように意志を持った主体として認識される名詞句のことである。以下、(146)は先行文脈の要素が人である場合の例であり、(147)は人間相当の場合である。

- (146) cáunǎ-myá-?i sei?-kò cʰou?cʰè-çʰín mǎ-pyû-Ø. **yín-tô-?á** lu?la?-swà tʰá-?i.
 student-PL-GEN mind-ACC control-NMLZ not-do-vs.NEG those-PL-ACC free-NMLZ put-vs.RLS
学生たちの心を拘束しない。 その人たちを自由にさせる。

キッサン文学集: Minthuwun, p.82

- (147) pàtì-tô tìsʰau?-çʰín ?àunmyìn-çè-lò-tì.
 party-PL establish-NMLZ success-vs.IMP-want-vs.RLS

yín-tô-kô c^{hi}?-tô¹¹² móun-tô-çâun mã-hou?-Ø.
 those-PL-ACC love-attr.RLS hate-attr.RLS-CAUS not-right-vs.NEG

政党の設立が成功してほしい。その人ら（／彼ら）が好きだからとか、嫌いだからとかではない。

The Voice Weekly: 2014/12/22-28, p.20

ここで非位置指示代名詞 yín が代替する対象は、(146)では「学生たち」という名詞句であり、(147)では「政党の背後にある政党の運営に関わっている人たち」のことである。

4.6.2.3.6. 非位置指示代名詞として生物名詞句の文脈を指す場合の lăgáun

非位置指示代名詞としての lăgáun も生物名詞句である人間（あついは、人間相当）や動物などを対象とする場合に用いることができる。以下、(148)は先行文脈の要素が人である場合の例であり、(149)は動物である場合の例である。

(148) ?ànàbàin-myá-kâ lăgáun-tô ?ăc^hèinhmì mã-tîhyî-ç^hín-çâun-hû tounpyàn-tî.
 authority-PL-NOM those-PL in.time not-know-NMLZ-CAUS-QUOT respond-vs.RLS

権力者たちは彼ら（／自分たち）が事前に知らなかったからだと応えた。

The Irrawaddy: 2015/03/29, p.10

(149) hɛ?tò-kò tìn myìn-p^hú-pà-tă-lá. lăgáun-?i ?ăhmwé-tî ménɛ?+tau?pyàun-?i.
 drongo-ACC [2] see-EXP-PLT-vs-Q that-GEN feather-DIS black+bright-vs.RLS

lăgáun-hnai? hyèhlyá-tô ?ăhmí-hnăk^hwâ-lé pà-?i.
 that-LOC long-attr.RLS tail-fork-DIS.also include-vs.RLS

あなたはオウチュウという鳥を見たことがありますか。そのオウチュウの羽は真っ黒で艶がある。そのオウチュウに長い二股の尻尾もある。

Grade-4: Lesson-15, p.22

例(148)での lăgáun は先行名詞句の「権力者たち」を指し、(149)での lăgáun は「オウチュウという鳥」を指している。

従って、文語体指示詞を以下の表 25 のように分類することができる。

表 25 文語体指示詞の分類

語類			用法	指示対象	指示詞			
					ʔi	tʰò	yín	lǎgáun
指示詞	代名詞	位置指示代名詞	現場	空間	ʔi (ここ)	tʰò (そこ)		
		物・事柄		ʔi (これ)	tʰò (それ)			
		人間・動物		ʔi (この人)	tʰò (その人)			
		位置指示代名詞	文脈	空間・時間	ʔi (ここ)	tʰò (そこ)	yín (そこ)	lǎgáun (そこ)
		物・事柄		ʔi (これ)	tʰò (それ)	yín (それ)	lǎgáun (それ)	
		人間・動物				yín (その人)	lǎgáun (その人)	
	限定詞	指示限定詞	現場	ʔi- (この)	tʰò- (その)			
			文脈	ʔi- (この)	tʰò- (その)	yín- (その)	lǎgáun- (その)	

4.7. ɲi, tʰò, yín, lǎgáun のそれぞれの使用

ɲi, tʰò, yín, lǎgáun は以下のようにそれぞれ異なる特徴を持っている。

4.7.1. ɲi と tʰò の使用

ɲi は前に述べた説明や内容などの締めくくりを示す場合にみられる。一方、tʰò は前に述べたことを更に展開する場合にみられる。

- (150) hyélùnlepídóʔǎkʰà tó-ǰí-ʔǎtwín-hyî yèʔàin tǎ-kʰû-hnai? lei? ʔǎ-ḵàun
long.long.ago jungle-AUG-inside-exist pond one-CLF-LOC tortoise one-CLF
nè-ɲi. tʰò ʔàin ʔǎní-hnai? ʔǎmìn ʔǎ-ḵàun nè-ɲi.
stay-vs.RLS that.DET pond near-LOC deer one-CLF stay-vs.RLS
tʰò ʔàin-ɲi ʔǎní ʔiʔpìn-hnai? kʰauʔhyàhɲe? ʔǎ-ḵàun nè-ɲi.
that.DET pond-GEN near tree-LOC woodpecker one-CLF stay-vs.RLS
tʰò ʔaʔtǎwà ʔóun-ʔú-ʔô-ʔi ʔǎshwèkʰinbún pʰyiʔ-câ-ywê
that.DET living.beings three-CLF-PL-DIS friend COP-mutual-SEQ
tǎ-ʔú-hnîn tǎ-ʔú cʰiʔkʰin-swà nè-çâ-ʔi. tǎ-nê-ʔóʔǎkʰà
one-CLF-COM one-CLF friendly-AUX stay-mutual-vs.RLS one-day-when
tó-laiʔ-mouʔsʰó tǎ-yauʔ-ʔi yèʔàin ʔǎní-ʔwín ʔǎmìn cʰè-yà-ḵò myìn-ywê
jungle-follow-hunter one-CLF-NOM pond near-LOC deer foot-print-ACC see-SEQ

tóunlúntín tǎyè-côgwín-kò t'hàun + t'há-k'ê-ŋi. [...]

three.ply leather-trap-ACC set+put-PAST-vs.RLS. [...]

ŋ-tô-ŋáp^hyín tǎrei^hàn-ç^hín-pìn tǎ-ŋú-kò tǎ-ŋú kùnyì + sàunhyau^h-câ-p^hú-lè-tì.

this.DET-as-accordingly animal-each.other-EMPH one-CLF-ACC one-CLF help+care-mutual-EXP-FP-vs.RLS

昔々森の中の池に亀がいた。その池の近くに鹿が住んでいた。その池の近くの木にキツツキがいた。その動物 3 匹は友人でありお互いに仲良くしていた。ある日猟師は池の近くに鹿の足跡を見て 3 本撚りの革紐の輪縄を仕掛けておいた。(中略) このように動物たちがお互いに助け合ったことがある。

Grade-5: Lesson-1, pp. 1-2

この例(150)はミャンマーの国語教科書にある「3 人の友達」という物語である。最初に森の中の池に亀がいるということでストーリーを始める。それから、その池の周りに鹿、その近くにキツツキがいて、その 3 匹の生き物たちが仲良くしているということを、^hò を用いて次々とストーリーを展開していることが分かる。そして、最後のまとめに^hì が使われているのである。

4.7.2. 指示代名詞 yín と lǎgáun の使用

論文などで文献を引用する場合、引用箇所の末尾に「作者名 (年代)」というように記すが、同じ論文の中で同じ文献を 2 回以上連続して引用する場合には 2 回以降の引用に‘ibid.’「同(書)」という意味で「yín」で記す。

(151) ¹ nàin pán hlâ(dau?^htà-), 1997, 84.¹¹³

²yín, 84.

¹Nai Pan Hla (Doctor-), 1997, 84.

²(ibid.: 84)

Cho ChoTint (2011:262)

例(151)の「yín, 84.」の yín は直前の Nai Pan Hla (1997: 84)を受けており、「同書: 84」という意味である。

yín に対して lǎgáun は前に述べたもの、あるいは記したものと同様であることを表す時の目次などに用いられる。次に続く作者名がその直前に挙げた作者名と同じである場合や、時代名が直前に書いた時代名と同じである場合に lǎgáun が用いられる。つまり、lǎgáun は日本語の「同上」という意味で用いられる。Okell and Allott (2001: 219)では、‘^hçé:⇒ditto, as above; in columns and lists; sentence.’と記述され、その例として‘^hမောင်ဆုရှိန်၊ ၁၅/-။ မောင်တင်လှ၊ ငှ်း။ Maung SS: K15, Maung TH: ditto.’を挙げている。

(152) 目次に使われている場合

- | | |
|---------------------|--------|
| 1) ヤーザクマーラ碑文 | バガン時代 |
| 2) ティンジーアタビナンダトゥー碑文 | lǎgáun |
| 3) タウンゲーニーバゴダ碑文 | lǎgáun |

Burmese Literature Collection Vol. 5 (1992) 一部改変

例(152)では、2)と3)の碑文が1)と同じく、バガン時代の碑文であることを lǎgáun で示されている。

以上、それぞれ文献を引用する際や目次などにみられる yín と lǎgáun の実例を挙げたが、その2語の使いわけについてはまだ不明である。この点については、更なる調査が必要であるが、母語話者としての感覚では、いずれの場合でも yín と lǎgáun の置き換えには問題ないように感じる。

4.8. 文語体における指示詞のまとめ

本章では文語体で書かれたキッサン文学が興隆した 20 世紀初頭から現在までの文献を中心に考察を行った。分析の方法はそれぞれの教科書や新聞などに現れる指示詞を選出し、指示用法ごとにグループ化した上で、その使い分けや性質を形式ごとにまとめた。

その結果、文語体指示詞を体系的にまとめるとともに、それぞれの指示詞が持つ次の4点の特徴を引き出すことができた。

- ・ 文語体指示詞の ṇi と tʰò は文脈指示のみならず現場指示相当用法でも用いられる。これに対し、yín と lǎgáun は文脈指示の表現のみとして用いられることが分かった。
- ・ 非位置指示代名詞としての yín と lǎgáun は物を代替して表現する場合のみならず、直接に人間や動物を代替する場合にも用いられるのに対し、ṇi と tʰò にはこのような使用がみられなかった。
- ・ yín と lǎgáun は「同上」という意味で上に述べたことを指し示す機能を持っているが、ṇi と tʰò にはこのような使用は存在しない。
- ・ ṇi は前に述べた説明や内容などをまとめる際によく使われる。一方、tʰò は前に述べた物や事柄などを更に展開する場合に使われることが確認できた。

4.9. 文語体 ṇi と tʰò の口語体との対応関係

本節では、文語体 ṇi と tʰò の口語体との対応関係について若干触れておきたい。

ビルマ語の歴史をみると、記年のあるビルマ語碑文の中で最も古いとされる 12 世紀初頭のヤーザクマーラ碑文には ṇi と tʰò の使用が観察される¹¹⁴。この碑文では ṇi の使用回数が 11 回、tʰò が 15 回であった¹¹⁵。これらの指示詞について、母語話者への調査で、口語体でどういう形式に対応するかを調べたところ、ṇi は全て di となるが、tʰò は hò とはならず全て ?édi

であった。つまり、文語体の tʰò を口語体の hò だけに対応させるという記述は不充分だ、ということである。ビルマ語の口語体において、ʔédì は重要な役割を果たしており、文語体の tʰò とも対応している。文語体の tʰò は口語体の hò と ʔédì の両方に対応しているものとして分析が必要である。しかしながら、本論で挙げたビルマ語文献をはじめ、ミャンマー国内における研究でこの対応関係について触れたものは管見の限りない。

従って、第 3 章と第 4 章の記述より、ビルマ語の口語体と文語体の指示詞の対応関係を以下表 26 のようにまとめることができる。

表 26 ビルマ語の口語体・文語体の指示詞

口語体			文語体		
限定	位置	非位置	限定	位置	非位置
dì-	dì	dà (/ dìhà)	ʔì-	ʔì	ʔì (ʔǎyà)
ʔédì-	ʔédì	ʔédà (/ ʔédìhà)	tʰò-	tʰò	tʰò (ʔǎyà)
hò-	hò	hòhà	yín-	yín	yín (ʔǎyà)
			lǎgáun-	lǎgáun	lǎgáun (ʔǎyà)

「はじめに」でも述べたように、現代ビルマ語では口語体と文語体とで指示詞や助詞類の形式などが異なる。同じ言語の二つのスタイルと言うことからすれば、両者にある異なる形式同士がある程度一対一に対応していることが期待される。しかしながら口語体のある形式が文語体のある形式と等価物であるかどうかを厳密に示すことは困難である。特に指示詞の場合、現場指示や文脈参照現場指示などは文語体ではほとんど観察されず、作例も極めて難しい。そのため文語体の現場指示や文脈参照現場指示を実証することはできない。

とは言え、第 3 章と第 4 章での考察結果から類推するに、両者の形式の持つ現場指示、文脈指示といった「中心的」な用法には相当程度の重なりが見られるという点を考慮すれば、不完全ではあるものの、表 26 のような対応関係を示すことには妥当性があると考えられる。

また、指示詞の場合は、口語体では位置指示名詞と非位置名詞の形式がそれぞれ dì, ʔédì, hò と dà, ʔédà, hòhà とに分化しているが、文語体の方では位置指示名詞と非位置指示名詞の間ではそのような形式の違いが現れない。その理由としては、口語体では位置指示名詞と非位置指示名詞の違いが形式の違いによって区別されているが、文語体では位置指示名詞と非位置指示名詞の違いがなく、後続の格助詞によって区別しているからだと思われる(岡野 2018: PC)。口語体では位置指示名詞と非位置指示名詞は異なる形式を持っているためか、格助詞の区別はみられない場合があるが、文語体では位置指示名詞と非位置指示名詞が同形であるため、その区別は格助詞でマークされると考えられる。例えば、格助詞‘-kò’は、口語体では対格(人間または事物を表す)として使われる場合と向格として使われる場合があ

るが、文語体では物を表すときの対格として使うことが多く、主として受領者を表わす対格としては‘-ŋá’が使われ、向格としては‘-tò’が使われる。文語体では、指示詞の形式に区別がないため、このように異なる格助詞を伴うことによって名詞の語類を表している、ということである。

従って、ビルマ語の指示の全体像を以下表 27 のように整理することができる。

表 27 ビルマ語の指示詞の全体像

語類			指示詞		
指示 詞		指示限定詞 「指示詞 + N」	ŋi-	tʰò-	yín-/ lăgáun-
			dì-	hò-/ ʔédì-	ʔédì-
			「この」	「あの/その」	「その」
	指示 代 名 詞	位置指示代名詞 「指示詞 + CM」	ŋi	tʰò	yín/ lăgáun
			dì	hò/ ʔédì	ʔédì
			「ここ」	「(あ)そこ」	「そこ」
		非位置指示代名詞 「指示詞 (+ CM)」	ŋi (ʔăyà)	tʰò (ʔăyà)	yín (ʔăyà)/ lăgáun (ʔăyà)
			dà (/dihà)	hohà/ ʔédà (/ʔédihà)	ʔédà (/ʔédihà)
			「これ」	「あれ/それ」	「それ」
			/	/	yín/ lăgáun
					—
					「彼／彼女」

5. 指示詞の周辺的な用法

本章では、指示詞の周辺的な用法について触れる。

5.1. 指示表現を含むその他の現象

5.1.1. h_ó が付加された形式の指示詞

h_ó は「ほら、見た通り。」という意味で聞き手の注意を促す時に使う語であり、眼前性があることを強く示唆する。岡野 (2011: 80) は「拡張形式 h_ó の起源である間投詞は驚きの感情を表す(『ビルマ語辞典』1978-1980: vol. 4, p.242)」と述べている。h_ó は単に聞き手の視点を誘導する時に現れる間投詞としての役割のみを果たし、指示の機能は持たない。このように h_ó は眼前性が強く現場指示にみられるのが基本的である。

- (153) h_ó-dì-hmà yáun + pé + nè-pì yáun + pé + nè-pì
 INTERJ-here-LOC sell+give+stay-vs.INC sell+give+stay-vs.INC
 ほら、こっちで売っていますよ。

市場などへ行くと、(153)のような言葉をよく耳にする。この場合、物の売り手は売り物を前に置いて大声で群衆に呼びかけているが、呼びかけられた方は全員がその商品を直接目にしているとは必ずしも限らない。それでも、売り手はまず、自分のものに目を向けてもらおうという意図で h_ó を用いて呼びかけているのである。つまり、聞き手の注目を促している。このような場合、一部の聞き手の視界には対象物が入っていないことになる。

一方、以下(154)のような場合、対象物が聞き手の視界内にあるが、話し手にとってはその対象物がみられない場合である。

- (154) s^hà-yè cāmā-ḵò k^hû ?ānè?āt^há-?ātáin dābòunzàndé tū-?àun
 teacher-VOC [1f]-ACC now condition-just.like absolutely same-PURP
 s^hwé + pé-pà-Ø-nò cāmā-myē?hnà-ḵâ ?āyē?ācāun-ṭwè-yó
 draw+give-PLT-vs.IMP-FP [1f]-face-LOC wrinkle-PL-DIS.also
 h_ó-dì pá-t^hē?ḵâ hmê-lé-yó
 INTERJ.OBL-this.DET cheek-upon-LOC mole-DIM-DIS.also

先生...私を現在のありのまま状態にまったく同じく描いて下さいね。私の顔のしわも、この頬にあるほくろも

(‘?ācàngáun’, <http://www.myanmarnewszone.com/jokes/8012-a-good-idea.html>, 2013.12.04 取得)

- (155) ...h_ó-dà-ḵâ cē?tá h_ó-dà-ḵâ wē?tá h_ó-dà-ḵâ bāzùndou?-cí-lè ṭāmí-yê.
 ...INTERJ-this-NOM chicken INTERJ-this-NOM pork INTERJ-this-NOM lobster-AUG-FP daughter-FP

...これが鶏肉、これが豚肉、これがエビだよ、娘さん。

(MSD2012: 140)

(155)は *hó-dà* が鶏肉、豚肉、エビなど近くにあるものを列挙して指す場合の例であり、次の(156)は *hó-hò* が遠くの場所を指す場合の例である。

(156) *ní-pà-pì-kwà, hó-hò-hyê-kâ ?ámó-nì-nê hmòunkou?kou?-?èin-pé.*
near-PLT-vs.INC-FP.M INTERJ-there1-front-ABL roof-red-INS darkly-house-FOC

近くなってきたよ、あの前の赤い屋根の暗めの家だ。

(TDS2001: 33)

また、以下(157)のような *hó* と *hò* の間にポーズが入る例もある。*hó* が単に間投詞としての意味を持つことがこの例からも明らかである。

(157) *hó ... hò-hmà ?úkáun-tàun pyàn + là-pì.*
INTERJ ... there1-LOC NAME.person-EMPH return+come-vs.INC

ほら... あそこに。もうウーカウンが帰ってきたよ。

(MSD1994: 200)

更に、(158)のように読者に直接指し示すかのようなニュアンスを持つ文脈指示として使われる場合もある。

(158) *myànmà-zǎgá-hmâ kǎrîyàdau? shò-yà-hmâ kǎrîyà-kò ?āt^hau?ākù + pyû-tè*
Myanmar-language-ABL auxiliary.verb say-while-LOC verb-ACC assist+do-vs.RLS
shò-kàhmyâ-nê mǎ-pí-pà-p^hú. hó-dì-lò ?ìngàya?-twè
say-only-COM not-finish-PLT-vs.NEG INTERJ-this.DET-as feature-PL
hyî-yâ-tè.[...]
exist-AUX-vs.RLS

ビルマ語で助動詞と言う時、「動詞を補助することだ」と言うだけでは済まない。このような特徴を持っていなければならない。[(1) 動詞に後接して動詞の意味を修飾する。(2) 動詞との接続は閉じた連結 (close juncture)となる。(3) 動詞と助動詞の間に否定辞の *ə /mǎ/*を含め、いかなる要素も割って入ることができない...]¹¹⁶

(MTN2009: 85)

例(158)で *dì* が指しているのは「以下で列挙される事柄」ということであり、従って、後方照応の例である。この(158)の例は *hó-dì* が吉田 (2004: 54)の言う「時間的ズレのある

直示」の文脈指示として現れる場合である。このように指示できるのは、**hó-dì** は **hó** を付けることによって現場指示の場合に眼前性を強く持つからだと考えられる。文脈指示の場合は、話し言葉で説明する場合の文章文脈の後方照応に限られると考えられるが、文章内に **hó-dì** が用いられているのは読者に直接指し示すかのようなニュアンスを持つ表現となる。

5.1.2. 遠い過去や場所を表す hó

ㄅㄛˊ/hó/¹¹⁷は遠い過去や、遠いところを指すときに用いられる。その統語的な振る舞いは指示詞とは若干異なるため、指示詞体系の一部をなす形式としては分類しないものの、意味的には指示詞の体系を補完していると考えられる。

時間名詞に前接する **hó** は表面的には指示詞 ㄅㄛˊ/hò/ と入れ替わっているようにみえる。

- (159) **hó** hyéhyé-tóungâ-tê bàyànăṭi-pyì-čí-yê ?ăšùN-?ăp^hyá-hmà
 very.distant.DET long.ago-while-HS NAME.place-country-AUG-GEN end-tip-LOC
 kou?kò-pìN-čí tǎ-pìN hyî-tǎ-tê
 NAME.tree-tree-AUG one-CLF exist-vs.RLS-HS
 ずっと昔のことだとさ... バーヤーナティ国の辺境にビルマネム (Albizia lebbeck) の木が 1 本あったんだそうだが。
 (MSD2012: 171)

- (160) **hó** k^hi?-tóungâ ?ăye?ṭămá s^hò-tà-kò lē?hnyó + t^hó + pyâ-k^hê-yâ-tê.
 very.distant.DET era-while drinker say-nc.RLS-ACC finger+point+show-AUX-AUX-vs.RLS
 dì k^hi?-hmà ?ăye? mǎ-tau?-ta?-tê lù-kò
 this.DET era-LOC alcohol not-drink-can-attr.RLS person-ACC
 lē?hnyó + t^hó + pyâ + nè-çâ-yâ-pì.
 finger+point+show+stay-mutual-AUX-vs.INC
 昔は酒飲む人を指さしていた。現代では酒を飲まない人を指さすようになった。
 (DAM2000: 76)

(159)と(160)の **hó** は **hò** と置き換えることが可能であるが、ニュアンスが異なる場合がある。一般に前者を使う方が後者を使うのに比べ、現在からより離れているニュアンスを持つ。また、以下(161)のように、**hó** と **hò** が共起することもある。

- (161) **hó-hò-tóungâ** ?èyàwăḍi-myi?-cí bé-kâ nyàuntò s^hò-tê
 very.distant.DET-that1.DET-while.HS NAME.thing-river-AUG beside-LOC NAME.person say-attr.RLS
 ywà-kǎlé tǎ-ywà-hmà kòcau?k^hé s^hò-tê lù tǎ-yau? hyî-tê
 village-DIM one-CLF-LOC NAME.person say-attr.RLS person one-CLF exist-vs.RLS

昔エーヤーワディ川の横にニャウントーという村にコーチャウケーという人がいました。

(UH2005: 73)

次の例(162)は「遠いところ」を表す名詞限定要素の例である。このとき奪格助詞-*kâ* が必須となるケースがある。

- (162) a. hò-*kâ*/ hò lù b. hó-*kâ*/ *hó lù
 there-ABL/ that1.DET person very.distant-ABL/very.distant person
 あそこの人／あの人 ずっと向こうの人／(ずっと向こうの人)

- (163) a. hò-*kâ*/ hò t̪iʔpìn b. hó-*kâ*/ hó t̪iʔpìn
 there-ABL/ that1.DET tree very.distant-ABL/very.distant tree
 あそのの木／あの木 ずっと向こうの木／ずっと向こうの木

(162)では遠称①*hò* と異なり、*hó* は直接名詞を限定することができないが、(163)の場合は名詞を直接限定できる。このような違いが出る理由として、限定する名詞が移動可能かどうかという点が考えられる。つまり(162)の「人」は移動可能、(163)の「木」は移動不可能であることが直接限定の可否に関わっている。

5.1.3. *dì* と *hò* の特別な用法

目下の人物を指示する表現の中に指示詞 *dì* と *hò* が現れることがある。これは親族関係や親しい付き合い同士では親しみのある表現となる反面、そうでない相手に使うと見下す態度になり、かなり失礼な印象を与える。例えば目上の者が目下の者を怒鳴るような場面にもよく現れる。

このような用法でよく用いられる *ʔākàun* は「奴」という意味の語で、*kàun* はその接頭辞 *ʔā*-が脱落した形式である。*ʔākàun* はまた動物類という意味もある。以下の(164)は *dì* を用いた例であり、(165)と(166)は *hò* を用いた例である。

- (164) *dì* *kàun-kâ* ʔămyé mǎ-yòun-yâ-p^hú.
 this.DET fellow-NOM always not-trust-AUX-vs.NEG
 こいつはいつも信用できない。

- (165) *hê* *hò* ʔākàun leʔ mǎ-s^hé-pé bè t^hâ + pyé-tà-lé
 INTERJ that1.DET fellow hand not-wash-without where stand+run-nc.RLS-Q
 おい、お前、手を洗わないでどこへ逃げるんだ。...

(MSD2012: 140)

(166) sà néné taʔ-tê hò ʔǎkàun nè-kʰê-Ø. càn-tê lù-twè
 letter little able-attr.RLS that1.DET fellow stay-AUX-vs.IMP remain-attr.RLS person-PL
 laiʔ-kʰê-çâ-Ø
 follow-AUX-mutual-vs.IMP

少し字が分かるお前は残って、残りの人たちはついて来い。

(MM1987: 15)

hò には次のような例もある。(167)は話し手が直接知っている第三者のことを指す場合であり、dì と入れ替えると不自然な例になる。(168)は話し手が知らない第三者のことを指す場合であり、dì との入れ替えが可能な例である。(168)で dì を用いると、dì kàun 「こいつ」という読みになるが、話し手が知らない第三者を指すことに変わりはない。

(167) ké bè-mǎ-lé hò kàun
 INTERJ where-LOC-Q that1.DET fellow
 {keiʔsâweiʔsâ-twè hyín-pí-tò tìntʰúnʔaùn-kò mé-yâ-tì}
 sundry.matters-PL solve-finish-while NAME.person-ACC ask-AUX-vs.RLS
 「さあ、どこだ？あいつは……」

一件落着すると、ティントウンアウンのことを尋ねなければならない。

(MTT1995: 43), (MDM1983: 30)一部改変

(168) hò kàun-kâ mín-nê ywèdù-lá
 that1.DET fellow-NOM [2m]-COM the.same.age-Q
 そいつは君と同年かい？

(MTT1995: 51), (MDM1983: 39)

また、hò は遠い過去を指すのに対し、dì は現在を含む近い過去と現在を含む近い未来を指す。(169)の hò は「過去」という意味のʔǎyìn に言い換えられ、(169)と(170)の dì は「現在」という意味のʔǎgû、gû に言い換えられる。過去のことを hòʔǎyìn 「あの過去」、現在のことを dìʔǎgû/ dìgû 「この現在」という表現もある。

(169) hò tǎlǒ-kâ tòtò pù-pèmê dì tǎlǒ néné pyàn + ʔé + là-tè.
 that1.DET interval-PAST quite hot-although this.DET interval little return+cool+come-vs.RLS
 この間は結構暑かったけど、最近少し涼しくなってきた。

(170) dì tǎ-yeʔ hnǎ-yeʔ-ʔǎtwín louʔhán myànmýàn sâ-hmâ pʰyiʔ-mè.
 this.DET one-CLF two-CLF-during work quickly start-only.when COP-vs.IRR

この 1、2 日の内に事業を早く始めないと。

(169)の hò と dì は具体的な遠さではなく、現在から離れる心理的な遠さを表す。hò は遠い過去のことを表し、dì は現在を含む近い過去を表す。(170)は dì が現在を含む近い未来を指す例である。この 2 例からは、dì が現在を含む近い過去と現在を含む近い未来を指すのに対し、hò は遠い過去を指すことが分かる。

次の dì-hmà は h5(5.1.1)とよく似たもので、相手の注意を引こうとする場合に用いられる。dì-hmà の文字通りの意味は「ここで／に」だが、それに対応する述語はない。dì-mè¹¹⁸という形式もある。

(171) dì-hmà tǎnjáun nǎ ʔácaun-kò mín cá-pʰú-tè mǎ-houʔ-lá
 here-LOC NAME.person [1].OBL case-ACC [2m] hear-EXP-vs.RLS not-right-Q
 ね、タンジャウン。わしのことはわかっておるだろう。

(MTT1995: 76), (MDM1983: 66)一部改変

5.1.4. hòdín/ hǎwà (hǎhwà)の用法

hòhà と同様の意味を表す形式として hǎwà (hǎhwà)、hòʔouʔsà、hòdín がある。hǎwà (hǎhwà) は hòhà が音変化して初頭音節が弱音節になった形式、ʔouʔsà は「もの」という自立形態素、dín または tǐn は三人称代名詞である。

Khin Min (2007: 34)は、「hòhà という使用から hǎwà の使用に変わる場合も多くある。hòdín、hòʔouʔsà として使用すると名前を表現してはいけないもの、あるいは、名前を表現したくないものを指すことになる」と述べている。Myanmar Language Commission によるビルマ語辞典 (1978-1980)には hòdín を 1.「やや遠いところにある、とあるものについて表す言葉(口語表現のみに使用する)」、2.「名前を覚えていない、言い表すことができないものについて表す言葉」(vol. 4: p.243)と記述されている。

hò が接続する名詞の元々の意味から、hǎwà (hǎhwà)、hòʔouʔsà は物名詞、hòdín は人間名詞であることが多いが、実際には hǎwà (hǎhwà)と hòdín は名前を表現したくない、あるいは知らない物ものであってもそのような人間であって指すことができる。

(172) ʔèin-wâ-hmâ nè-pí mâ-hòdín-yè... bà cʰeʔ-lé{-hû mé-kà
 house-entrance-ABL stay-SEQ HON.F-that1.thing-VOC... what cook-Q-QUOT ask-SEQ
 mǐbòjàun-tʰé-ʔǎtʰi tán-pí wìn + tʰwá-nàin-tʰi ʔǎyâ-tà-myó-kò wìndàmiyà
 kitchen-inside-TER straight-SEQ enter+go-can-attr.RLS taste-kind-ACC NAME.place
 yǎkʰû tǎnlwìn-lán-tʰwìn yâ-nàin-myì mǎ-houʔ-pè-Ø.}
 now NAME.place-road-LOC get-can-vs.IRR not-right-AUX-vs.NEG

家の入口から「××さん、今日の料理はなに？」と尋ねながら台所にも直接入って行

けるような楽しみをウインダミア、現在のタンルイン通りでは得られるはずがない。

(MSD1994: 191)

- (173) hà ?ú-hăhwà bè-kâ hlê + là-k^hê-tă-lé
 INTERJ HON.M-that1.thing where-ABL turn+come-AUX-vs.RLS-Q
 あっ、××さん、どこから回って来たの？

(TDS2012: 9)

以上(172)と(173)の例では hòdín、hăhwàの前に敬称の「～さん」というのを付けて「何某」「××さん」の意味で用いられている。ただ必ずしも敬称を付けなければならないというわけではない。

5.2. 談話中に現れるフィラー

ビルマ語では、談話中に考えがまとまらなかったり、適当な言葉を思い出せなかったりする場合の言い淀みの表現、フィラーとして ʔ/hò/が用いられる。特に次に列挙するケースによくみられる。

(174) 言い訳をするケース

- hò hò myín-kò hmì-ʔàun mă-laiʔ-nàin-lô-pà myín-kâ c^hè
 INTERJ INTERJ horse-ACC cash.up-PURP not-chase-can-because.of-PLT horse-NOM legs
 lé-c^háun cǎnò-kâ hnă-c^háun-mô-pà.
 four-CLF [1m]-NOM two-CLF-because.of-PLT
 あのう、馬に追いつけないからです。馬は4本足で私は2本足だからです。

(MTL2005: 14)

(175) 嘘をつくケース

- hò ?eín-hyê-kâ myín ʔă-sí-nê p^hyaʔp^hyaʔ ʔwá-tóungâ-pô.
 INTERJ house-front-LOC horse one-CLF-INS pass.through-RDUP go-while-FP
 あのう、うちの前を馬で何度も通ったときだよ。

(MTL2005: 98)

(176) 戸惑っているケース

- hò hò hlè pò-hmà kòun-ʔwè-nê pyê-nè-lô dì k^hălê-kò
 INTERJ INTERJ boat above-LOC goods-PL-COM full-stay-because this.DET child-ACC
 dì ná-hmà-pé k^hănâ ʔeiʔ + t^há-laiʔ-yìn káun-mă-lá
 this.DET near-LOC-FOC awhile put.to.bed+put-AUX-COND good-vs.RLS-Q
 sínsá-nè-lô-pà dì k^hălê-kâ ʔeiʔ s^hó-tà-hyîn. ʔù nó + là-yìn
 think-stay-because-PLT this.DET child-NOM very bad-nc.RLS-FP.F [3] wake up+come-COND

ʔǎlouʔ káun louʔ-yâ-hmà mǎ-houʔ-p^hú
work good do-AUX-nc.IRR not-right-vs.NEG

あのう、舟は商品でいっぱいだから、この子をこちら辺でちょっと寝かせたらどうか
と考えているからです。この子はとても機嫌が悪くて、こいつが起きてきたら仕事が
ちゃんとできなくなります。

(MTL2005: 127)

(177) 脅えているケース

“cǎnò-tò hò ʔɛ kòʔú-nê kànkáun-kò-yó k^hò-lô yâ-mǎlá-byâ.”
[1m]-PL INTERJ INTERJ NAME.person-COM NAME.person-ACC-DIS.also call-CNSQ no.matter-vs.IRR-Q-FP.M
{kòtó-kâ mǎyétǎyé mé-tì.}
NAME.person-NOM hesitantly ask-vs.RLS

「私たち...あのう...ええと...コー・ウーとカンカウンを呼んでもいいですか。」
コー・トウがおずおずと聞く。

(MTL2005: 182)

(178) 遠慮がちのケース

hò hò nèyà títicâcâ-lé hó+pé-pà-Ø-lá s^hǎyà-yè.
INTERJ INTERJ place definitely-DIM foretell+give-PLT-vs.IMP-Q master-VOC

あのう、場所を正確に占ってくれないでしょうか、先生。

(MTL2005: 140)

(179) 急に説明できないケース

hò hò dǎbyeʔsí+hlé-tà-tò ʔǎwuʔ+hyò-tà-tò.
INTERJ INTERJ broom+sweep-nc.RLS-PL clothes+watch-nc.RLS-PL

あのう、床を（箒で）掃いたり、洗濯したりなど。

(MSD2012: 64)

(180) 急に思い出せないケース

hò-lè ʔǎp^hó-čí tǎ-yauʔ-nê nè-tà-lè.
INTERJ-FP grandfather-AUG one-CLF-COM stay-nc.RLS-FP

あのう、あるお爺さんと住んでいたことだよ。

(MSD2012: 69)

以上、(179)~(180)は、急に適当な言葉を思い出せないが、取り敢えず何かを言い出そうと
する場面である。こういった場合、話し手の記憶にはあれと言って、すぐに指し示せるよう

な事柄がない。

(181)と(182)は自然会話に確認された例である。(181)の(a)A のせりふからは場所名とその位置情報がすぐに思い出せず、また(c)A からミィーシェーという麺の名前を急に言えないということがうかがえる。(182)の(d)B も適切な言葉を探している場合だと考えられる。

(181) アンティーク雑貨屋での会話

(a)A: bē ná-hmà-lé. bē hòtè-lè. hê ɲà pyó-mè. hò nèyà-lè
 which.DET near-LOC-Q which.DET hotel-Q INTERJ [1] say-vs.IRR that1.DET place-FP
 hò bē nèyà-lé. hò ʔitǎli sáʔauʔsʰàin hyî-tè tî-lá.
 INTERJ which.DET place-Q that1.DET Italy restaurant exist-vs.RLS know-Q
 ʔǎgû hòhà-lè mákeʔpǎlè ʔê nèyà tî-lá.
 now INTERJ-FP NAME.place that2.DET place know-Q
 sìngǎpù tǎnyóun hò bēʔ néné ʔwá-yìn yauʔ-pì-lè
 NAME.place embassy that1.DET side little go-COND arrive-vs.INC-FN

どこら辺？どこのホテル？ねえ、聞いて、あそこよ、あのう、どこだっけ？あのう、イタリアレストランがある、知ってる？今、あのう、マーケットプレイスのそこ、知ってる？シンガポール大使館を少し先にいくと着くよ。

(b)B: tû ʔǎyìn-tóungâ ʔaiʔ¹¹⁹ ná-kâ hòtè-hmà nè-tà
 [3] before-while that2.DET near-ABL hotel-LOC stay-nc.RLS
 彼女前はそこら辺のホテルで泊まっていた。

(中略)

(c)A: ʔò dànê nyǎmâ-kò môun-taun mã-cwé-yâ-té-pʰú.
 INTERJ by.the.way sister-ACC snack-even not-feed-AUX-still-vs.NEG
 hò ʔǎná-hmà yàngín dì ná-hmà hòhà yáun-tè shò-tà-nò
 that1.DET near-LOC NAME.place this.DET near-LOC INTERJ sell-vs.RLS say-attr.RLS-FP
 pyó+tʰá-té-tè-nò. myíhyè myíhyè.
 say+put-still-vs.RLS-FP NAME.food NAME.food

ところで、あなたに、まだお菓子すらご馳走してないね。あそこら辺に、ヤンキンのこの辺に、あれを売ってるってね。一度言ってたよね。ミィーシェー（麺料理の一種）、ミィーシェー。

2016/3/7 収録の自然会話

(182) お米屋での会話¹²⁰

(a)A: ʔăgû bəhnă-ye? cà-hmà-lè.

now how.many-day long-LOC-Q

今回、何日間いるの？

(b)B: pyàn-mè. càdàbădé.

return-vs.IRR Thursday

帰る。木曜日に。

(c)A: càdàbădé. ʔè myàn-tǎlò-pé

Thursday? INTERJ early-as-FOC

木曜日？ええ、早いね。

(d)B: kʰànà-pé. dì tǎ-kʰauʔ-kâ hò, cáun keiʔsâ-nê là-tà sʰò-tô

little-FOC this.DET one-CLF-NOM INTERJ school matter-COM come-nc.RLS say-while

ちょっとだけね。今回は、あのう、学校のことで来たから。

2016/3/7 収録の自然会話

5.3. 慣用表現

ビルマ語の慣用表現に ɔ̃/hò/ と ɛ̃/dì/ の組み合わせがある。ɔ̃/hò/ と ɛ̃/dì/ は以下(183)と(184)のように「hò V dì V」や「dì V hò V」の形で現れる場合もあれば、(185)と(186)のように「hò N dì N」や「dì N hò N」の形で現れる場合もある。このとき hò を ʔédì に置き換えることは不可能である。一般に hò-N/ V が先に現れるパターンが自然である。

この慣用表現における hò や dì には具体的な指示対象があるとは考えづらい。hò や dì は格助詞も名詞も伴わない場合は位置名詞であり、例文(183)で hò や dì は mé 「尋ねる」の対象ではあり得ないことになる。

・ hò V dì V

(183) hò mé dì mé mé-tè.

that ask this ask ask-vs.RLS

あれこれ尋ねる。

(184) hò twá dì là louʔ-té.

that go this come do-vs.RLS

あっち行ったりこっち来たりする。

- hò N dì N

(185) “bà tóuN-hmà-lé.”

what use-nc.attr-Q

「何に使うのかの？」

“hòhà-lé dīhà-lé wè-yâ-tà-pô.”

that-DIM this-DIM buy-AUX-nc.RLS-FP

「あれやこれや買うのにさ。」

(MTT1995: 115), (MDM1983: 105)

(186) hò-?ätwe? dī-?ätwe? hòdín dīdín leʔsʰauN-pyiʔsí-twè-pô-lô tǎkǎté.

that-sake this-sake that this present-goods-PL-FP-QUOT really

あれこれのため、あれやこれやプレゼントだって言えば、本当に。

(MSD2012: 94)

ᵛᵛᵛᵛᵛᵛ/hòhòdīdī/ 「あちこち」 もこのような慣用表現の一種とみなしていいだろう。

ここで指摘しておきたいのは、これらの慣用表現と同様に、下の(187)と(188)でみられる hòbeʔ という表現が dībeʔ 「こちら」 に対立する 「あちら」 として使われていることである。-pʰeʔ/-beʔ 「～側」と指示詞 hò, dī が結びついた形式である。これらの例では hòbeʔ が具体的な指示対象を持っているというより、話し手の領域を dībeʔ に対立する 「それ以外の領域」 を指すに過ぎない。

(187) ...hòbeʔ ná-hmà cǎnò tǐʔkáiN-lé-twè cʰó-pí saiʔ + tʰá-tè.

...that.side near-LOC [1m] branch-DIM-PL break-SEQ stand+put-vs.RLS

…あっちに木の枝を折って立ててある。

(MTT1995: 145), (MDM1983: 135)

(188) sánbauʔ-kádô tǎ-màin-lauʔ wé-té-tè. cǎnò ʔeiʔ-tê nèyà-kádô

spring-CNTR one-mile-about far-still-vs.RLS [1m] sleep-attr.RLS place-CNTR

sánbauʔ hòbeʔ-hmà

spring that.side-LOC

「泉の方はまだ一マイルほどあるだ。おいらの寝場所は泉の向こうだ。」

(MTT1995: 121), (MDM1983: 111)

(188)では hòbeʔ の前に sánbauʔ 「泉」という具体的な場所を示して、そこよりも話し手に近い側の領域を dībeʔ として想定し、hòbeʔ と対立させている。これらの例は慣用表現で hò が dī より先に発話されやすいのと同様、話し手の領域 dī が hò を発話する時点で既に想定

されていると考えられる。

5.4. 指示表現の重複

散文などには ဤဤ/ဂီဂီ/や ဝိုဝို/တံတံ/などの指示表現の重複がみられ、現代の文献などにもこのような重複の使用が使われている。この場合、ဤ/ဂီ/や ဝို/တံ/などのように単独で使われる形式の複数形のようなものとしてみなすことができ、「これ」「ここ」に対する「これら」「ここら」、「それ」「そこ」に対する「それら」「そこら」の意味で使用される。Myanmar Language Commission (1978-1980)では တံတံ の意味を「指し示せる有生・無生の複数のものを指す語」¹²¹として、တံတံဂီဂီ を「多種多様、様々な側面、あらゆる」¹²²としている。Myanmar Language Commission (1978-1980)では(189)と(191)は人間や人間相当を対象とする例であり、(192)と(193)は事物を対象とする例である。そして、(194)と(195)は場所を対象とする例である。

- (189) ဂီ-ဂီ lézá-pùzò-t^hei?-t^ó pou?gò-tô-?á lē? sh^hè-ph^yà mó
this-this respect-worship-worth-attr.RLS person-PL-ACC hands ten-CLF roof
hyi?kó-pà-?i
pay homage-PLT-vs.RLS
このような尊敬すべき方々に手を合わせて拝みます。

- (190) [...] myá-t^ó-?áp^hyīN t^hò-t^hò-t^ó cán sh^hāyà-tô-twīN pālī da?k^hāN
[...] many-attr.RLS-as that-that-attr.RLS thesis teacher-PL-LOC pali essence
hyī-cā-tī.
exist-mutual-vs.RLS

[特に散文の書き方を学びたいならば、その比喩的な説法書や仏典も学べるべきであろう。多くの場合、その仏典の執筆者は小説家ではない。そうでないからといって彼ら作家ではないと言ったら間違いである。] 多くの場合、そういう仏典作者たちにはパーリ語のセンスがある。

Grade-10: Lessson-17, p.86

- (191) sīnzi?-tòká ?ācīN na?-tô-tī ?ācīN-?ācīN ?āya?-hnai?-tāhlyīN
actually-DIS some.DET spirit-PL-NOM some.DET-some.DET place-LOC-only
nè-cā-kòun-?i
stay-mutual-AUX-vs.RLS

本当はその神たちはそういう場所にのみ住んでいる。

<http://myanmarsutta.net> (2018/07/07 取得)

(189)は尊敬すべき方々を示し、(190)は先行文脈に述べた「文献者たち」を示している例である。

- (192) $\text{t}^{\text{h}}\text{ò-t}^{\text{h}}\text{ò-t}^{\text{h}}\text{ò}$ sà?ou?-myá-hnai? myànmà-pyì ?ăcáun pà-tì
that.DET-that.DET-attr.RLS book-PL-LOC Myanmar-country case include-vs.RLS

- (193) **𑜋𑜤-𑜋𑜤-𑜏𑜤** kei?sa ci-ŋe-tô-kâ cãnou?-tô-ʔá címa-k^haink^han-𑜏𑜤
that.DET-that-attr.RLS matter big-small-PL-NOM [1]-PL-ACC large-strong-nc.attr

- (194) ʔăk^hán-tʰé wìn-ywê tʰò-tʰò ʔì-ʔì cî-tì
 room-inside enter-SEO that-that this-this look-vs.RLS

- (195) lâ-tì nyâ-ʔāk^{hà} t^húnlín-tauʔpâ-ŋi. t^hòhmâtāpá
moon-NOM night-time shine-bright-vs.RLS furthermore
mí-tì nê-yó nyâ-pà t^hò-t^hò ʔāyaʔ-hniʔ t^húnlín + tauʔpâ-ŋi.
fire-NOM day-DIS.also night-DIS.also that.DET-that.DET place-LOC shine+bright-vs.RLS

https://kshan.files.wordpress.com/2010/02/01_sagatha-sam_e1809ee180b6e1809ae180afe18090e181b1e18094e180ade18080e180ace1809ae180b9-e1809ee18082e180abe18091e180ace18180e18082e181a2.pdf (2018/07/07 取得)

また、1367 年(緬暦 729)以前の文献であるアシンマハーシラウンサ(အရှင်မဟာသီလဝံသ)や
 シングナーリンガーヤ(ရှင်ဂုဏလင်္ကာရ)による四行詩「ピョ」(「四行詩、詩的韻文」(大野 2000,
 ビルマ語辞典))という形式で詠まれた「祈り節のピョ」において、指示表現の重複形式
 (ဣယင်း/Yiyín/, ဝိုယင်း/tʰòyín/, ဝိုဝို/tʰòtʰò/など)¹²³がみられるが、リズムを取るための韻文で
 あるからと考え、本論では考察の対象外とする。

5.5. ?édì/ ?édàの異形態

- (196) (a)A の?ai?は位置指示代名詞?édi、(197) (c)A は指示限定詞?édi の変化した形式であ

り、(196) (e)C の ?à は非位置指示代名詞 ?édà の変化した形式である。そして、(197) (d)B と (e)A の ?è も非位置指示代名詞 ?édà の変化した形式である。

また、?édi は ə/?é-/ のみで使われる場合があり、(196) (d)B の ə̀c̥/?é lə/ はその例である。ə̀c̥/?é lə/ に c̥/?é/ が脱落した形である。本来の基本形と言われている di が脱落するという現象である。

(196) お米屋での会話

(a)A: ?ai? ná-kâ kùndò p^hyi? + tʷá-yìN dì beʔ-kâ-lé ?ǎyáN
 that2.DET near-LOC condominium COP+go-COND this.DET side-LOC-DIS.also very
 sì + là-mè t̥l-lá. dì nèyà-kò-lé ?ǎhyê-kó ?ǎnau?-kó
 crowd+come-vs.IRR know-Q this.DET place-ACC-DIS.also front-DIS.also back-also
 kùndò s^hau? + p^hyi?-lai?-pà-lá
 condominium construct+AUX-AUX-PLT-Q

そこら辺がコンドミニアムになったら、ここら辺もとても賑やかになるよ、ね。この場所も前も後ろもコンドミニアムを建ててしまえば。

(b)B: t^hì pau?-yìN s^hau?-mè
 lottery win-COND construct-vs.IRR
 宝くじが当たったら建てる。

(c)A: kànt^hǎrai?-tô lóunwâ mǎ-pé-nê
 construction-CNTR absolutely not-give-vs.IMP
 建設会社に絶対渡さないようにね。

(中略)

(d)B: ?é-lò kei?sâ-twè ?ǎyáN hyou?-tè
 that2.DET-as-matter-PL very complicate-vs.RLS
 そういう問題、すごく面倒くさいよね。

(e)C: ?à ?ǎgû ǰǎdínzà-t^hé-hmà ?édà-twè
 that2 now newspapers-inside-LOC that2-PL
 ?édà-twè myè-hyìN-twè-nê kànt^hǎyei?-twè-nê
 that2-PL land-owner-PL-COM construction-PL-COM
 tòcà mǎ-pí mǎ-s^hau?

then not-finish not-construct

それ（が）、今新聞にも、そればかり。それ、地主と建設会社とで。結局、終わらなかったり。建てなかったり。

2016/03/07 収録の自然会話

(197) アンティーク雑貨屋での会話

(a)A: ADS-hmà yáun-tà ADS-hmà

ADS-LOC sell-nc.RLS ADS-LOC

ADS で売ってるの、ADS で。

(b)B: ADS s^hò-tà bà-lè

ADS say-nc.RLS what-Q

ADS というのは何？

(c)A: ADS s^hò-tà ?ai? dà dà-myó yáun dà-myó pyi?sí-twè

ADS say-nc.RLS that this this-kind sell this-kind goods-PL

yáun-tê we?s^hai? hyî-tê

sell-attr.RLS website exist-vs.RLS

ADS というのはこれ、こういう売る、こういうものを売るウェブサイトがあるの。

(d)B: ?ê-pò tìn-lai?-tà

there.OBL-above put.on-AUX-nc.RLS

それに載せるの？

(e)A: ?é ?ê-pò tìn-lai?-tà

INTERJ there.OBL-above put.on-AUX-nc.RLS

うん、それに載せる。

2016/03/07 収録の自然会話

以上、本章では、指示詞の周辺的な用法について触れた。次章には、日本語との対照の観点からビルマ語の指示限定詞 *dì* の意味解釈と文脈指示に現れる「指示限定詞+N」について触れる。

6. 日本語との対照の観点から見たビルマ語の指示限定詞

本章では、日本語との対照という観点からビルマ語の指示限定詞 *di* の意味解釈と文脈指示に現れる「指示限定詞+N」について触れる。6.1 では、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *di* には日本語の「この」と「今の」にあたる意味があることを示し、6.2 では、文脈指示に現れる「指示限定詞+N」の表現について検討した。

6.1. ビルマ語の指示限定詞 *di* の解釈の要因

ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *di* には日本語の「この」と「今の」にあたる意味があることを用例で示し、更に「今の」という意味に解釈される *di* が使われる条件を確認することで、本来の指示表現のあり方を探る。

6.1.1. 「この」と「今の」の意味確認

まず、*di* と対照させる日本語の「この」と「今の」の意味を確認する。以下の定義は、広辞苑第五版から引用したものである。

「この」は自分の手に触れるほど近くにあるものと、それを基準にして表せる位置を指示するものである、と定義されている。

・ この〔連体〕

(もと、コは代名詞、ノは格助詞) 話し手から「これ」と指せる位置にあるもの・ことにかかわる意。

- ① 自分の手に触れるほど近くにあるものを指示する¹²⁴。古事記(中)「一蟹やいづくの蟹」。
「一本をあげよう」
- ② ①に述べたものを基準にして表せる位置を指示する。「一うしろを捜せ」
- ③ 今述べる事柄に係する意。万葉集(15)「これや一名に負ふ鳴門の渦潮に」。「一年ごろずっと」「一点に注意」
- ④ すらすら言えない時にはさむ、つなぎの語。また、相手を叱る時の強めの語。「一親不孝者」

一方、「今」は過去と未来との境である瞬間・現在であり、その意味と見なせるほどの近い過去または未来である、と定義されている。また、現在を含んだある時間・期間のことを指す、とされている。

・ 今〔名〕

- ① 過去と未来との境である瞬間。現在。「一正午だ」
- ② 現在を含んだ、ある時間・期間。古事記(上)「一こそばわどりにあらめ後はなどりにあらむを」。「一の首相」

- ③ 現に話をしているこの局面（で）。万葉集（2）「後にも逢はむ一ならずとも」。「一この点をPとする」
- ④ 今①と見なせるほど近い過去または未来。「一來たばかりだ」「一の人、知ってるかい」「一いきます」
- ⑤ （「一に」の形で）そうは遠くない未来。将来。そのうち。
↪今に②。
- ⑥ （今度あらたに加わるの意で）新しいこと。また、そのもの。万葉集（14）「信濃道は一の墾道（はりみち）」
（現在におけるの意で、現在の人を昔の人になぞらえるのに使う）現代の。当世の。「一業平（なりひら）」「一小町」

6.1.2. 「この」と「今の」の2つの意味に解釈される di

口語体ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 di には、日本語の「この」という意味と「今の」という意味があり、使用する場面はそれぞれ異なる。

以下、指示限定詞 di が指している意味範囲を確認し、日本語の「この」と「今の」という意味とどう対応しているかを考察する。

(198) di yăthá

this.DET train

この電車（＝現在駅に停まっている電車・これから出発する電車）／

今の電車（＝（話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず）目の前を通ったばかりの電車）

ビルマ語の di は日本語の「この～」という意味と、「今の～」という意味を持っている。di yăthá と言うとき、「現在駅に停まっている電車あるいはこれから出発する電車」つまり「この電車」と解釈することもできれば、「（話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず）目の前を通ったばかりの電車」つまり「今の電車」とも解釈することができる。同様に、例(199)のように指示詞を使わずに ʔăgû 「今の」を用いて表現する場合も、例(198)のような解釈が可能である。以下、例(199)と例(200)は指示詞を使わずに表現する場合の例である。

(199) ʔăgû yăthá

now/current train

この電車（＝現在駅に停まっている電車・これから出発する電車）／

今の電車（＝（話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず）目の前を通ったばかりの電車）

(200) gûnâ yăthá

a.moment.ago train

先の電車／今の電車（＝もう話し手・聞き手の視界内にはない）目の前を通ったばかりの電車

例(198)と例(199)でみられるように、ビルマ語の *dì yăthá* と *ʔăgû yăthá* は、日本語の「この電車」として解釈できる場合もあれば、「今の電車」として解釈できる場合もある。ただし、「今の電車」と解釈できるのは、話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず目の前を通ったばかりの電車の場合のみである。

発話の中で *dì* を用いるか *ʔăgû* を用いるかは話し手の選択次第であり、*dì* が「この」の意味になるか「今の」の意味になるかはその発話が成立した場面での発話時点と指示対象が発話現場に存在した時点の時間のズレ（以下、時間のズレ）があるかどうかによると考えられる。「今の電車」という意味を明確に表したい場合、例(200)のように *gûnâ* 「先」を用いて *gûnâ yăthá* 「先の電車・今の電車」という表現をする¹²⁵。

以上のことから、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dì* には日本語の「今の」の意味が含まれていることが分かる。*dì* を用いて指し示された *dì yăthá* が「今の電車」という意味で使われる場合、指示対象の電車はもう発話現場を離れた「目の前を通ったばかりの電車」を指し、現場指示とは言い難くなる。発話現場を離れた指示対象を指す場面であるにも拘わらず、現場指示の *dì* が使われていることが、空間的・時間的位置に時間のズレが生じる場合での *dì* の用法である。話し手は、指示対象についての情報を聞き手が知っていると感じて、互いに共有の知識を持っていることを前提に発話していると考えられる。

次のように人を指し示す場合でも同様に現場指示とは解釈できない現象が観察される。

(201) *dì ʔămâ*¹²⁶

this.DET sister

この姉さん（＝現在目の前にいる姉さん・これから現場を離れようとしている姉さん）
／今の姉さん（＝（話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず）現場を離れたばかりの姉さん）

(202) *ʔăgû ʔămâ*

now/current sister

この姉さん（＝現在目の前にいる姉さん・これから現場を離れようとしている姉さん）
／今の姉さん（＝（話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず）現場を離れたばかりの姉さん）

(203) gûnâ ?ămâ

a.moment.ago sister

先ほどの姉さん／今の姉さん（＝（話し手・聞き手の視界内にまだあるかどうかにかかわらず）立去ったお姉さん）

例(201)の dî ?ămâ には「この姉さん」という意味と、「今の姉さん」という意味があり、例(202)のように ?ăgû ?ămâ に言い換えても同様な解釈ができる。明確に「今の姉さん」という意味で表したい場合、例(203)のように gûnâ ?ămâ 「先ほどの姉さん・今の姉さん」という表現をする。

例(198)-(200)では、gûnâ yăthá は「もう駅を通り過ぎた電車・先の電車」の意味でしか使われないが、dî yăthá (?ăgû yăthá) の場合は目の前を通った「駅を通ったばかりの電車」の意味と目の前にある「駅に停まっている電車・これから出発する電車」の両方の意味で使われることを示した。dî ?ămâ (?ăgû ?ămâ) の例にも同様な現象がみられる。dî ?ămâ (?ăgû ?ămâ) には日本語の「この姉さん」と「今の姉さん」という2つの意味がある。日本語の「この姉さん」の場合は発話現場にいる女性のことを指し、「今の姉さん」の場合は、発話現場から離れたばかりの女性のことを指す。明確に「今の姉さん」という意味で表したい場合、例(203)のように gûnâ 「先」を用いて gûnâ ?ămâ 「先ほどの姉さん・今の姉さん」という表現を用いる。また、例(198)と(201)でみられるように、それぞれの dî yăthá と dî ?ămâ が「今の電車」「今の姉さん」の意味で目の前に存在しない指示対象を指す場合など、現場指示とは解釈し難い場面においても、現場指示の dî が使われている。

以上のことから、ビルマ語の現場指示 dî は現場指示でありながらも指示対象が「目の前を通った」ことが確認できた場合、近い過去のことを指す「今の」という意味で使えると言えよう。すなわち、この dî は現場指示の形をしているが、何らかの文脈情報がないと指示対象が同定できないという条件が付いており、純粋な現場指示とは解釈し難い dî である。つまり、3.5 で提案した特定の文脈を持つ一種の「文脈参照現場指示」であると考えられる。

6.1.3. 「今の」の意味にしか解釈できない dî

本小節では、用例を用いて「今の」の意味にしか解釈できない dî について詳細に検討する。主にドキュメンタリーのシーンや自然会話のデータを用いて、dî が指す空間的・時間的な位置を明らかにする。

6.1.3.1. ドキュメンタリーのシーンで現れた di

まず、ドキュメンタリーのシーンで現れた指示限定詞 di の例を取り上げる。

例(204)はドキュメンタリーの中で、映画の審査を行っている場面での発話であり、乞食のシーンがスクリーンに映し出されて間もなくして一人の審査員が発したせりふである。その後に乞食のシーンがスクリーンに映っている場合も、スクリーンから消えた場合も di を用いて指すことができる。今回の場合、審査員が di を用いて目の前にあるドキュメンタリーのシーンに直接指し示しているように見えるので、純粋な現場指示用法の di に分類してしまいがちだが、実はスクリーンに乞食のシーンが現れてからでないと指さし行為も成立しない。審査員の指さし行為は乞食のシーンが現れた直後に行われている。先に乞食のシーンが現れたからこそ指さしの直示ができるわけである。この現象は、di が発せられたときに時間のズレが生じる場合である。近い過去に乞食のシーンが現れたという文脈情報が前提となるので、一種の「文脈参照現場指示」であると言えよう。

(204) 乞食のシーンがテレビのスクリーンに映し出されたとき

di	ʔāk ^h án	p ^h yeʔ-Ø.	di	ʔāk ^h án	p ^h yeʔ-Ø.
this.DET	scene	ban-vs.IMP.	this.DET	scene	ban-vs.IMP.
dà	nàinṅàndò-kò	sògá + nè-tà.			
this	State-ACC	insult+stay-nc.RLS			
dà	nàinṅàndò-kò	teiʔk ^h à + câ-ʔàun	louʔ + nè-tà.	bêhnê-kwà.	
this	State-ACC	dignity+fall-PURP	do+stay-nc.RLS.	how.OBL-FP.M	

今のシーンをカット！今のシーンをカット！

これは国を侮辱しているのだ。これは国の名誉を汚しているのだ。チェッ。

BAN THAT SCENE! 7:15/18:42

6.1.3.2. 自然会話に現れた di

次に自然会話に現れた指示限定詞 di の例を取り上げる。

今回扱う自然会話は、同じ大学に留学しているミャンマー人女子留学生 4 人にまつわる 2 人の話者の会話である。この会話に現れる女子留学生 4 人を仮に「A:留学生 1、B:留学生 2、C:留学生 3、D:留学生 4」とする。

まず、この 4 人の関係を概観する。A と B は同級で、C と D は A・B の先輩である。そして、C は A・B と同じ学生寮に住んでいる仲のいい先輩であり、D は別のところに住んでいるあまり親しくない先輩である。

この自然会話の場面設定は、とある教室に同級の A・B があまり親しくない D と会う機会があつて、D が席を離れている間に成立した会話である。A と B の会話が成立した時には D はもう視界内にはない。C も発話現場に現れない。この会話では、特に C と D を区別する必要がない限り、A・B は C と D に対してʔāmâ(姉さん)という語を使用し、区別をす

るときは直接名前を出すか、指示詞を用いるか、の形でお互いに会話の理解を得ている。

会話の内容からは、A と B が国からのお土産としてもらったミャンマーのラペツ(お茶葉)をその日の夜に野菜などで和えて食べようと、言葉を交わしていることが伺える。このように計画を立てているうち、(h)A が ?ămâ-ḵò-pà k^hò-lai?-mè. 「姉さんも呼ぼう」と、どの ?ămâ(姉さん)なのかを明確に明示せずに、初めて或る別な人物を会話の中に導入した。にもかかわらず、(i)B は「ピョーピョー姉さん(C)」を指していることを理解し、dì ?ămâ-ḵò-ḵó. 「今の姉さんは？」というように指示限定詞の dì を用いて、またもう一人の新しい人物を会話に取り入れる。(j)A も(i)B が dì を用いて新しく導入した人物がどの ?ămâ(姉さん)のことを指しているのかをすぐに理解し、二人の会話がスムーズに進行している。

(a)A: lăp^hε? pà-tè-lè pyàn-yìn kòunbínì twá-pí-tō
 tealeaf include-vs.RLS-FP return-COND convenience.store go-SEQ-while
 nyâ tōu? + sá-mă-lá.
 night toss+eat-vs.IRR-Q
 ?ămâ-ḵò-pà k^hò-lai?-mè.
 sister-ACC-DIS.also call-AUX-vs.IRR
 ラペツ(お茶葉)入ってるよ。帰りにコンビニ行って
 夜、作って食べる？姉さんも呼ぼう。

(b)B: ?é. nyâ câ-yìn tōu? + sá-mè. nyâ câ-yìn tōu? + sá-mè.
 INTERJ night fall-COND toss+eat-vs.IRR night fall-COND toss+eat-vs.IRR
 うん、夜作って食べる。夜作って食べる。

(c)A: pyàn-yìn. nîn-hmà k^hăyánjìndí-twè bà-twè hyî-lá.
 return-COND [2].OBL-LOC tomato-PL what-PL exist-Q
 帰ったらね。あなたのところにトマトかなんかある？

(d)B: mă-hyî-p^hú.
 not-exist-vs.NEG
 ない。

(e)A: k^hănâ nè twá + wè-lai?-mè.
 a.moment stay go+buy-AUX-vs.IRR
 もう少ししたら買いに行く。

(中略)

(f)A: gòbì wè-mè.
cabbage buy-vs.IRR
キャベツ買おう。

(g)B: gòbì-yè k^hǎyánjìn-yè t̚ou? + sá-mè.
cabbage-COM tomato-COM toss+eat-vs.IRR
キャベツと、トマトと、作って食べよう。

(h)A: ʔǎmâ-ḵò-pà k^hò-lai?-mè.
sister-ACC-DIS.also call-AUX-vs.IRR
姉さんも呼ぼう。

(i)B: ʔé. ʔǎmâ-p^hyóp^hyó-ḵò.
INTERJ sister-NAME.person-ACC
ḍì ʔǎmâ-ḵò-ḵó.
this.DET sister-ACC-Q.CNTR
ḍì ʔǎmâ-ḵò...mǎ-káun-pà-p^hú-nò.
this.DET sister-ACC...not-good-PLT-vs.NEG-FP
ḍì ʔǎmâ-kâ...ʔǎlou?-twè bà-twè...
this.DET sister-NOM...work-PL what-PL
うん。ピョーピョー姉さんを。
今の姉さんは？
今の姉さんを…（呼んだら）悪いね。
今の姉さんは、…仕事とかで…

(j)A: ʔǎlou?-nê s^hò-t̚ô ʔín...
work-COM say-while INTERJ
仕事があるから…うーん。

(k)B: ʔǎmâ-p^hyóp^hyó-ḵò k^hò-lai?-Ø.
sister-NAME.person-ACC call-AUX-vs.IMP
nyâ câ-yìn t̚ou? + sá-mè.
night fall-COND toss+eat-vs.IRR
ピョーピョー姉さんを読んで、夜作って食べよう。

(l)A: nyâ câ-yìn t̚ou? + sá-mè.

night fall-COND toss+eat-vs.IRR

夜作って食べよう。

この自然会話で、注目すべきであるのは、(i)B で現れる発話時点で発話現場には居ない ?āmā(姉さん)を指示限定詞の dī を用いて指す「dī ?āmā」である。この場合の dī は現時点では発話現場に居ないが、先ほどまで一緒に居た ?āmā(姉さん)のことを指しているため、「今の姉さん」だと解釈しなければならない。「この姉さん」という解釈はできない。

この自然発話で前提となっているのは、dī を用いて指し示された対象の D は今回の会話で成立する少し前までは A と B がいる発話現場の空間内にいたことが確認できることである。D は会話が成立したとき指示対象は既に発話現場を離れているが、(i)B は、D がまだ近くにいるかのように近称の現場指示 dī を用いてどの人物であるかを限定し、聞き手である A の理解を得ている。D は初めて会話に導入する対象人物であるが、dī を用いて導入することによって、どの人物であるかが限定される。このように指示詞と指示対象が同時に導入されることによって、「dī ?āmā」が「今の姉さん」であるということが解釈できる。もし、指示対象である D が会話の直前に発話現場に居なかった場合、dī を用いて指すことはできず、C を導入したときのように直接名前を言う形で指さなければならない。

以上の例で示したように、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 dī は日本語の「この」と「今の」に対応する。そして、「今の」という意味として解釈される dī は発話現場に居ない人物であり、先行文脈にも表れていない、初めて登場する人物を指している。このように、指示対象の人物が現時点では発話現場に居ないが、先ほどまで一緒に居たということを受けて、まだ発話現場に居るかのように語っているからである。

本小々節では、ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 dī が、空間的位置もしくは時間的位置を指すときの時間的範囲には、「この」のように「現時点」を指す場合もあれば、「今の」のように「ごく近い過去」を指す場合もあることを示した。そして、「今の」のように「ごく近い過去」の意味を持つ場合、指示対象は一度発話現場に現れたことがあり、かつ発話時点では現場に居ない。つまり、会話参加者の間での旧情報として共有されている。にもかかわらず、会話の中にはいまだ発話現場に居るかのように近称の現場指示 dī を用いている。このように発話現場に居ない指示対象に現場指示 dī を用いて指すことができるのは、指し示された指示対象が一度発話現場に現れたというこれまでの聞き手にとっての旧情報である暗示的な文脈情報があるからである。つまり、暗示的な文脈情報があるからこそ現場指示の dī が使えるのである。これも、「文脈参照現場指示」に分類できると考えられる。

本小々節で示した用例のような暗示的な文脈情報(照応)が必要な現象からは、

Bühler(1934); Lyons(1975; 1977; 1979)などの「文脈指示(照応)は現場指示(直示)から派生した」とは一概には言えないのではないかと思われる。

6.1.4. 指示限定詞 di の解釈を決定する条件

本節では、現場指示として用いられる指示限定詞 di の解釈を決定する条件を整理する。

6.1.4.1. 「この」の意味として解釈できる場合の di

指示限定詞 di が「この」の意味として解釈されるとき、指示対象が話し手/聞き手の視界内の空間である発話現場に存在し、空間的位置に物理的距離があることが確認できることが前提になる。いわゆる現場指示用法で使われる di の場合である。

6.1.4.2. 「今の」の意味として解釈できる場合の di

一方、指示限定詞 di が「今の」の意味として解釈されるとき、1)指示対象が発話現場に存在するか否かにかかわらず、時間的位置に時間のズレが生じるかどうか条件になる場合と、2)指示対象が発話現場に存在しないが、その指示対象が以前に発話現場に現れたことがあるという情報を話し手と聞き手の間で共有していることが重要であり、このような旧情報・共有知識を持っているという「付け足された暗示的な文脈情報」が必要となる場合である。

以上 6.1.4.1 と 6.1.4.2 で述べた指示限定詞 di の解釈を決定する条件を表 28 でまとめる。

表 28 指示限定詞 di の解釈を決定する条件

条件			di「この」	di「今の」
指示対象が発話現場に存在する	空間的位置	物理的距離あり	○	×
		物理的距離なし	×	×
指示対象が発話現場に存在しない	時間的位置	時間のズレあり	×	○
		時間のズレなし	×	×
指示対象が発話現場に存在しない	付け足された暗示的な文脈情報(照応)	旧情報(話し手・聞き手にとっての既知)あり	×	○
		共有知識(聞き手が知っていること)あり	×	○

6.1.5. 「この・今の」のまとめ

ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dì* が日本語の「この」という意味と「今の」という意味を持っていることを用例を用いて考察を行い、特に *dì* が「今の」という意味として解釈される条件を確認した。その結果、新たな言語事実を発見することができた。

- 1) 現場指示の指示限定詞 *dì* が指している時点の時間的位置が現時点を指す以外に近い過去を指す場合があること (6.1.2 を参照)
- 2) 「今の」の意味として解釈される場合に時間のズレが生じること (6.1.2 と 6.1.3 を参照)
- 3) 「今の」の意味として解釈される場合に旧情報や共有知識といった暗示的な文脈情報(照応)が付け足されること (6.1.2 と 6.1.3 を参照)
- 4) 以上の 1)~3) のような近い過去を指す場合、時間のズレが生じる場合と、暗示的な文脈情報を必要とする場合の *dì* を「文脈参照現場指示」用法に分類すべきこと (6.1.3 を参照)
- 5) こういった現象は「文脈指示(照応)は現場指示(直示)から派生した」というより、文脈情報(照応)が存在しているからこそ現場指示的な用法が使用できること (6.1.2 を参照)

以上の言語事実とその観察により、従来の指示の機能を再検討し、「文脈指示(照応)は現場指示(直示)から派生した」という概念と本来の指示表現のあり方をもう一度考え直す必要がある。「現場指示」と「文脈指示」という従来の指示機能に「文脈参照現場指示」を加えるべきであり、また「文脈情報(照応)が存在しているからこそ現場指示用法が使用できる」というこれまで受け入れられてきた概念に該当しない用例が存在することから、今後は「現場指示(直示)が文脈指示(照応)から派生した」場合があるということも考慮に入れて考えるべきであろう。

6.2. 文脈指示に現れる「指示限定詞+N」

6.2.1. 指示限定詞+数詞を含む量化詞

ビルマ語には指示限定詞に数詞を含む量化詞が付く表現がある。Jenny and San San Hnin Tun (2016:143-144)では‘The demonstratives can also be used with classifier phrases without a head noun.’という記述があり、次のような3つの例を挙げている。

ဒီတစ်ယောက်	<i>dì tǎ-yau?</i>	‘this person’
ဟိုသုံးအုပ်	<i>hò toun-?ou?</i>	‘those three books’
အဲဒီနှစ်ယောက်	<i>?édi hnă-yau?</i>	‘those two people (we are talking about)’

事実、Jenny and San San Hnin Tun (2016)の例である ဒီတစ်ယောက် /*dì tǎ-yau?*/は‘this person’「この人」という意味ではあるが、直訳は‘this one’「この一人」である。同様に ဒီတစ်ခု /*dì tǎ-kʰû*/の意味は「これ」であるが、直訳は「この一個」である。ビルマ語にはこのように指

示詞に数詞を含む量化詞が付いた指示表現がある。

Myanmar Language Commission (2005: 46-48)によるとミャンマーの学校文法では、ビルマ語の指示代名詞に数量代名詞というのを設けており、数量代名詞というのは「1 人, 2 人, 3 匹, 4 つ, 全部, 幾つ, 少し, 半分など」のような「数の少ないことや多いこと、と量を表す代名詞」¹²⁷のことを呼ぶと定義している。

(205) (i) ?úmyâ-hmà tá hnă-yau? hyî-tì.
NAME.person-GEN son two-CLF exist-vs.RLS

(ii) tă-yau?-tì yàngòn-myô-twìn nè-tì.
one-CLF-DIS NAME.place-city-LOC stay-vs.RLS

(iii) tă-yau?-tì mándălé-myô-twìn nè-tì.
one-CLF-DIS NAME.place-city-LOC stay-vs.RLS

ウー・ミャに息子が 2 人いる。一人はヤンゴンに住んでいる。一人はマンダレーに住んでいる。

(ibid.: 47-48)

Myanmar Language Commission (2005: 48)によれば、第一の文章での「息子」は名詞である。第二と第三の文章での「一人」は「息子」という名詞の代替として用いられている代名詞である。その上、数量も表すため、「一人」は数量代名詞であるとしている。

以下に、数量代名詞についての考察を試みる。

(206) ウー・ミャについて述べる場合

(i) ?úmyâ-hmà tá hnă-yau? hyî-tì.
NAME.person-GEN son two-CLF exist-vs.RLS

(ii) tă-yau?-tì yàngòn-myô-twìn nè-tì.
one-CLF-DIS NAME.place-city-LOC stay-vs.RLS

t̪ò tă-yau?-tì (/t̪á-tì) ?ăsôyâ-wùnt̪hàn p̪hi?-tì.
that.DET one-CLF-DIS (/son-DIS) government-employee COP-vs.RLS

(iii) nau? tă-yau?-tì mándălé-myô-twìn nè-tì.
next one-CLF-DIS NAME.place-city-LOC stay-vs.RLS

t̪ò tă-yau?-tì (/t̪á-tì) t̪e?kătò-cáunt̪á p̪hi?-tì.
that.DET one-CLF-DIS (/son-DIS) university-student COP-vs.RLS

ウー・ミャに息子が 2 人いる。一人はヤンゴンに住んでいる。その一人（／その人）・その息子は公務員である。もう一人はマンダレーに住んでいる。その一人（／その人）・その息子は大学生である。

従って、(206)で示したようにビルマ語には数詞に含む量化詞が付いた数量代名詞の表現がある。また、次の(189)~(195)のように、「指示詞+数量代名詞」の表現も存在する。

- (207) ?é tû-tô-hmà ?ăyê-kei?sâ còuN-yìN gǎbà-lókâ-čí-hnîN¹²⁸
 INTERJ [3]-PL-LOC emergency-matter meet-COND world-world-AUG-COM
 ?ăs^hε??ătwè lou?-p^hô wàyàlε?-sε? tǎ-lóuN-tô pà + twá-tè.
 contact do-PURP wireless-machine one-CLF-CNTR include+go-vs.RLS
 k^hi?hmì-pyi?sí s^hò-lô dī tǎ-k^hû-pé pà-tè
 modern-goods say-QUOT this.DET one-CLF-FOC include-vs.RLS

あ、そうだ。彼等は事故が起こった時に備えて世間と連絡できる無線機を持っていたな。近代的道具と言やあ、それ一つだ。

(MTT1973; 1995: 242), (MNM1983: 233)

- (208) pìnlè-hmâ mízóunda?-myá-tì hò tǎ-kwe? dī tǎ-kwe? t^hâ-ywè
 sea-ABL phosphorus-PL-NOM that1.DET one-CLF this.DET one-CLF stand-SEQ
 tau? + nè-çâ-tì
 spark+mutual-vs.RLS

海中の燐があちらこちらで立ち昇って光る。

(MTT1973; 1995: 153), (MNM1983: 144)

- (209) tī tǎ-k^hau? pìnlè t^hwε?-yâ-tì-kò tǎnjáun pò + pyò-tì
 this.DET one-CLF sea go.out-AUX-nc.RLS-ACC NAME.person more+happy-vs.RLS

今回の舟出は滅法楽しかった。心もはずむ。仕事もはかどる。ボタンにできる美しい貝を拾った。

(MTT1973; 1995: 184), (MNM1983: 174)

- (210) ?óuN-s^hân-p^ha?-tì ?ăyè-lé hywán-tì. c^hò-lé c^hò-tì
 coconut-flesh-solid-NOM liquid-DIS.also plenty-vs.RLS sweet-DIS.also sweet-vs.RLS
 tī tǎ-k^hà ?óundí sá-yâ-ç^hín-lau? tǎ-k^hâ-hmyâ ?ăyâdà
 this.DET one-CLF coconut (fruit) eat-AUX-nc.RLS-as.much.as one-CLF-even taste
 mǎ-hyî-p^hú-k^hê-Ø
 not-exist-EXP-PAST-vs.NEG

[タンジャウンは柔らかい果肉を掻いてくれた。ナンダーは起きて座った。二枚貝の殻に入った果肉を受け取って食べる。]果肉は水が多い。甘い。この時ほど椰子の実が

うまかったことはなかった。

(MTT1973; 1995: 112), (MNM1983: 101)

- (211) k^hānâ-pè. dī tǎ-k^hau?-kâ hò, cáun kei?sâ-nê là-tà s^hò-tô
little-FOC this.DET one-CLF-NOM INTERJ school matter-COM come-nc.RLS say-while
ちょっとだけね。今回は、あのう、学校のことで来たから。

2016/3/7 収録の自然会話

次に日本語の例と対照する。

- (212) 「島田さんが、また行かないと言っていますよ」
「あの人は、いつもわがままばかり言って、困りますね。」¹²⁹

金水・他 1989: 40

- (213) “hyimâdâsân-kâ mǎ-twá-p^hú-lô pyó-nè-pyàn-tè”
NAME.person-NOM not-go-vs.NEG-QUOT say-stay-again-vs.RLS
“?édi tǎ-yau? (/lù)-kâ ?ămyé kô-?ătwé?-pé cí-tè, tè k^hé?-tà-pé”
that.DET one-CLF(/person)-NOM always myself-PURP-FOC look-vs.RLS ADM difficult-nc.RLS-FOC
「島田さんが、また行かないと言っています。」
「あの人、いつも自分の（ための）ことばかりみて、本当こまります。」

金水・他 1989: 40 のビルマ語訳

- (214) 達夫は去年、五年間つき合っていた女性と別れた。しかし、今でもその女性を愛している。

金水・他 1989: 43

- (215) tàs^hù?ô mǎhni?-tóungâ nǎ-hni?-lau? twé+là-tê ?ămyóđămí-nê
NAME.person last.year-while five-year-about pair+come-nc.RLS woman-COM
lán+kwé+twá-tè
street+separate+go-vs.RLS

dàbêmê ?ăgû-t^hî ?édi tǎ-yau? (/?ămyóđămí)-kò chí?+nè-tóun-pé
however now-TER that2.DET one-CLF(/woman)-NOM love+stay-while-FOC

達夫は去年、五年間ほどつき合ってきた女性と別れた。しかし、今でもその人（女性）を愛している。

金水・他 1989: 43 のビルマ語訳

tă-yau? 「一人」を用いる数量代名詞表現は(213)のように不満があつて非難する場合や(215)のような自分とは無関係な相手に対して言う場合は特に問題なく使われているが、目上の人や尊敬すべき人に使うと失礼な表現となるので、代わりに人称代名詞か、職業名が分かるのであれば、職業名を使って表現することが無難である。

以下の指示詞を使って作られた(216)(218)(220)(222)は日本語では自然だが、ビルマ語では(217)(219)のように代名詞を使うか、(221)(223)のように職業名を使って表現した方がより適切である。(221)(223)の場合は、職業名の前に指示詞を置くこともできるが、指示詞があると対象に対する尊敬の念が薄いような印象が受けられる。

(216) 「大学院生の、村木さんをご存知ですよね」

「ええ、知っています。**あの人**とは、10 年以上の友達です。」

金水・他 1989: 38

(217) “tɛʔkăʔò-cáundá mùrākîsàn-kò t̪i-t̪è mǎlá.”

university-student NAME.person-ACC know-vs.RLS is.it?

“ʔín, t̪i-t̪è. t̪ù-nê-kâ sʰê-hniʔ-cò-kădékâ t̪ăŋɛʔhín.”

INTERJ, know-vs.RLS [3]-COM-CNTR ten-year-over-since friend

「大学院生の、村木さんをご存知ですよね。」

「ええ、知っています。**彼／彼女**とは、10 年以上からの友達です。」

金水・他 1989: 38 のビルマ語訳

(218) 私の遠い親戚で中村という人がいますが、こんど**その人**が本を出したんです。

金水・他 1989: 41

(219) ŋà-nê sʰwemyó t̪eiʔ mǎ-kín-t̪è nàkâmùrà sʰò-t̪è lù t̪ă-yauʔ hyî-t̪è.

[1]-COM relative very not-free-nc.RLS NAME.person say-nc.RLS person one-CLF exist-vs.RLS

tǎlɔ́-kâ t̪ù sàʔouʔ tʰouʔ+tʰá-t̪è

recent-PAST [3] book publish+put-vs.RLS

「私の遠い親戚で中村という人がいます。この間、**彼／彼女**は本を出したんです。」

金水・他 1989: 41 のビルマ語訳

(220) 「山田先生に教えを受けられたそうですが、どんな方でしたか。」

「**あの**先生は、とても厳しい方でした。」

金水・他 1989: 39

(221) “sʰăyà-yàmdâ-sʰi-hmà t̪in-kʰê-t̪è-sʰò t̪ù-kâ bélò sʰăyà-myó-lé”

teacher-NAME.person-place-LOC learn-PAST-vs.RLS-HS [3]-NOM how teacher-kind-Q

“(ʔédì) s^hǎyà-kâ ʔǎyáN sígáN + cí-tè.”

(that2.DET) teacher-NOM very discipline+big-vs.RLS

「山田先生に教えを受けられたそうですね。どんな先生でしたか。」

「(あの) 先生は、とても厳しいでした。」

金水・他 1989: 39 のビルマ語訳

(222) 「作家の川端康成さんにお会いになったことがあるそうですが、どんな方でしたか。」

「ええ、あの方は、とても物静かな方でした。」

金水・他 1989: 40

(223) “sàyé^hǎyà-kàwâbâtâyàsûnàrî-nê twê-p^hú-tè-s^hò tû-kâ bèlò s^hǎyà-myó-lé”

writer-NAME.person-COM meet-EXP-vs.RLS-HS [3]-NOM how teacher-kind-Q

“ʔín, (ʔédì) s^hǎyà-kâ ʔǎyáN ʔé-tè.”

INTERJ, (that2.DET) teacher-NOM very cool-vs.RLS

「作家の川端康成さんにお会いになったことがあるそうですが、どんな方でしたか。」

「ええ、(あの) 先生は、とても物静かでした。」

金水・他 1989: 40 のビルマ語訳

6.2.2. 金水 (1999)による代行指示用法

金水 (1999: 81)で述べられている非直示的なソ系列の特質の一つに、代行指示用法という用法がある。金水 (1999: 81)は「代行指示用法とは、『会員とその家族(=会員の家族)』のように『その N』の解釈が『[先行詞]の N』と一致するものである」とし、次のような対比を示している。また、「代行指示ができるのはソ系列だけである。ア、コは当該の文脈には現れない他の特定の対象を指示しているとしか解釈できない」と述べている。

(224) a. 会員はその家族とともに宿泊することができる。(代行指示可能)

b. 会員はこの家族とともに宿泊することができる。(代行指示不可能)

c. 会員はあの家族とともに宿泊することができる。(代行指示不可能)

金水 (1999: 81)

ビルマ語には稀な表現ではあるが、(224)a. のような代行指示用法がある。ただ、日本語のようなソ系列のみが代行可能という制限があるわけではない。指示限定詞の場合はʔi と t^hò、指示代名詞の場合は yín と lǎgáun が使われる傾向があるように思われるが、本論で扱ったデータからは次の 1 例しか現れなかった。(225)は本のタイトルであり、詩的な表現に近い例でもある。

(225) méinmâ yau?cá t̥hò zǎgá
 women man that.DET language

男女とその言葉

Khin Min (2007)

以上、本章では、日本語との対照という観点からビルマ語の指示限定詞 *dì* の意味解釈と文脈指示に現れる「指示限定詞+N」について触れた。ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dì* には日本語の「この」と「今の」にあたる意味があることを示したあと、文脈指示に現れる「指示限定詞+N」の表現について検討した。

7. 本論文の結論

本論では、現代ビルマ語の指示詞について以下のように考察した。

第1章では本論の目的である現代ビルマ語における指示詞の全体像を明らかにすることを述べ、ビルマ語の概要と、音韻特徴や類型的特点を概観した後、本論で扱う文体について確認し、研究方法と本論の構成を示した。

第2章では、指示用法の定義及び分類について検討し、指示用法の整理とビルマ語の口語体と文語体におけるそれぞれの指示詞および指示体系を考えた。本論での指示用法は、吉田(2004)の指示の分類を参考し、ビルマ語の口語体と文語体におけるそれぞれの指示詞および指示体系を考えた。

第3章では、口語体ビルマ語にみられる現場指示、文脈指示と、文脈参照現場指示について詳細な記述を行った。現場指示では、ビルマ語の指示詞の体系を、先行研究と異なる観点から考察し、話し手に近い対象を指す場合の「近称」と話し手から離れている対象や離れていく対象と遠くにある対象を指す場合の「遠称」という2項対立の立場を取った。用例を考察した結果、*dì/ dà* は「近称」、*?édì/ ?édà* と *hò/ hòhà* は「遠称」であることが分かった。

文脈指示には前方照応と後方照応があり、*dì/ dà* と *?édì/ ?édà* の形式は近くにある先行文脈を照応することが多いのに対し *hò/ hòhà* は固有名詞や母語話者にとっての世界知識によって特定される特殊な場合を除けば、近くにある先行文脈に限らず、遠いところの先行文脈にまで照応することができることが明らかになり、*hò* は遠い過去を指すのに対し *dì* は現在を含む近い過去と現在を含む近い未来を指すことが分かった。

表 29 現場指示における遠近性

遠近性		口語体	文語体
近称		ဒီ/dì/, ဒီဟာ/dihà/, ဒါ/dà/	၌/ṣì/
遠称	遠称②	အဲဒီ/ʔédi/, အဲဒီဟာ/ʔédihà/, အဲဒါ/ʔédà/	ထို/tʰò/
	遠称①	ဟို/hò/, ဟိုဟာ/hòhà/, ဟဝါ/hāwà	ထို/tʰò/

現場指示と文脈指示を関連づけると、現場指示の場合、それぞれ dì/ dà と hò/ hòhà が話し手の近くにある対象と話し手の遠くにある対象を指すことから、文脈指示においても dì/dà は近くや直前あるいは直後にある文脈を照応し、hò/ hòhà は遠いところの先行文脈にまで照応することが可能だと考えることができる。心理的な要因が働く場合、dì/ dà と ʔédi/ ʔédà の選択と現場指示の遠近と心理的な親疎とが並行していると考えられる。心理的要因が働かない場合は並行しないが、その理由については分からなかった。

文脈指示には前方照応と後方照応があり、dì/ dà と ʔédi/ ʔédà の形式は近くにある先行文脈を照応することが多いのに対し、hò/ hòhà は固有名詞や自分の身の回り世界に関する世界知識によって特定される特殊な場合、遠いところの文脈まで照応することができるということが分かる。

文脈指示として用いられる dì/ dà と ʔédi/ ʔédà の置き換え可能なことについてはまだ、不明であるが、dì/ dà は話の締めくくりの場面に使われ、ʔédi/ ʔédà は前に述べたことを更に展開する場合に使われる傾向があることを指摘した。

また、ʔédi/ ʔédà の機能を再検討し、文脈参照現場指示という用法の存在を示した。特に現場の指示対象を直接に指し示す場合に用いられる指示詞は発話の冒頭に置かれて使用されたとしても、純粹に現場指示（直示）とは認めがたい潜在的な先行文脈を受ける例があるということを指摘し、従来の指示用法の分類基準に現場指示（直示）と文脈指示のほかに「文脈ありの現場指示」用法を設けることを提案した。

第4章では、これまで研究されて来なかった文語体指示詞の記述および考察を試みた。文語体で書かれたキッサン文学が興隆した20世紀初頭から現在までの文献を中心とした文語体ビルマ語における指示詞の記述を行い、ṣì, tʰò, yín, lăgáun のそれぞれの機能を明らかにした。文語体指示詞のṣì と tʰò は文脈指示のみならず現場指示としても用いられるのに対し、yín と lăgáun は文脈指示のみで用いられること、非位置指示代名詞としての yín と lăgáun は物を代替して表現する場合のみならず、直接に人間や動物を代替する場合にも用いられることなどを指摘した。ṣì と tʰò の特徴としては、ṣì は前に述べた説明や内容などをまとめる際によく使われるのに対し、tʰò は前に述べた物や事柄などを更に展開する場合に使われることが多いことが分かった。

その他に、4.9 では、第3章と第4章で示した言語事実および観察を踏まえ、ビルマ語における口語体と文語体指示詞の全体像を示すことができた。

第5章では、間投詞の付いた指示表現や談話中に現れるフィラーなど、指示詞の周辺的な用法について触れた。5.1.1と5.1.2で指示詞に前接する *hó* と *hó* について述べて、5.1.3では *dì* と *hò* の特別な用法について述べた。5.1.4では呼びかけなどにみられる *hòdín/hǎwà (hǎhwà)* について述べた。その次の5.2では *hò* がフィラーとして使われることと、5.3と5.4ではそれぞれ慣用表現や指示表現の重複について述べた。5.5には *ʔédì/ʔédà* の異形態について述べた。この5章で述べた5.1~5.5の周辺用法のうち5.4と5.5については更に考察する必要があるが、今後の課題にしたい。

第6章では、日本語との対照という観点からビルマ語の指示限定詞 *dì* の意味解釈と文脈指示に現れる「指示限定詞+N」について触れた。ビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 *dì* には日本語の「この」と「今の」にあたる意味があることを示したあと、文脈指示に現れる「指示限定詞+N」の表現について検討した。

8. 今後の展望

本章では、今後の研究に向けて述べる。第3章の3.2では、物理的距離が関与する場合の近称と遠称の使い分けと、遠称①と遠称②の使い分けを明らかにしたが、3.3での文脈指示として用いられる *dì* 系と *ʔédì* 系の置き換え可能の場合についてはまだ十分な考察まで至らなかった。*dì* 系と *ʔédì* 系の置き換えについてはある程度調査を進めたが、現在のところは *dì* 系が物語や内容の締めくくりに用いられることが多く、*ʔédì* 系は物語の内容を展開する場合に用いられることが多いことしかわかっておらず、前方照応用法として使われる場合の *dì* 系と *ʔédì* 系の選択基準については更なる調査をする必要がある。第4章においては、文語体の文脈指示として用いられる *ʔì* と *ʔò* の使い分けが十分に説明できず、その問題を解明するには更なる考察が必要である。第5章においても指示表現の重複や *ʔédì/ʔédà* の異形態について詳細に考察する必要がある。また、今回考察した指示体系には疑問詞の不定称 *bè, bà* が含まれず、指示詞を用いた接続表現などについても触れることができなかった。今後は、不定表現の分析を含め、さまざまな問題を考慮に入れ、より精密な記述を試みたい。

参考文献

(以下、本論の中で直接引用した「引用文献」のみを掲載し、「参考文献」は含まないことを断っておく。)

日本語の資料

- 安達真弓 (2010)「ベトナム語の文末詞 *đây, này, đấy, ấy, kia*」『東京大学言語学論集』30(2010.9)1-7
- 上田広美 (2009)「クメール語の指示詞について」『慶応義塾大学言語文化研究紀要(40)』pp.161-178、慶応義塾大学
- 大野徹 (1983)『現代ビルマ語入門』泰流社、東京
- 大野徹 (2000)『ビルマ(ミャンマー)語辞典』大学書林、東京
- 岡野賢二 (2006)「現代ビルマ語の名詞句の構造」『東南アジア大陸部諸言語の名詞句構造』pp.155-195、慶応義塾大学言語文化研究所
- 岡野賢二 (2007)『現代ビルマ(ミャンマー)語文法』、国際語学社
- 岡野賢二 (2008)「現代ビルマ語の『指示語』の体系について」、第16回チベット=ビルマ言語学研究会、神戸学園都市 UNITY(発表レジュメ)
- 岡野賢二 (2010)「ビルマ語の格標示」、澤田英夫編『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1:格とその周辺』pp.239-268、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 岡野賢二 (2011)「現代ビルマ語の『指示語』」、『東南アジア学』第16巻 pp.75-86、東京外国語大学
- 岡野賢二 (2013)「ピューとビルマの『始まり』」、田村克己・松田正彦(編)『ミャンマーを知るための60章』、開拓書店
- 岡野賢二 (2017)「ビルマ語の動詞連続～動作的な動詞を中心に～」『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』pp.130-161、慶応義塾大学言語文化研究所
- 奥平龍二 (1985)「キッサン・サーペー」、『日本大百科全書 6』(2001年度版) p.587、小学館
- 加藤昌彦 (2015)『ニューエクスプレスビルマ語』、白水社
- 加藤重広著・町田健編 (2004)『日本語語用論のしくみ』、シリーズ・日本語のしくみを探る 6、研究社
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996)『言語学大辞典』第6巻術語編 pp.630-633、三省堂
- 金水敏 (1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』vol. 6: No.4、言語処理学会編「談話・対話の言語学的、心理学的モデル」特集号、pp.67-91
- 金水敏・木村英樹・田窪行則共著 (1989)『日本語文法セルフマスターシリーズ 4、指示詞、くろしお出版
- 金水敏・田窪行則編著 (1992)『指示詞』日本語研究資料集、第1期第7巻、ひつじ書房
- 斉藤純男・田口善久・西村義樹編 (2015)『明解言語学辞典』、三省堂
- 澤田英夫 (1999)『ビルマ語文法 (1年次)』

- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram1.pdf> (2018/7/31 最終閲覧)
- 澤田英夫 (2002-2006)「ラージャクマール(ミャ=ゼーディー)碑文 A 柱・ビルマ語面」、東京外国語大学 AA 研
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/bagan/rkamrtxt.html> (2018/7/31 最終閲覧)
- 澤田英夫 (2012)『文語ビルマ語文法』[改訂版]、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- <http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/training/ilc/textbooks/2012burmese1.pdf> (2018/7/31 最終閲覧)
- 新村出 (1998)『広辞苑』第五版、岩波書店
- 鈴木玲子 (2002)「現代ラオ語の指示詞に関する一考察」『東京外大東南アジア学』第 7 巻 pp.21-36、東京外国語大学
- 竹内理 (2003)「文脈効果」、小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修(編)『応用言語学事典』、研究社
- 堤良一 (2012)『現代日本語指示詞の総合的研究』、ココ出版
- トゥザライン (2015)「現代ビルマ語における指示詞一口語体を中心に」、『言語・地域文化研究』第 21 号 pp.231-256、東京外国語大学
- トゥザライン (2016)「ビルマ語の現場指示における特定の文脈を持つ用法について」、『言語・地域文化研究』第 22 号 pp.171-184、東京外国語大学
- トゥザライン (2017)「文語体現代ビルマ語の指示詞の体系」、『言語・地域文化研究』第 23 号 pp.85-110、東京外国語大学
- トゥザライン (2018)「ビルマ語の指示限定詞 di の解釈に関する試論」、『言語・地域文化研究』第 24 号 pp.149-159、東京外国語大学
- 西岡武彦 (2003)「情報構造と伝達機能」、小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修(編)『応用言語学事典』、研究社
- 林宅男 (2003)「直示体系」、小池生夫・井出祥子・河野守夫・鈴木博・田中春美・田辺洋二・水谷修(編)『応用言語学事典』、研究社
- 堀口和吉 (1992)「指示語の表現性」、金水敏・田窪行則(編)『指示詞』pp.74-90、ひつじ書房
- 三上章 (1970)「コソアド抄」『文法小論集』pp.145-154 くろしお出版
- 三上章 (1992)「コソアド抄」金水敏・田窪行則編著『指示詞』pp.69-73、日本語研究資料集、第 1 期第 7 巻、ひつじ書房
- 藪司郎 (1992)「ビルマ語」、亀井孝・河野六郎・千野栄一(編)『言語学大辞典』第 3 巻世界言語編(下-1)pp.567-610、三省堂
- 吉田妙子 (2004)「指示詞コソアの振舞いの一貫性—縄張り理論の再検討—」、『台湾日本語教育論文集』、第八号 pp.31-61、台湾日語教育學會發行
- 脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子共訳 (1983)『カール・ビューラー：言語理論—言語の叙述機能(上巻)』有限会社クロノス
- 脇坂豊・植木迪子・植田康成・大浜るい子・杉谷真佐子共訳 (1985)『カール・ビューラー：言語理論—言語の叙述機能(下巻)』有限会社クロノス

欧文的資料

- Bühler, Karl. (1934). *Sprachtheorie*. Jena: Fischer
- Crystal, David (2008) *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*, 6th Edition, Blackwell Publishing
- Diessel, Holger. (2005). *Demonstratives: Form, function, and grammaticalization*, TYPOLOGICAL STUDIES IN LANGUAGE (Volume 42), John Benjamins Publishing Company
- Gundel, Jeanette K., Nancy Hedberg and Ron Zacharski (1993) Cognitive Status and The Form of Referring Expressions in Discourse, *Language*, Volume 69, No. 2 (Jun., 1993), pp. 274-307, Linguistic Society of America
- Japan International Cooperation Agency (2013) “Data Collection Survey on Education Sector in Myanmar, Final Report, February 2013”, http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/12113635.pdf
- Jenny, Mathias and San San Hnin Tun (2016) *Burmese: A Comprehensive Grammar*, New York
- Levinson, Stephen C. (1990), *Pragmatics*, Cambridge University Press
- Lyons, John. (1975). Deixis as the source of reference; *Formal Semantics of Natural Language*: pp. 61- 83, Cambridge University Press. (Reprinted as Chapter.8: Lyons, J. 1991, *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*: pp. 146-165, Cambridge University Press)
- (1977). Chapter 15: Deixis, space and time; *Semantics, Volume 2*: pp. 636-724, Cambridge University Press
- (1979). Deixis and anaphora; *The Development of Conversation and Discourse*: pp. 88-103, Edinburgh University Press. (Reprinted as Chapter. 9: Lyons, J. 1991, *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*: pp. 166-178, Cambridge University Press)
- (1991). Chapter 8: Deixis as the source of reference, Chapter 9: Deixis and anaphora; *Natural Language and Universal Grammar: Essays in Linguistic Theory*: pp. 146-178, Cambridge University Press
- Myint Soe (1999) *A Grammar of Burmese*, Ph.D. Dissertation, the University of Oregon
- Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese Volume 2*, Oxford University Press
- Okell, John and Allott, Anna (2001) *Burmese/ Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*, Curzon Press
- Wheatley, Julian K. (1982) *Burmese: A Grammar Sketch*, Ph.D. Dissertation, University of California

ビルマ語の資料 (ビルマ文字順)

ဖေမောင်တင်ဦး။ (၁၉၅၃)။ ‘မြန်မာစာဝါကျဖွဲ့ထုံးကျမ်း’ *Burmese Syntax* ဒုတိယနှိပ်ခြင်း (၁၉၅၃-ခုနှစ်လိုင်လ) [ပဌမနှိပ်ခြင်း(၁၉၅၁-ခုနှစ်ဝင်ဘာလ)]။ မြန်မာနိုင်ငံဘာသာပြန်စာပေအသင်း၊ စကြာဝဠာစာပုံနှိပ်တိုက်။

[ဖေမောင်တင်ဦး။ (၁၉၅၃)။ ကဏ္ဍ-၅၊ ‘မြန်မာစာဝါကျဖွဲ့ထုံးကျမ်း’၊ “မြန်မာစာအရေးအသား”၊ စာ၂၀၉-၂၅၅၊ စိတ်ကူးချိုချိုစာအုပ်တိုက်(၂၀၁၄)မှပြန်လည်ပုံနှိပ်သည်။]

Pe Maung Tin (1953) *myànmàwē?cāp^hwē^hōuncáN/ Burmese Syntax*, second edition, Burma Translation Society Yangon, Sekkyawara Press [Reprinted as Chapter. 5: *myànmàwē?cāp^hwē^hōuncáN* by Pe Maung Tin, *Literary style of Burmese* (2014) pp.209-255, Seikku Cho Cho Publishing]

ဖေမောင်တင်ဦး။(၁၉၅၉)။ ‘မြန်မာသဒ္ဒါနှင့်အသုံးအနှုန်း’ *Burmese Grammar and Expression* ၊ စာပေဗိမာန်။
[ဖေမောင်တင်ဦး။(၁၉၅၉)။ ကဏ္ဍ-၄၊ ‘မြန်မာသဒ္ဒါနှင့်အသုံးအနှုန်း’၊ “မြန်မာစာအရေး အသား”၊ စာ၁၄၁-၂၀၇၊ စိတ်ကူးချိုချိုစာအုပ်တိုက် (၂၀၁၄)မှပြန်လည်ပုံနှိပ်သည်။]

Pe Maung Tin (1959) *tánmyínmyànmàtādàhnîn?ăhtóun?ăhnóun/Burmese Grammar and Expression*, Sapebeikman Press [Reprinted as Chapter. 4: *tánmyínmyànmàtādàhnîn?ăhtóun?ăhnóun* by Pe Maung Tin, *Literary style of Burmese* (2014) pp.141-207, Seikku Cho Cho Publishing]

ဘေမောင်တင်နှင့်ဂျီ-အိပ်-လစ်ကောက်နုတ်စီရင်သော ‘ပုဂံကျောက်စာညွန့်ပေါင်း’၊ ၁၉၂၈ခုနှစ်၊ ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်။
Pe Maung Tin and G. H. Luce.(1928) *Selections from the Inscriptions of Pagan*, University of Rangoon, Department of Oriental Studies Publication No.1, British Burma Press, Rangoon

မောင်ခင်မင်(ခန့်ဖြူ)။ (၂၀၀၇)။ ‘မိန်းမယောက်ျားထိုစကား’၊ သီဟရတနာစာပေ။
Khin Min. Danubyu (2007) *méinmâyau?cát^hòzāgá* 『男女とその言葉』、Thiha Yadanar Publishing

မောင်ခင်မင်(ခန့်ဖြူ)။ (၂၀၁၀)။ ‘လူတိုင်းအတွက်အသုံးပြုမြန်မာစာ’၊ ဇင်ရတနာစာပေ။
Khin Min. Danubyu (2010) *lùdáiN?ăhtwe?ăhtóunc^hâmyànmàzà* 『みんなの実践ビルマ語』、Zin Yadanar Publishing

‘တက္ကသိုလ်မြန်မာစကားပြေကောက်နုတ်ချက်’၊ ထုတ်ဝေ-စာပေဗိမာန်၊ ပုံနှိပ်-တက္ကသိုလ်များပုံနှိပ်တိုက်၊ ၁၉၆၅ခု အောက်တိုဘာ။
Selection of Burmese Prose for University (1965), Sapebeikman, Thekkatomya Publishing

‘မြန်မာကျောက်စာများ၊ တတိယနှစ်’၊ ဒုတိယအကြိမ်ပုံနှိပ်ခြင်း၊ တက္ကသိုလ်ပို့ချစာစဉ်၅၉၊ အထက်တန်းပညာဦးစီးဌာန၊ ဘာသာပြန်နှင့်စာအုပ်ထုတ်ဝေရေးဌာန၊ ၁၉၈၆ခုနှစ်။
Burmese Inscription for 3rd Year Student 『3 年次ミャンマー碑文』 (1986) pp.5-10, 2nd Edition, University Education-59 (大学教材シリーズ 59), Higher Education, Translation Society Press

‘မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း’၊ ပထမတွဲ၊ မြန်မာစာဌာန၊ ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်၊ ၁၉၉၁ခုနှစ်နိုဝင်ဘာလ။
Burmese Literature Collection Volume I (1991), Department of Burmese, University of Yangon

‘မြန်မာစာအရေးအသား’၊ စိတ်ကူးချိုချိုပုံနှိပ်တိုက်၊ ၂၀၁၄ခုနှစ်။

Literary style of Burmese (2014), Seikku Cho Cho Publishing

‘မြန်မာသဒ္ဒါ’၊ ‘မြန်မာစာအဖွဲ့နှစ်သုံးဆယ်ပြည့်’ (၁၉၇၅-၂၀၀၅) အထိမ်းအမှတ်၊ တက္ကသိုလ်များပုံနှိပ်တိုက်၊ ၂၀၀၅ခုနှစ်

Myanmar Language Commission (2005)、『ミャンマー文法』、Myanmar Language Commission 三十周年記(1975-2005)、Tekkatomya 出版

‘မြန်မာအဘိဓာန်အကျဉ်းချုပ်’၊ ‘မြန်မာစာအဖွဲ့’၊ စာပေဗိမာန်၊ ၁၉၇၈-၁၉၈၀ခုနှစ်။

Myanmar Language Commission (1978-1980) *myànmà?ăbídà?ăcínjou?* 『ビルマ語辞典（簡約版）』，Sapebeikman Publishing

‘မြန်မာ-အင်္ဂလိပ်အဘိဓာန်’၊ ဆဋ္ဌမအကြိမ်ပုံနှိပ်ခြင်း၊ ‘မြန်မာစာအဖွဲ့’၊ တက္ကသိုလ်များပုံနှိပ်တိုက်၊ ၂၀၀၁ခုနှစ်။

Myanmar Language Commission (2001) *Myanmar-English Dictionary*, 6th Edition, Tekkatomya Press

用例出典（口語体）

- ・ ドキュメンタリー

BAN THAT SCENE! (အဲဒီအခန်းဖြတ်/?édi?ăk^hănp^hyé?/)

<https://www.youtube.com/watch?v=gckHgn2a7fg> 7:15/18:42 (2018/7/31 最終閲覧)

- ・ 自然会話録音データ

自然会話録音データは、筆者が 2016 年 3 月にヤンゴンで収録したものである。ただし、第 6 章で扱った用例のみ、岡野賢二氏(2016 年 3 月 14 日収集)に音声データを提供していた。現時点(2018 年 12 月 03 日)で岡野氏のデータは未公開である。

- ・ 文学作品など

ビルマ語で書かれたもの

(口語体の用例出典の資料を以下のような作者名の頭文字と出版年の略語で記す。用例収集は主に口語の指示詞が多く現れる作品を選び、日本語訳のあるものは日本語訳も参考にした。)

(作者・編集者のビルマ文字順、〈 〉 は本文中略語を示す)

ခင်မောင်ထွေးဦး။(ထုတ်ဝေသူ)၊ ‘စံပယ်တွေရမယ်နှင့်ဂျပန်ဘာသာပြန်မြန်မာဝတ္ထုတိုများ’၊ ဇွန်၂၀၀၄၊ မာတာစာအုပ်တိုက် (Khin Maung Twe 編(2004) 『ジャスミンはいかがと和訳ミャンマー短編小説』、Martar 書房) 〈KMT2004〉

မစန္ဒာ၊ ‘ဘဝအိပ်မက်ပန်းအိပ်မက်’၊ ဇွန်၊ ဇူလိုင် ၁၉၉၄၊ ရွှေသမင်စာပေ (Ma Sandar (1994) 『人生の夢、花の夢』、Shwe Tamin 出版) 〈MSD1994〉

မစန္ဒာ၊ ‘မစန္ဒာ-ဝတ္ထုတိုများ(၈)’၊ ဇွန် ၂၀၁၂၊ ပါရမီစာပေ (Ma Sandar(2012) 『マ・サンダー短編小説集-8』、Parami 出版) 〈MSD2012〉

မိုးမိုး(အင်းယား)၊ ‘ခံတက်နုလေးတွေညှိုးချိန်တန်တော့’၊ ဧပြီ ၁၉၈၇၊ စာပေလောက (Moe Moe. Inya (1987) 『カテッの若葉が枯れる頃には』、Sapeloka 出版) 〈MM1987〉

မောင်ခင်မင်(နေဖြူ)၊ ‘လူတိုင်းအတွက်အသုံးပြုမြန်မာစာ’၊ ၂၀၁၀၊ ဇင်ရတနာစာပေ (Khin Min. Danubyu (2010)、 『みんなの実践ビルマ語』、Zinyadanar 出版) 〈KM2010〉

မောင်သာနိုး၊ ‘မြန်မာစကားနဲ့စာပေ’၊ ဇွန် ၂၀၀၉၊ ကျောက်ဆောက်စာအုပ်တိုက် (Maung Thar Noe (2009) 『ミャンマー語と文学』、Kyauksauk 書房) 〈MTN2009〉

မြသန်းတင့်၊ ‘ဓားတောင်ကိုကျော်၍မီးပင်လယ်ကိုဖြတ်မည်’ ၁၉၇၃(ပ)၊ နိုဝင်ဘာ ၁၉၉၅(သ)၊ ဘဝတက္ကသိုလ်စာပေ။ (Mya Than Thint(1995) 『剣の山を越え火の海を渡る』、第 7 版、BawaTekkato 出版) 〈MTT1995〉

မြန်မာမြေသိန်းလွင်၊ ‘စကားတောင်းစား၏စကားပညာ’၊ ဇူလိုင် ၂၀၀၅၊ မိုးမြင့်စာပေ (Myansarmyae.Thein Lwin(2005) 『ザガータウンザーの話術』、Moe Myint 出版) 〈MTL2005〉

လူထုဒေါ်အမာ၊ ‘အမေ့ရေးစကား(ဒုတိယတွဲ)’၊ နိုဝင်ဘာ ၂၀၀၀၊ ကြီးပွားရေးစာအုပ်တိုက် (Luthu. Daw Ahmar(2000) 『お母さんの昔話-2』、Kyibwaye 書房) 〈DAM2000〉

လူထုဦးလှ၊ ‘မြန်မာပုံပြင်များ’၊ ၂၀၀၅၊ ကြီးပွားရေးစာအုပ်တိုက် (Luthu. U Hla(2005) 『ミャンマーの物語』、Kyibwaye 出版) 〈UH2005〉

သော်တာဆွေ၊ ‘ပတ္တမြားဝင်းထိန်’၊ ဖေဖော်ဝါရီ ၂၀၀၁၊ စစ်သည်တော်စာပေ (Thawdar Swe (2001) 『ルビー・ウィンテイン』、Sittidaw 出版) 〈TDS2001〉

သော်တာဆွေ၊ ‘ဟာသဝတ္ထုတိုများ ၁+၂’၊ စိတ်ကူးချိုချိုစာပေ၊ မတ်လ ၂၀၁၂ (Thawdar Swe (2012) 『お笑い短編小説集 1+2』、Seikku Cho Cho 出版) 〈TDS2012〉

သိန်းဖေမြင့်၊ ‘သိန်းဖေမြင့်ဝတ္ထုတိုပေါင်းချုပ်သစ်’၊ ၁ ဩဂုတ် ၁၉၉၈၊ ရာပြည့်စာအုပ်တိုက် (Thein Pe Myint (1998) 『ティンペーミン新短編小説集』、Yapyae 書房) 〈TPM1998〉

日本語に訳されたもの

南田みどり訳(1983)『東南アジアブックス、ビルマの文学 7、『剣の山を越え火の海を渡る』、井村文化事業者発行) 〈MDM1983〉

南田みどり編訳(1998)『ミャンマー現代短編集 2』、財団法人大同生命国際文化基金) 〈MDM1998〉

用例出典（文語体）

・ 参考書・教科書（ビルマ文字順）

ချိုချိုတင့်(၂၀၁၁) ၊ ‘မြန်မာစာသုတေသနစာတမ်းများ’၊ စာ ၂၅၃-၂၇၈၊ ရန်ကုန်၊ Wisdom Houseစာပေ။

Cho Cho Tint (2011), *myànmàtùtètàñsàtánmyá* 『ビルマ語研究論文集』 pp.253-278, Yangon, Wisdom House Publishing

ဖိုးကျား(၁၉၃၈) ၊ ‘ကိုယ်တွေ့ဝတ္ထုကောက်နုတ်ချက်များ’၊ မြန်မာ့ဂုဏ်ရည်ပုံနှိပ်တိုက်။ (“ဦးဖိုးကျားကိုယ်တွေ့ဝတ္ထုများ”သတ္တမအကြိမ်၊ ၂၀၁၄ခုနှစ် ဇန်နဝါရီလ။ ပါရမီစာပေ။ ရန်ကုန်။)

Po Kya (1938) *Excerpt of the stories based on Personal Experience* 『個人経験による小説の抜粋』, Myanma Gonye Publishing[Reprinted as *The stories based on Personal Experience by U. Po Kya* 『U Po Kya の個人経験による小説』 (2014), seventh Edition, Parami Publishing]

‘မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း’၊ ပထမတွဲ၊ မြန်မာစာဌာန၊ ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်၊ ၁၉၉၁ခုနှစ် နိုဝင်ဘာလ။

Burmese Literature Collection Volume 1 (1991), Department of Burmese, University of Yangon

‘မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်း’၊ ပဉ္စမတွဲ၊ မြန်မာစာဌာန၊ ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်၊ ၁၉၉၂ခုနှစ် ဇွန်လ။

Burmese Literature Collection Volume 5 (1992), Department of Burmese, University of Yangon

‘မြန်မာဖတ်စာ’(၂၀၁၄-၂၀၁၅)၊ သူငယ်တန်းမှ ဒသမတန်းအထိ၊ ပြည်ထောင်စုသမ္မတမြန်မာနိုင်ငံတော်အစိုးရ၊ ပညာရေးဝန်ကြီးဌာန၊ အခြေခံပညာသင်ရိုးညွှန်းတမ်း၊ သင်ရိုးမာတိကာနှင့်ကျောင်းသုံးစာအုပ်ကော်မတီ ၂၀၁၄-၂၀၁၅ပညာသင်နှစ်။

Burmese Readers for Basic Education (2014-2015), Grade-1~Grade-11, Ministry of Education, The Government of the Republic of the Union of Myanmar, Basic Education Curriculum, Syllabus and Textbook Committee 2014-2015

‘မြန်မာသဒ္ဒါ’၊ မြန်မာစာအဖွဲ့နှစ်သုံးဆယ်ပြည့်(၁၉၇၅-၂၀၀၅) အထိမ်းအမှတ်၊ တက္ကသိုလ်များပုံနှိပ်တိုက်၊ ၂၀၀၅ခုနှစ်။

Myanmar Language Commission (2005), 『ミャンマー文法』, Myanmar Language Commission 三十周年記(1975-2005), Tekkatomya 出版

・ 新聞

Kyaymon (ကြေးမုံ), 2016 年 4 月 1 日刊

Myanma Alinn Daily (မြန်မာအလင်း), 2016 年 4 月 1 日刊

Myanmar Time (မြန်မာတိုင်းမ်), 2015 年 12 月 31 日-2016 年 1 月 6 日刊

The Voice Weekly, 2014 年 12 月 22 日-2014 年 12 月 28 日刊

The Irrawaddy (ဧရာဝတီ), 2015 年 03 月 29 日刊

• 文学作品

‘ခေတ်စမ်းပုံပြင်များ(ခေါ်)ခေတ်စမ်းဝတ္ထုများ’ အတွဲ၁နှင့်အတွဲ၂၊ တတိယအကြိမ်ပုံနှိပ်ခြင်း၊ ရာပြည့်ပုံနှိပ်တိုက်၊ ၂၀၀၄ခုနှစ်။

Khitsann Ponbyin mya (or) Khitsann wutthu mya 『キッサン文学集』 *Volume 1-2*(2004), Third Edition, Yapyae Publishing House

Khitsann Ponbyin mya (or) Khitsann wutthu mya 『キッサン文学集』 *Volume 1-2*(2004)は以下の 2 巻をまとめて出版したものである。

Theippan Maung Wa and others (1936), Pe Maung Tin edited, *Khitsann Ponbyin Volume 1*. Modern Literature Series No.2, Fourth Edition, The Burma Education Extension Association[Reprinted as *Khitsann Ponbyin mya (or) Khitsann wutthu mya* 『キッサン文学集』 *Volume 1* (2004), Third Edition, Yapyae Publishing House]

Theippan Maung Wa (1936), Pe Maung Tin edited, *Khitsann Ponbyin Volume 2*. Modern Literature Series No.2, Fourth Edition, Pyigyimandai Pidakat press[Reprinted as *Khitsann Ponbyin mya (or) Khitsann wutthu mya* 『キッサン文学集』 *Volume 2* (2004), Third Edition, Yapyae Publishing House]

付録 1：口語体指示詞のまとめ表

使いわけの要因		d 系	?ɛdɪ 系	hɔ 系	用法	
身体動作の有無		あり	あり	あり	現場	
物理的な距離の違いを区別する場合		近称 (対象が話し手に近いと感ぜられる場合)	遠称② (対象が話し手から離れている・離れていく場合)	遠称① (対象が話し手の手の届かないところからかばんやり見えるかなり遠くまでにある場合)		
同一の話題で同一の対象を指示する場合	初回の語り	同定可	同定可	同定可		
	初回以外の語り	条件付きで同定可 (話し手に近い対象である場合)	無条件で同定可	いかなる場合においても同定不可	文脈	
前方照応・後方照応		先行文脈(照応)が指示詞の直前あるいは直後にある場合	先行文脈(照応)が指示詞の直前あるいは直後にある場合	1) 先行文脈(照応)が固有名詞・世界知識であれば、指示詞の直前あるいは直後にある場合 2) 指示対象が固有名詞・世界知識でなければ、指示詞から離れている場所にある場合		
後方照応		センテンスが段落で示される長い語り	センテンスが段落で示される長い語り	センテンスが段落で示される長い語り／固有名詞(／世界知識)		
物理的な距離の違いがみられない場合：その 1		×	×	×		文脈参照
対象に対する話し手の知識による場合	聞き手が手に持っているものを指す場合					
	自分が持っている対象について聞かれた相手の質問に対応する場合	×	×	×		
	聞き手が所有しているものを指す場合	条件付きで使用可 (対象が聞き手からは遠く話し手に近い場合)	○	条件付きで使用可 (聞き手は発話時に対象を手に持っていない場合)		
非位置指示代名詞が潜在的な先行文脈を受ける場合 (話し手による対象への心理的な要因がみられない場合)	lè や pɔ を伴わない場合	×	○	×		
	lè や pɔ を伴う場合	○	○	○		
物理的な距離の違いがみられない場合：その 2 (心理的な要因があると感ぜられる場合)		1) 自己に関わりが強いと感ぜられる場合 2) 指小辞を後接して、愛着を感じさせることもある	1) 自己に関りが強いと感ぜられない場合 2) 指大辞を後接して、嫌味を感じさせることもある	同定不可	心理	

表中の「あり」は、該当項目の指示詞には左にある使い分けの要因が関与することを表す。

「○／×」は、左列の「使い分けの要因」の元では、該当項目の指示詞を使用することについての許可を表す。

「同定可／同定不可」は、聞き手は対象を同定することを表す。

付録 2：文語体指示詞のまとめ表

用法	使い分けの要因		ṛ	ṛò	yín	lǐgáun
現場指示	物理的な距離（あくまでも文語体であるため、身体動作の有無は確認不能）	近称（対象が話し手に近い場合）	○	×		
		遠称（対象が話し手から遠い場合）	×	○		
文脈指示	先行文脈（照応）が指示詞の直前あるいは直後にある場合/センテンスが段落で示される長い語り		○	○	○	○
	前述の説明や内容の締めくくりを示す場合		使用の傾向がある	確認できず		
	前述の説明や内容更に展開する場合		確認できず	使用の傾向がある		
	人称代名詞として用いる場合				○	○
	「同上」という意味で用いる場合				○	○

表中の「○／×」は、左にある使い分けの要因の元では、該当項目の指示詞を使用することについての許可を表す。

「使用の傾向がある」は、左列の「使い分けの要因」の元では、使用している傾向が確認できるということを表す。

「確認できず」は、左にある使い分けの要因の元では、使用できないと言い切ることはできないが、使用傾向は確認できていないということを表す。

付録 3 : ヤーザクマーラ(ラージャクマール)碑文

第 4 章の「ビルマ語の歴史的な事情についての補足」で触れた内容についての付録を記す。なお、これはヤーザクマーラ(ラージャクマール)碑文で観察される現代ビルマ語の指示詞 ဤ/ʔi/ と ထို/tʰə/ の使用回数を確認するための添付資料に過ぎない。なお、以下で確認する碑文の綴りは原文からではなく、現代ビルマ語で書かれた『3 年次ミャンマー碑文』大学教材シリーズ 59 (1986) pp.5-10 より引用したものである。

ရာဇကုမာရ်ကျောက်စာ

ヤーザクマーラ碑文(ラージャクマール)

မြို့နယ်မေတ္တာယ။ဘုရားသခင်သာသနာအနှစ်တ

栄えあれ！仏を敬え！仏暦で

ထောင်ခြောက်ရာနှစ်ဆယ်ရှစ်နှစ်လွန်

1628 年が過ぎ

လေပြီးရကား။ဤအရိမဒ္ဒနပုရ်မည်သောပြည်

去った後、このアリマツダナプルという名の都

နှိုက်အား။မြို့တြိဘုဝနာဒိတုဓမ္မရာဇ်မည်သောမ

に、聖ティブヴァナーディッチャ仏法王という名の（人が）

င်းဖြစ်၏။ထိုမင်း၏ပယ်မယားတ

王となった。その王の寵妃の

ယောက်သောကား။တြိလောကဝဋ်သကာဒေဝီ

一人はティローカヴァタムサカーデーヴィー

မည်၏။ထိုပယ်မယားသားတမုလေးရာဇ

という名であった。その寵妃の息子は、ラージャ

ကုမာရ်မည်၏။ထိုမင်းကားကျွန်သုံးရွာ

クマールという名であった。その王は奴隸 3 カ村

တေးပယ်မယားအားပေး၏။ထိုပယ်မ

を寵妃に与えた。その寵妃

ယားသေခဲ့ရကား။ထိုပယ်မယားတန်ဆာနှင့်ထို

が死んだ時、王妃の装飾品と、その

ကျွန်သုံးရွာသောနှင့်တေးထိုပယ်မယား

奴隸 3 カ村とを、その寵妃の

သားအသားရာဇကုမာရ်မည်သောအားမင်းပေးတုံ

子、ラージャクマールという名（の人）に王が与え

၏။ထိုမင်းအနှစ်နှစ်ဆယ်ရှစ်နှစ်မင်းမူပြီးရွှေ

た。その王は 28 年間統治を行つたのち、

၏သေခဲ့မှုနာသရောနှိုက်တေးထိုရာဇကု

致死の病に罹つた際、そのラージャク

[illegible]

မယာသားကြိုတုရားအားရသွန်းရေ၏ကြိုသို့
 妃の息子は、この寺院に水を注いで次のように
 မိန့်၏။ကြိုငါ့အမှုကားသပ္ပာတညာ
 言った。「この、我が行いが、全知
 ၏ပြဇ္ဇာရအံ့သောအကြောင်းဖြစ်စေတေး။ငါ့
 を得る因となりますよう。我が
 နောင်အားငါ့သားလည်းကောင်း။ငါ့မြေးလည်းကောင်း။ငါ့အဆွေ
 後に、我が子であろうと、我が孫であろうと、我が親族
 လည်းကောင်း။သူတို့လည်းကောင်း။ကြိုတုရား
 であろうと、他人であろうと、この仏像
 အားတလှူခဲ့သောကျွန်အနိပ်အစက်တေးမူမူ
 に我が寄進した奴隷を虐げる
 ကား။အရမိတ္တိရာတုရားသခင်အဖူးရစေ။ ။
 ならば、(その者が) 弥勒に拝謁すること叶わなきように」と。

この碑文の日本語訳は澤田英夫 (2002-2006) 「ラージャクマール(ミヤ=ゼーディー)碑文
 A 柱、ビルマ語面」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の以下のホームペー
 ジを参考にした。 <http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/bagan/rkamrtxt.html> (2018/7/31 最
 終閲覧)

付録 4 : 指示代名詞 yín と lăgáun の用例

4.7.2 の「指示代名詞 yín と lăgáun の使用」で触れたそれぞれの原文についての付録を記す。

• yín の用例

yín の用例は、Cho Cho Tint (2011)の『ビルマ語研究論文集』 pp.253-278 より選定したものである。

(ဒေါက်တာချိုချိုတင့် ‘မြန်မာစာသုတေသနစာတမ်းများ’၊ ရန်ကုန်၊ ၂၀၁၁ခုနှစ်ဇူလိုင်လ၊ Wisdom House စာပေ၊ စာမျက်နှာ ၂၆၂မှ ကူးယူဖော်ပြသည်။)

အကြောင်းအရာ-ရာဇာဓိရာဇ်အရေးတော်ပုံကျမ်းတွင်တွေ့ရသောပဲခူးမြို့ရုပ်ပုံလွှာ

...၎င်းအပြင် ဗညားနွဲ့သည် ရှင်သာမဏေတစ်ပါး၏ စကားထူးစကားဆန်းကို ဖြေဆိုနိုင်ရန် အဓိဋ္ဌာန်ပြုပုံကိုလည်း-

ထိုစကားကို ဗညားနွဲ့ကြားရပြီးလျှင် ရွှေမော်ဓောဘုရားသို့သွား၍ ရှိခိုးဝတ်ပြုကာ..^၁

ဟူ၍ ဖော်ပြထားရာ ပဲခူးမြို့၏အထင်ကရစေတီတစ်ဆူဖြစ်သော ရွှေမော်ဓောဘုရား၏ပုံရိပ်ကို တွေ့မြင်ရပေသည်။ တစ်ဖန်-

နတ်ပွဲသဘင်ကို တစ်နေ့နှင့်တစ်ညမျှကြာအောင် ကကြရမည်။^၂

ဟုဖော်ပြထားရာ ပဲခူးသားတို့၏ ကိုးကွယ်ယုံကြည်မှုပုံရိပ်ကိုလည်း မှန်းဆသိမြင်ရပေသည်။

ထို့ပြင် ရာဇာဓိရာဇ်အရေးတော်ပုံတွင် ‘တဘောင်တနည်းနာ’သော ဓလေ့ကိုဖော်ပြရာ၌ ပဲခူးမြို့၏ တံခါးများကို ဖော်ပြသကဲ့သို့ရှိနေပါသည်။ ယင်းတံခါးတို့မှာ မောတရတ်၊ မောဓော၊ စာတလေး၊ ဒင်္ဂါဒုန်၊ မလွယ်၊ ဖျားနန်းတို့ ဖြစ်သည်။ ပဲခူးမြို့ပုံရိပ်သည် စနစ်ကျကြောင်းတွေ့ရပါသည်။ ၎င်းအပြင် ပဲခူးမြို့၏ ခံမြို့များဟု ဆိုနိုင်သော မြို့အမည်များကို တွေ့ရပါသည်။ ဒန်ဝန်း၊ မုတ္တမ၊ လဂွန်ဗျည်း၊ သံမောင်၊ တရည်း၊ မော်ဘီ၊ လိုင်၊ ဒဂုန်၊ တိုက်က လား၊ ဒလ၊ မြောင်းမြ၊ တရည်းတို့ဖြစ်သည်။ ပဲခူးသည် ခံမြို့များနှင့် တင့်တယ်နေသော မြို့တစ်မြို့ပင် ဖြစ်သည်။

ဤသို့ဖြင့် သက္ကရာဇ်၆၄၉ခုနှစ်တွင် ဝါရီရူမင်းဘွဲ့ခံ မွန်မင်းမကူးသည် ပုဂံကိုပုန်းစား၍ မုတ္တမထီးနန်းကို တည်ထောင်ခဲ့လေသည်။ ဗညားဦးသည် သက္ကရာဇ်၇၁၀ခုနှစ်တွင် မုတ္တမထီးနန်းကို တည်ထောင်ခဲ့လေသည်။ သက္ကရာဇ်၇၃၁ခုနှစ်တွင် ဟံသာဝတီပဲခူးသို့ ပြောင်းရွှေ့ခဲ့သည်။ ထိုအခါမှစ၍ ရာဇာဓိရာဇ်အရေးတော်ပုံကျမ်းတွင် ဟံသာဝတီပဲခူးပုံရိပ်တို့ကို ကြိုကြားကြိုကြားတွေ့မြင်လာရပါသည်။ ထိုသို့တွေ့မြင်ရသော ပုံရိပ်တို့ကို ပြန်လည်သုံးသပ် ကြည့်လျှင် ပဲခူးပတ်ဝန်းကျင်ရှိဘုရားများ၊ စေတီပုထိုးများ၊ နတ်ပွဲများ၊ စနည်းတဘောင် ယုံကြည်မှုများ၊ ဗညားဦးနှင့် ဗညားနွဲ့လက်ထက် ပဲခူးမြို့ပြနှင့်မြို့တံခါးအမည်များကို တွေ့မြင်ရပါသည်။

^၁ နိုင်ပန်းလှ (ဒေါက်တာ-)၁၉၉၇၊ ၈၄။

^၂ ယင်း၊ ၈၄။

ကျမ်းကိုးစာရင်း

နိုင်ပန်းလှ၊ ဒေါက်တာ။ (၁၉၉၇)။ ရာဇာဓိရာဇ်အရေးတော်ပုံကျမ်း၊ ရန်ကုန်၊ မြဝတီစာပေတိုက်။

• lăgáun の用例

lăgáun の用例は、“*Burmese Literature Collection Vol. 5 (1992)*”より選定したものである。

(‘မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်းပဉ္စမတွဲ၊မြန်မာစာဌာန၊ရန်ကုန်တက္ကသိုလ်၊၁၉၉၂ခုနှစ်ဇွန်လ’မှကူးယူဖော်ပြသည်။)

က

မာတိကာ

အမှတ်စဉ်	အကြောင်းအရာ	စာဆို	စာမျက်နှာ
-မြန်မာစာညွန့်ပေါင်းကျမ်းသစ်များအတွက်ဥယျာဇဉ်			ဏ
-အထွေထွေကြီးကြပ်သူ၏အမှာ			ခ

ပထမပိုင်း

အခန်း၁၊သီချင်း

(က)အချင်းငယ်

၁။ပုပ္ဖာတောင်သည်ရွှေတောင်တည့်လေ-ချီ

အမည်မသိ(ပုဂံခေတ်)

၁

(ခ)ကာချင်း

၁။အုံကာမည်း-ချီ

ပြည်မင်းမျက်နှာရှည်
အင်းဝခေတ်

၁

အခန်း၂၊လင်္ကာ

(က)ရတု

၁။အထွေအထွေ-ချ

ဆူးတွင်းပစ်ဆရာတော်

၅

၂။ကြာမည်မထင်-ခ

ရှင်သူရဲ

၆

၃။ချစ်ဖက်သက်လျာ-ခ

၎င်း

၇

၄။ရင့်ကျူးရင့်ကျူး-ချီ

၎င်း

၈

၅။ရတနာပူရ-ချီ

ရှင်အုန်းညို

၈

၆။ရည်းငံနေ၍-ချ

ရှင်မဟာသီလဝံသ

၉

၇။ခေတ္တသရေ-ချီ

ဝံတောင်လယ်ဆရာတော်

၁၀

၈။ရွှမ်းဘိသည်လည်း-ချီ

၎င်း

၁၀

ခ

မာတိကာ

အမှတ်စဉ်	အကြောင်းအရာ	စာဆို	စာမျက်နှာ
၉။လေပြင်းထန်၍-ချ		ဝံတောင်လည်ဆရာတော်	၁၁
၁၀။အရညကင်-ချီ		၎င်း	၁၂

၁၁။ကြံထွက်ဆ၍-ချီ	ရှင်မဟာရဋ္ဌသာရ	၁၄
၁၂။ကြံအင်မြောင်၍-ချီ	၎င်း	၁၅
၁၃။ချစ်စုံမက်၍-ချ	၎င်း	၁၅
၁၄။ငါးဆူရွှေကြာ-ချီ	၎င်း	၁၆
၁၅။ဆင်းလှဆင်းထွတ်-ချီ	၎င်း	၁၆
၁၆။နန်းမြေအောင်ချာ-ချီ	၎င်း	၁၇
၁၇။ပုရေနိသင်-ချီ	၎င်း	၁၇
၁၈။မြသွယ်ရောင်လျှံ-ချီ	၎င်း	၁၈
၁၉။မဇ္ဈိမတိုက်-ချီ	၎င်း	၁၉
၂၀။မြတ်မျိုးမြင့်မှန်-ချီ	၎င်း	၁၉
၂၁။ဌာနတည်၍-ချီ	ရှင်တေဇောသာရ	၂၀

- ¹ 本論で用いる「指示詞」という用語については、ビルマ語に指示詞という品詞があるというわけではなく、一般に物事を指し示す指示機能を持つ語（指示語）のことである。
- ² トウザライン (2016, 2018)では「文脈ありの現場指示」という用法を使用していた。
- ³ 外務省 HP: <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/data.html#section1>
- ⁴ 原注 4: ‘locational’の日本語訳として「位置的」とするのは一般的ではないが、「場所的」とすると空間を表す名詞のみであり、時間を表す場合が排除されてしまうため、あえて「位置的」とした(岡野 2010: 240)。
- ⁵ 原注 5: この他に副詞的な機能をもつ担う名詞類がある(岡野 2010: 240)。
- ⁶ 原注 6: なお“cáun”「学校」は日本語とよく似て、非位置名詞の有生名詞相当にもなり得る。
(e.g. cáun-kâ ?é-lò pyó-tè. 「学校がそのように言った」)(岡野 2010: 240)
- ⁷ WrB は Written Burmese のことである。
- ⁸ a) 付属語（助詞）などの使い分けについて、口語と文語を対照して例示すると、次のようになる。文語は、ビルマ語の正書法に代表される形式を上げる。V+, N+, S+は、それぞれ、動詞類、名詞類、文（動詞文、名詞文ともに）に接続することを示す(藪 1992: 593-594)。

i) 法の助詞

口語	文語
V + tɛ̃	V + t̃i
V + tɛ̃ (関係助詞)	V + t̃i, V + t̃ɔ̃
V + mɛ̃	V + mỹi
V + mɛ̃ (関係助詞)	V + mỹi
V + # 《命令》	V + lɔ̃

ii) 否定の助詞、疑問助詞

口語	文語
mǎ + V + p ^h ú	mǎ + V + #
mǎ + V + nɛ̃	mǎ + V + hni?
V + t̃ǎ + lá (疑問詞なし)	V + t̃ǎ + lɔ̃
V + mǎ + lá	V + mỹi + lɔ̃
V + t̃ǎ + lé (疑問詞あり)	V + t̃ǎ + ní
V + mǎ + lé	V + mỹi + ní
N + lá	N + lɔ̃
N + lé	N + ní

iii) 格助詞、副助詞

口語	文語
----	----

N + kâ (-dô) 《主格》	N + ká
N + yê 《属格》	N + ʔi
N + kò 《対格・与格・向格》	N + kò 《対格》, N + ʔá 《与格》, N + sʰi 《向格》
N + hmâ 《於格》	N + hnaiʔ, N + twìn
N + kâ 《奪格》	N + hmâ
N + nê 《具格・共格・連格》	N + hnîn, N + pʰyîn 《具格のみ》
N + hà 「～は」	N + hmà, N + ʔi
N + lò 「～ように」	N + kêtô
N + lé 「～も」	N + lé
N + tàun 「～さえ」	N + pìn + hlyìn
N + /S + lò 「～と」	N + hû

iv) 接続助詞

口語	文語
V + pí + #	V + ywê 《因果的》, V + ká 《継起的》, V + hlyeʔ 《同時的》
V + yìn 「～ば、～なら、～たら」	V + hlyìn V (+ pà) + kâ
V + lò	V + ʔă + pʰyîn
V + pè + mē 「～けれども」	V + sʰò + lé
V + ʔă + lò 「～ように」	V + ʔă + kêtô

v) 指示詞、疑問詞

口語	文語
dì 「この」	ʔi, ʔi
hò 「あの」	tʰò
ʔédi 「その」	tʰò, yín, lăkáuN (lékáuN)
bè 「どの」	myì, ʔăbè

- b) 音節のひきのばしについて、以下に述べる。ビルマ語は、単音節語に富む言語であるが、単音節語+単音節語、単音節語+非自立形態素の組み合わせによって、多くの2音節語をつくることができる。

また、2 音節語に、さらに、その意味を補う、あるいは、関連した意味を添える 2 音節語を付加し、全体として、2×2=4 という 4 音節の表現形式をもつことがある。

i) 2 音節語にする例

twê-dè「会う」→twê-s^hòun-dè「会う」+「会う」=「会う」

mé-dè「尋ねる」→mé-myán-dè「尋ねる」+非自立形態素=「尋ねる」

ii) 4 音節語にする例

pyó-dè「言う」→pyó-s^hò-dè「言う」+「言う」

→t^hou?-p^hò-dè(「出す」+「表す」)「言い表す」+pyó-s^hò-dè→t^hou?-p^hò pyó-s^hò-dè「表明する」

lé-zá-dè「尊敬する、重んじる」(「重い」+非自立形態素)→yò-tè lé-zá-dè(「畏敬する」+「尊敬する」)「尊崇する」

tìn-dè「教える」→tìn-cá-dè(「教える」+cá-dè「伝える」)「教える」→tìn-cá pô-c^hâ-dè(「教える」+pô-dè「送る」+c^hâ-dè「落とす」)「教授する」

cî-hyû(「見る」+「見る」)+lê-là(「学ぶ」)→cî-hyû lê-là-dè「見学する」

twê-s^hòun-dè(「会う」+「会う」)+s^hwé-nwé-dè(「討論する」)→twê-s^hòun s^hwé-nwé-dè「会話し討議する」

⁹ 原文はビルマ語。原文の要約と日本語訳は筆者による。

¹⁰ 原文: အပြောစကားမှာမူနေ့စဉ်ပြောဆိုနေကြသောစကားပြောပုံဆိုပုံအတိုင်းပြေပြစ်အောင်စီစဉ်ရေးသားထားခြင်းဖြစ်သည်။ အတွက်အပြောနှင့်နီးစပ်ပြီးပေါ့ပါးသွက်လက်သည်။ထို့ကြောင့်စကားပြောပုံအတိုင်းရေးသောပေးစာများ၊ပြောစကားများကို အပြောစကားပြေဖြင့်ရေးလေ့ရှိကြသည်။ (Khin Min 2010:69)

¹¹ 原文: အရေးစကားပြေသည်စာဟန်ပေဟန်ဖြင့်အစဉ်အဆက်ရေးသားလာသောစကားပြေမျိုးဖြစ်သည်။အတွက် စာသံပေသံပါပြီး လေးနက်ခံ့ညားသည်ဟုယူဆကြသည်။ထို့ကြောင့်လူကြီးမိဘ၊အထက်အရာရှိစသည်တို့ထံရေးသောပေးစာများ၊အစီရင်ခံစာများ၊ လုပ်ငန်းသဘောအရရေးသောစာများ၊မှတ်တမ်းများ၊စာပေကျမ်းဂန်များကိုအရေးစကားဖြင့်ရေးလေ့ရှိကြသည်။ (Khin Min 2010: 69)

¹² (引用節)や(名詞節)など、それぞれ括弧内の説明は筆者によるものである。

¹³ 原文: မြန်မာစာအခန်းရေးရာ၌‘လို့, တဲ့, ဒီ, ဒါ, ...’စသောတိုက်ရိုက်စကားတို့ကိုထည့်သွင်း၍ရေးနောသုံးလိုက်သော် မြန်မာစာ၏ တန်ဖိုးကိုထိခိုက်လေသည်။ ဖိုးကျား၊၁၂၉၉ခုကဆုန်လ။ (Po Kya 1938)

¹⁴ データ量は音節数で示す。ビルマ語ではデータ量を測る基準が決まっておらず、文字数だけでは有効に語としてカウントすることが原理的に困難であるため、音節ごとに数えることにした。ビルマ語の書記体系では文字と音節が一对一に対応せず、1 音節は 1 字から 7 字 (ကျောင်း/cáun/, ကြောင့်/cáun/), まれに 8 字 (မြောင်း/hmyáun/, မြောင့်/hmyáun/)まで表記される。重ね文字の場合、末子音の母音削除記号 (vowel killer) が表記されない。例えば、အတ္ထုပ္ပတ္တိ/?át^hou?pa?tí/のような重ね文字は、表記上は 9 字だが、実質は 12 字である。このような理由で、必ずしも正確な数え方とは言えないが、今回のデータは使用回数が多い音節あたりを平均し、1 音節に 3 字相当として数えたものである。

¹⁵ キッサン・サーペー: 一九三〇年代初頭から四〇年代にかけてビルマ文壇を^{ふうび}風靡した文学の一潮流。イギリス領植民地時代の行政官ファーニバル J. S. Furnivall の助言に基づき、一九二八年「ビルマ教育普及

協会」が設立される。この協会設立をきっかけとして「キッサン・サーペー」(「時代の要請を探る」の意)が誕生したという。キッサン・サーペーは、西欧の教養を身につけた知識層による新しい文学の試みで、当初はビルマ文学の伝統を破壊するものとして手厳しい批判を受ける。しかし簡潔な文体とリアリズム手法は、しだいに人々の心をとらえた。この文学運動により、現代ビルマ(ミャンマー)文学の基礎が確立したといわれる。代表的作家に、テ IPPAN・マウン・ワ Theippan Maung Wa(一八九九—一九四二)、テッカトウ・マウン・タン・シン Tetkatto Maung Thant Sin(一九〇五—)、ゾー・ジー Zawgyi(一九〇八—一九〇九)、クタ Kutha(一九〇八—七六)、ミン・トゥ・ウン Minthuwun(一九〇九—)らがいる。(奥平龍二 1985: 587)

- ¹⁶ 原注¹.「現場指示」「場面指示」とも言う。
- ¹⁷ 原注². anaphoric とは、本来「前方照応」のことである。文脈指示は前方照応が基本であるが、後述のように一部「後方照応」(cataphoric)もある。
- ¹⁸ 吉田 (2004: 41)によれば「談話とは二人の人間が交互に話を交わすことであり、ここでは『聞く』という作業の中で指示活動がなされる。直示領域が空間系列にあったのに対し、談話文脈領域は時間系列にある。語られた音声は片端から時間の中に消えていき、残るのは音声言語によって触発された表象である」。
- ¹⁹ 文章文脈について吉田 (2004: 51)は「直示領域における対象は、空間系列における構図であった。それに対し、談話領域における対象は時間系列に置かれていた。文章はそういった概念対象を、再び時空系列の中に文字言語として解き放ったものである。ページや画面の空間の中で文字は可視的であるし、時間の中に消えた文字もまたページや画面を翻して確認することができる」と説明している。
- ²⁰ 1975 年頃に設立された Myanmar Language Commission (မြန်မာစာအဖွဲ့・ビルマ語委員会)は最も権威があるミャンマーの公的機関の一つで、ビルマ語の辞書やビルマ語教科書などを作成している。
- ²¹ 原文：ဒီ-ဤ။သည်။ (Vol.: 2; ဆ-န) p.172
- ²² 原文：သည်-အနီးရှိတစ်စုံတရာကိုညွှန်းသောစကားလုံး။ (Vol. 4: ရ-ဌ) p.218
- ²³ 原文：ဤ-နီးကပ်သည့်အချိန်ကာလနှင့်အနီးရှိသည့်သက်ရှိသက်မဲ့တို့ကိုညွှန်ပြသောစကားလုံး။ (Vol. 5: အ) p.198
- ²⁴ 原文：အဲသည်-ရည်ညွှန်းပြောဆိုလိုသောအကြောင်းအရာပစ္စည်းသည်ကိုလည်းကောင်းပြောဆိုဖော်ပြခဲ့ပြီးသော အကြောင်းအရာပစ္စည်းသည်တို့ကိုလည်းကောင်းညွှန်ပြရာတွင်သုံးသောစကားလုံး။ (Vol. 5: အ) p.165
- ²⁵ 原文：ထို-ကာလအားဖြင့်လည်းကောင်း၊ဒေသအားဖြင့်လည်းကောင်းကွာလွန်းသည့်သက်ရှိသက်မဲ့တို့ကိုညွှန်ပြသောစကားလုံး။
-သက်ရှိသက်မဲ့တို့ကိုညွှန်ပြသောစကားလုံး။ (Vol. 2: ဆ-န) p.146
- ²⁶ 原文：ယင်း-တစ်စုံတရာကိုထပ်ဆင့်ပြန်လည်၍ညွှန်ပြရာ၌သုံးသောစကားလုံး။၎င်း။ထို။
-ထိုအရာ။၎င်းအရာ။ (Vol. 3: ပ-ယ) p.222
- ²⁷ 原文：၎င်း-...အတိုရေးသည့်အခါအညွှန်းနာမဝိသေသနဖြစ်သော‘ယင်း’အစား‘၎င်း’ကိုပင်သုံးစွဲလာခဲ့ကြသည်။
-ယင်းနှင့်အတူတူ။ (Vol. 4: ရ-ဌ) p.155
- ²⁸ 原文：ဟို-၁၊ ညွှန်ပြသည်မလှမ်းမကမ်းနေရာ၌ရှိသော။ထို။
၂၊ လွန်လေပြီးသောကာလ၌ရှိသောဖြစ်သော။ (Vol. 4: ရ-ဌ) p.243
- ²⁹ 原文：(က) ပုဂ္ဂလနာမ်စား-သာဓက။ ။ကျွန်တော်၊ကျွန်မ၊ငါ၊ကျွန်ုပ်၊မိမိ၊မင်း၊နင်၊ရှင်၊သူ။
(ခ) အညွှန်းနာမ်စား-သာဓက။ ။ဤ၊သည်၊ထို၊၎င်း။
(ဂ) အမေးနာမ်စား-သာဓက။ ။ဘယ်၊ဘာ၊မည်သူ။

(ဃ) သင်္ချာနာမ်စား-သာဓက။ ။တစ်ပါးနှစ်ယောက်သုံးကောင်လေးခုအချို့အားလုံးအနည်းငယ်တစ်ဝက်။

Myanmar Language Commission (2005: 45-46)

³⁰ 原文：အညွန့်နာမ်စား။ ။နာမ်ပုဒ်တစ်ခုကိုညွန့်ပြသည့်နာမ်စားကိုအညွန့်နာမ်စားဟုခေါ်သည်။

Myanmar Language Commission (2005: 46)

³¹ 原文：(က)ဂုဏ်ရည်ပြနာမဝိသေသန-သာဓက။ ။လိမ္မာသော၊ကောင်းသော၊မိုက်သော၊ချိုသော၊ခါးသော။

(ခ)အညွန့်နာမဝိသေသန-သာဓက။ ။ဤသည်၊ထိုငှါ၊တစ်စုံတစ်ခု၊တစ်ပါး၊အခြား။

(ဂ) သင်္ချာနာမဝိသေသန-သာဓက။ ။တစ်နှစ်သုံး၊ပထမ၊ဒုတိယ၊တတိယ၊အချို့၊အားလုံး၊အလုံးစုံ။

(ဃ) အမေးနာမဝိသေသန-သာဓက။ ။မည်မျှ၊မည်သည့်၊မည်သို့သော၊ဘယ်၊အဘယ်၊ဘယ်လောက်။

Myanmar Language Commission (2005: 58-59)

³² 原文：အညွန့်နာမဝိသေသန။ ။နာမ်ကိုညွန့်ပြခြင်းဖြင့်အထူးပြုသည့်ပုဒ်ကိုအညွန့်နာမဝိသေသနဟုခေါ်သည်။

Myanmar Language Commission (2005: 59)

³³ 原文：(က)ဤသည်တို့သည်အနီးတွင်ရှိသောတစ်စုံတစ်ခုကိုညွန့်ပြသောအညွန့်နာမဝိသေသနများဖြစ်ကြသည်။

(ခ) ထိုသည်အဝေးတွင်ရှိသောတစ်စုံတစ်ခုကိုညွန့်ပြသည် ။

(ဂ) ထိုငှါ၊ယင်း၊ဤသို့သော၊ထိုသို့သောတို့သည်ဖော်ပြခဲ့ပြီးသောနာမ်ကိုညွန့်ပြသည်။

Myanmar Language Commission (2005: 168)

³⁴ 原文：‘ဟို’နှင့်‘သည်’ကိုရှေးက‘ထို’နှင့်‘ဤ’ဟုသုံးပါသည်။ယခုလည်းစာသုံးအဖြစ်သုံးနေဆဲဖြစ်ပါသည်။ အပြော အသုံးမှာမူ‘ဟို’
‘ဒီ’ဖြစ်သွားပါပြီ။ပြောသူနှင့်ဝေးသည့်အရာကို ထို (ဟို)ဟု ရည်ညွှန်းပြီး နီးသည့်နေရာကို ဤ(ဒီ)ဟု ရည်ညွှန်းကြောင်း
အများအသိပင်ဖြစ်ပါသည်။ (Khin Min 2007: 34)

³⁵ Myanmar Language Commission (2001: 615)によると/?é/の起源は‘[colloq]word interposed when groping for words’、言葉を模索する際に挿入する口語表現である。

³⁶ 引用文献内の音韻表記は本論の方式に統一した。

³⁷ 藪 (1992)は「#」をゼロを表す記号として用いている (例えば 570r)。

³⁸ 「ここはどこですか？」をビルマ語で‘ဒီနေရာ(/ဒါ)ဘယ်နေရာလဲ။/dì nètà/(dà) bè nètà lé/’「この場所(・これ)はどの場所ですか？」と言う。

³⁹ ‘The proximate demonstrative is /di/, the distal /hou/.(Wheatley 1982: 101-102)’

⁴⁰ ‘Demonstratives precede attributive nouns and verbs. The proximate demonstrative is *di*, the distal *hou*.(Myint Soe 1999: 44-45)’

⁴¹ Gundel (1993: 276)では、Referential について‘The speaker intends to refer to a particular object or objects’「話し手が特定 (specific)の参照物を指示 (referential)していることを意図している」という意味で使われている。

⁴² なお、大野 (1983)と加藤 (2015)は、日本語で書かれた一般向け学習者用の書籍における記述であり、日本人に理解しやすいように「教育的配慮」がなされていた可能性もあるとも考えられる。

⁴³ hāwà あるいは hāhwà という形式はものを表す場合のほかに名前を思い出せない場合など、人を表す呼びかけ語としてもよく使用される。その他に hòdín、hò?ou?sà の形式もみられる。

⁴⁴ 具体的な動作についてはそれぞれ(17)~(19)、(22)~(25)、(29)~(32)の用例の下線部を参照。

⁴⁵ 本稿では助動詞-*câ* にはそれが表す意味の差異を問わず、*mutual* としている。助動詞-*câ* は相互的動作のとき副詞的要素 (/ʔăc^hínjín/ 「互いに」 など)がない場合はほぼ必須だが、ただ単に複数の主語である場合に随意的に現れることがある。

⁴⁶ ここでの+記号は NV 型動詞における N と V との境界を示す。岡野 (2017: 134)によれば、NV 型動詞とは「動詞要素のみでは意味的に成り立たない、あるいは少なくとも完全とは言えない組み合わせである。名詞要素と動詞要素とが、全体の意味に対して構成的である場合もあれば、そうでない場合もある」。Okell (1969: 36)の *verb with tied noun* もしくは *tied-noun verb*、藪 (1992: 576l)の成句動詞とよく似た概念であるが、岡野の言う NV 型動詞は構成的なものまでも含んでいる点が異なると思われる。澤田 (1999: 10)の「動詞+名詞の組み合わせ」(「なじみのペア」「NV イディオム」)とほぼ同じ。

⁴⁷ アンティーク雑貨屋での自然会話は 2016 年 3 月 7 日に収録したデータであり、店員(A)が店に遊びに来た友人(B)とその友達(C と D)に店内の品物について案内している場面である。A と B はビルマ人であり、C と D はビルマ語が堪能な外国人である。C の 50 代の男性以外は全員 30 代の女性である。データを本論の用例として掲載するにあたり、会話協力者の承諾をいただいている。

⁴⁸ 録音状態がよくないせいか、*paʔtà*「蝶番」と聞こえる。ただ本人が木琴を指さしをしており、ここは *paʔtálá*「木琴」と表記した。

⁴⁹ ここでの「世界知識」は加藤 (2004)の用法である。加藤 (2004:15)は、「世界知識は、個人ごとの違いがかなりありそうです」と述べている。

⁵⁰ • *dà-(k^hă)lé* の例

dà-(k^hă)lé *lòjìn-laiʔ-tà.*
this-DIM want-AUX-nc.RLS
これ、ほしいなあ。

• *ʔédà-čí* の例

ʔédà-čí *mă-lòjìn-p^hú.*
that2-AUG not-want-vs.NEG
それ、ほしくない。

⁵¹ 林 (2003:291-292)では「直示用法にはしばしば代名詞、指示詞、副詞が直示的表現」(deictic terms)として使われるが、このような表現がすべて直示の用法になるわけではない (Levinson 1983)。例えば、*You can never tell that in advance.*や *We are not naturally bad.*では、直示的表現である *you, we* はいずれも一般的な人を指し、直示の用法ではない。また、*Marry went to the store but she did not buy anything there.*における *she* は、『前方照応』(anaphoric) な使われ方であって直示の用法ではないとされる (Levinson 1983)」という記述がみられる。

⁵² なお、本論で考察する「文脈参照現場指示用法」とは扱う内容が違うが、代用表現 (pro-nominal, pro-locative) が同時に直示的かつ照応的な用法であるという直示的表現と照応的表現の両方の用法が使われるという指摘がある (Lyons 1977: 676)。

⁵³ 例えば、以下のような例である。

(79)'	<i>dà-lè/ pô.</i>	<i>p^hyeʔ-yâ-tê</i>	<i>bópìn</i>	<i>s^hò-tà.</i>
	this-FP	erase-AUX-attr.RLS	ball.point.pen	say-nc.RLS

これだよ。消せるボールペンというのは。

(82)' hò-lè/pô. p^hyeʔ-yâ-tê bôpìn s^hò-tà.
that1-FP erase-AUX-attr.RLS ball.point.pen say-nc.RLS

あれだよ。消せるボールペンというのは。

(85)' ʔéda-lè/pô. p^hyeʔ-yâ-tê bôpìn s^hò-tà.
that2-FP erase-AUX-attr.RLS ball.point.pen say-nc.RLS

それだよ。消せるボールペンというのは。

- ⁵⁴ 旧情報とは、話し手が聞き手に情報を伝達する際に、聞き手がすでに有していると考える世界観のことであり、話し手が意思伝達を始める際の前提となるものである(西岡 2003: 283)。
- ⁵⁵ これは、英語などでみられる文頭の要素に強勢 (stress)が置かれるような現象と似ているし、ビルマ語にも似たような現象が観察されるが、本論で扱った(84)と(85)の例は音声的な強調の有無が本文には影響しない。
- ⁵⁶ 厳密には、同じ書き言葉として ဤ/ʔi/の意味の表現に、口語体を文章に取り入れる際に用いられる သည်/ʔi/があり、同様に ထို/t^hò/の意味の表現に အဲသည်/ʔéʔi/があるが、形態的振る舞いが話し言葉の ဒီ/di/に近いため、本論ではこれら သည်/ʔi/と အဲသည်/ʔéʔi/を口語表現に分類することにした。
- ⁵⁷ 国語教科書は 2014-2015 学年用のものだが、Japan International Cooperation Agency の“Data Collection Survey on Education Sector in Myanmar, Final Report, February 2013” pp.62-3 によれば 1999-2000 年に改訂されたという。http://open_jicareport.jica.go.jp/pdf/12113635.pdf (2016/07/07 閲覧)。ただし、筆者の記憶ではこの教科書が初めて導入されたのは 1984-1985 年頃である。
- ⁵⁸ キッサン文学集 Vol.1 と Vol.2 のデータ量はおおよそ 151,000 音節相当である。
- ⁵⁹ 括弧内の数字は「接続表現の内数」である。
- ⁶⁰ 国語教科書ではおおよそ 280,000 音節を分析対象とした。
- ⁶¹ 新聞(全 5 紙)のデータ量はおおよそ 300,000 音節相当である。
- ⁶² 原文: မည်သည့်ပုဂ္ဂိုလ်အရာဝတ္ထုကိုဆိုလိုသည်ဟုညွှန်ပြရန်သုံးသောနာမ်ဝိသေသနကိုအညွှန်းနာမ်ဝိသေသနဟု ခေါ်သည်။ နာမ်ရှေ့ကကပ်ထားရသည်။ (Pe Maung Tin 1953: 39)
- ⁶³ 原文: အနီးရှိနာမ်ကိုညွှန်ပြလိုလျှင် ဤ“သည်”တို့ကိုအသုံးပြုသည်။ (Pe Maung Tin 1953: 40)
- ⁶⁴ 原注—ウー・カラー: タニンガンヌエ王の時代にウー・カラーが書いた大王統史—ピージマンダイ 1926 年
- ⁶⁵ 原注—マニコンダラ: アナウベッルン王時代ワヤビティンガナー僧が書いたマニコンダラ小説—ツダマワディ 1928 年
- ⁶⁶ 原注—ダマウィラーサ: バガン時代ダマウィラータターが書いたダマウィラーサダマサツ (Pe Maung Tin が選出した高校ビルマ語散文選出—オックスフォード 1937 にある)
- ⁶⁷ 原注—ウィザヤ: ミンドン王時代にウー・ボンニヤが書いたウィザヤ劇の脚本—スダマワディ 1946 年
- ⁶⁸ 原文: ဖော်ပြပြီးသောနာမ်ကိုညွှန်ပြလိုလျှင် ထို“ကို”အသုံးပြုသည်။ (Pe Maung Tin 1953: 39-40)
- ⁶⁹ 原注—マハーピンニャーチャー: 915-955 年にミャウー町のパヤウン王時代にマハーピンニャーチャー大臣の申し上げ方。散文選出にある。(Pe Maung Tin が選出した高校ビルマ語散文選出—オックスフォード 1937 にある。)

- 70 原注—ヴェッサンタラ: 1145 年にウー・オーバーサが書いたヴェッサンタラ本生譚—ラキンサンマンダレー 1941 年
- 71 原注—マハーザナカ: 1147 年にウー・オーバーサが書いたマハーザナカ本生譚—スダマワディ 1947 年
- 72 原文: ‘ယင်း’သည် ‘ထို’နှင့်အသုံးတူ၏။ (Pe Maung Tin 1953: 42)
- 73 原注—ヤーザーディリ: ヤーザーディリアイエードーボン。アイエードーボン 5 卷本にある。アラウンミンタヤー王時代までのことを書いたアイエードーボン 5 卷本 (ダニャワディ、ヤーザーディリ、ハンターワディシンピューシン、ニャウンヤン王、アラウンミンタヤー) —スダマワディ 1923 年にある。
- 74 原注—ピーンティッナインガントアー: ミンドン王時代キンウンミンジーのフランス旅行日記—政府 1939 年
- 75 原文: ‘၎င်း’သည် ‘ထို’နှင့်အသုံးတူသည်။ (Pe Maung Tin 1953: 41-42)
- 76 原注—ランダンミョトアー: ミンドン王時代キンウンミンジーのロンドン旅行日記—政府 1927-8 年
- 77 ၏[pé](名) ① アンナ(英領時代の補助貨幣の単位、1 ルピーの 16 分の 1) (大野 2000:376)
- 78 原注—イエーター: ミンドン王時代ウー・ボンニャが書いたイエーター劇の脚本—スダマワディ 1947
- 79 原文: ညွှန်ပြထားသောနာမ်ကိုသေချာစွာမဖော်ပြလျှင် ‘အကြင်’ကိုအသုံးပြုသည်။အများအားဖြင့် ‘အကြင်’ ဝါကျကို ‘ထို’ဝါကျဖြင့် ဟပ်၍အဆုံးသတ်သည်။ (Pe Maung Tin 1953: 42-43)
- 80 原注—マスチュー: 1115 年にチョンウンボンナゼヤが書いたマスチューダマタターハンターワディ 1903
- 81 原注—ダマウィラー: バガン時代ダマウィラータターが書いたダマウィラータダマタッ (Pe Maung Tin が選び出した高校ビルマ語散文選出—オックスフォード 1937 年にある)
- 82 原注—スェゾンチョーティン: 1227 年にチーテューレータッ僧が書いたスェゾンチョーティン本—ピダカッドー
- 83 原注—マニコンダラ: マニコンダラ: アナウベッルン王時代ワヤビティンガナー僧が書いたマニコンダラ小説—ツダマワディ 1928 年
- 84 原文: ‘လည်း’သည်စုပေါင်းပါဝင်သည့်သဘောကိုပြသည်။ (Pe Maung Tin 1959: 76)
- 85 緬曆 593 年 (西曆 1231 年) 成立。
- 86 原注—碑文: バガン碑文集—ブリティシュバーマ—1928 年
- 87 Pe Maung Tin and G.H.Luce (1928: 41) 著のソーミンラッパヤー碑文 19 行目には ယောက်ယာလေကောင့် မိမလေကောင့် yau?yà lè-kàun mîmâ lè-kàun と書かれている。ယောက်ယာ yau?yà 「男の人」、မိမ mîmâ 「女の人」の綴りも現代のそれとは異なり、声調も表記されていない。正確には当時は声調の表記法が確立していなかった。なお引用箇所は本論での転写法に従って転写したものである。この表記の違いは、本論と直接かわからないため、議論の対象から外す。
- 88 原文: ‘၎င်း’သည် ‘လည်း’ကို ‘ကောင်း’ဖြင့် လေးနက်စေသော ‘လည်းကောင်း’ ဖြစ်သည်။ ‘လည်းကောင်း’ကို ရှေးအခါက ‘လေးကောင်း’ဟုရေးကြ၏။ စောမင်းလတ်ဘုရားကျောက်စာတွင် ‘ယောက်ျားလေးကောင်း မိန်းမလေးကောင်း’ (ကျောက်စာ-၄၁) ဟုရေးသည်ကိုထောက်လေ။ ဤသို့ရေးကြည့်ရာ၌ ‘လေး’အစား ဂဏန်း၄ရေး၍ ‘ကောင်း’အစား အဆုံးသတ် ‘င်း’ရေးခြင်းအားဖြင့် ‘၎င်း’ဖြစ်လာ၏။ (Pe Maung Tin 1959:77)
- 89 原注—パラ: 864 年にマハーティラウンが書いたパーラーヤナ小説—トゥリヤ 1914 年

⁹⁰ 原注—マニラ：アナウッベッルン王時代にウィヤービティンガナータ僧が書いたマニコンダラ小説—ス
 ダマワディ 1928 年

⁹¹ 原文：‘ငင်း’တစ်ကြိမ်ဖြစ်စေ၊တစ်ကြိမ်မကဖြစ်စေသုံးရာ၌ဆိုင်ရာစကားနောက်၌ထားကြောင်းသတိပြုရ၏။ (Pe Maung Tin
 1959: 81)

⁹² 原注—マニボン：インワ時代ウィンジンミンヤージーの申し上げ方であるマニヤダナーボン—ハンター
 ワディ 1901 年

⁹³ 原文：ရှေးကျောက်စာများတွင်‘ငင်း’ကိုနာမဝိသေသအဖြစ်မသုံးကြချေ။‘ထို’ကိုကားရှေးခေတ်ကစ၍သုံးသည်ကို တွေ့ရ၏။ (Pe
 Maung Tin 1959: 82)

⁹⁴ 岡野 (2013: 23)は「この碑文は当初は『ミヤゼディ碑文』と呼ばれたが、後にこの仏塔とは無縁で、その
 隣のグーピャウチー仏塔にちなむものであることが分かったため、『グーピャウチー碑文』とも呼ばれ
 る。現在、ミャンマー国内では施主名をとって『ヤーザクマーラ(ラージャクマール)碑文』とも呼ばれ
 ることが多い」と述べている。

⁹⁵ 日本語の訳は澤田英夫 (2002-2006)による「ラージャクマール(ミヤ=ゼーディー)碑文 A 柱: ビルマ語
 面」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/bagan/rkamrtxt.html> を参考した (2016/07/07 閲覧)。

⁹⁶ ウー・カラーのマハーヤーザウンジー(ウー・カラーの大王統史)の例

we?-cí-lé t̃è-ʔân-t̃ó bé-kò cau?-ywê t̃aunjá-t̃ó wìn-ywê pyé-lè-ʔi
 pig-AUG-DIS.also die-vs.IRR-attr harm-ACC afraid-SEQ valley-ALL enter-SEQ run-AUX-vs.RLS
တဲ we? wìn-ywê pyé-lè-t̃ó ʔäya?-kò we?wìn-hù-ywê yāk^hù-tàinʔaun
 that.DET pig enter-SEQ run-AUX-attr.RLS place-ACC pig.enter-QUOT-SEQ now-till

twìn-ʔi
 call-vs.RLS

တဲ ʔäya?-hmâ-t̃i ʔäsinʔätaín ʔänauʔt̃aun ʔäya?-t̃ó pyé-lè-ʔi
 that.DET place-ABL-DIS in.order southwest place-ALL run-AUX-vs.RLS

豚も死ぬということを恐れて谷間に入って逃げる。その豚が入って逃げた場所は豚入りと現在にまで
 呼ばれている。その場所から順番に南西方向へ走る。ウー・カラー：116

⁹⁷ ウー・ヌ (1907-1995)による「ミャンマー百科事典」(1954-76)のまえがき

နိုင်ငံတော်ဝန်ကြီးချုပ်ဦးနု၏မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်းကြီး၏ဥယျာဇဉ်
 လွတ်လပ်ရေးရရှိကျွန်တော်တို့လက်တွင်းသို့အချုပ်အခြာအာဏာရောက်သည်နှင့်တစ်ပြိုင်နက်ကျွန်တော်တို့၏ပထမဆုံးလုပ်ငန်းသည်
 အမှောင်ခွင်၌အလင်းဆောင်ရမည့်လုပ်ငန်းပင်ဖြစ်သည်။ထိုအမှောင်တည်းဟူသောကျွန်တော်တို့၏ရန်သူနံပါတ်၁ကိုဖြိုခွင်းချေမှုန်းရန်
 ကျွန်တော်တို့၏တပ်မဟာများသည်အခြားမဟုတ်၊ဘဝသစ်ပညာရေးတပ်မဟာ၊လူထုပညာရေးတပ်မဟာ၊စာပေဗိမာန်တပ်မဟာများဖြစ်
 ၍ဤစွယ်စုံကျမ်းကြီးသည်ကားကျွန်တော်တို့အသုံးပြုရမည့်လက်နက်ကောင်းကြီးတစ်ခုဖြစ်သည်။

luʔlaʔyé yâ-ywê cǎnò-t̃ó leʔ-twín-t̃ó ʔäc^houʔʔäc^hàʔànà yauʔ-t̃i-hnín
 independent get-SEQ [1m]-PL hands-inside-ALL sovereignty arrive-nc.RLS-COM
 dǎpyàinneʔ cǎnò-t̃ó-ʔi pāt^hāmās^hóun louʔṇán-t̃i ʔāhmàun + k^hwín-ywê
 at.the.same.time [1m]-PL-GEN the.first task-DIS dark+penetrate-SEQ
 ʔālín + s^hàun-yâ-myí louʔṇán-pìn p^hyiʔ-t̃i **တဲ** ʔāhmàun-tí hù-t̃ó
 light+bring-AUX-attr.IRR task-EMPH COP-vs.RLS that.DET darkness-EXCL say-attr.RLS
 cǎnò-t̃ó-ʔi yànṭù nànpaʔ-tiʔ-kò p^hyòk^hwín-c^hēhmóun-yàn cǎnò-t̃ó-ʔi
 [1m]-PL-GEN enemy number-one-ACC annihilate-crush-PURP [1m]-PL-GEN
 taʔmǎhà-myá-t̃i ʔäc^há mǎ-houʔ bǎwâ-tiʔ-pyìnnyàyé-taʔmǎhà lùdù-pyìnnyàyé-taʔmǎhà
 brigade-PL-DIS other not-right life-new-education-brigade people-education-brigade
 sàpè-beiʔmàn-taʔmǎhà-myá p^hyiʔ-ywê ʔi swèṣòuncán-cí-t̃i-ká cǎnò-t̃ó
 literature-palace-brigade-PL COP-SEQ this.DET encyclopedia-AUG-NOM-DIS.csubj [1m]-PL

?ătôun + pyû-yâ-myî le?ne?-káun-çí tǎ-kʰû pʰyi?-tì.
 use+do-AUX-attr.IRR wepon-good-AUG one-CLF COP-vs.RLS
 独立になった我らの手に主権が渡されるとき、我らが第一にやらなければならなかったことは、暗闇を貫いて光を照す(暗闇に光を射す)ことである。**その**暗闇という我らの第一の敵を倒すために我らの偉大なる軍は他でもなく、新しい生命の教育大軍、国民教育大軍、学識大軍などであり、**本**百科事典は我らが利用すべき良い武器の一つである。
 ဤသို့ကြိုးစားသူ၏အမှောင်ဓာတ်သည်မည်မျှပင်ကြီးမားစေကာမူဤစွယ်စုံကျမ်းကြီးသည်ထိုအမှောင်ဓာတ်ကိုခွင်း၍အလင်းကိုဆောင်ကုန်လတ္တံ့။

?n-tô cózá-tù-?í ?ăhmàunda?-tì myihmyâ-pìn címa-sègàmù
 this-as strive-person-GEN darkness-NOM how.much-EMPH huge-although
 ?n swèzòuncán-cí-tì ʔò ?ăhmàunda?-kò kʰwín-ywê ?ălín-kò shàun-kòun-lătân.
 this.DET encyclopedia-AUG-NOM that.DET darkness-ACC penetrate-SEQ light-ACC bring-AUX-vs.IRR
 このように努力する人の暗闇がどんなに大きくとも、本百科事典は**その**暗闇を貫き、光を照らすであろう。
 ထိုသူသည်ဖိုးသည်ပင်ဖြစ်စေကာမူဤစွယ်စုံကျမ်းကြီးသည်ထိုဖိုးသည်ကိုဖိုးရာဇာအဖြစ်သို့ပြောင်းလဲပေးကုန်လတ္တံ့။

ʔò tù-tì pʰótòunnya-pìn pʰyi?-sègàmù ?n swèzòuncán-cí-tì
 that.DET person-DIS M.zero-FOC COP-although this.DET encyclopedia-AUG-NOM
 ʔò pʰótòunnya-kò pʰóyàzà-?ăpʰyi?-tô pyáunlé + pé-kòun-lătân
 that.DET M.zero-ACC M.King-as-ALL change+give-AUX-vs.IRR
 その人がポー・トンニヤ(無知蒙昧な輩)であるにせよ、**本**百科事典は**その**ポー・トンニヤ(無知蒙昧な輩)をポー・ヤーザー(王様)に変えてあげるであろう。

အလင်းဓာတ်ခံရှိပြီးသော်လည်းထိုအလင်းဓာတ်ကိုဆထက်ထမ်းပိုးတိုး၍အလိုရှိသောသူများအဖို့မှာလည်းထိုသူတို့၏လိုအင်ဆန္ဒဟူသမျှသည်တစ်လုံးတစ်ဝတ်ည်းပြည့်စုံကြကုန်လတ္တံ့။

?ălín-da?kʰân hyî-pí-tòlé ʔò ?ălinda?-kò shʰâtʰε?-tʰăbó
 light-predisposition exist-finish-although that.DET light-ACC double.more-double.amount
 tò-ywê ?ălò + hyî-tʰó tù-myâ-?ăpʰò-hmà-lé ʔò tù-tò-?í
 increase-SEQ need+exist-attr.RLS person-PL-sake-DIS-DIS.also that.DET [3]-PL-GEN
 lò?in-sàndâ-hùăhmyâ-tì tǎlòuntǎwâ-tì pyêzòun-çâ-kòun-lătân.
 desire-wish-every-NOM completely-EXCL full-mutual-AUX-vs.IRR

元々光があつて**その**光を更に何倍にも増やしたいという人たちのためには、**その**人たちの希望がすべてみたされるのであろう。

Pe Maung Tin (1959: 82)

⁹⁸ 原注—マハーウン：1240 年にチーテーレータツ僧が書いたマハーウン小説ミンガラタイン—1929

⁹⁹ Pe Maung Tin (1959)では、古文体期/hyēsàháuŋkʰi?/がどの時期を指しているかは明示されていない。ヤンゴン大学のビルマ語学科の教授 2 名に尋ねたが、意見が一致せず、どの時代を指すかは明らかでなかった。

¹⁰⁰ 原文：နာမ်စားအဖြစ်သုံးသော‘ငင်း’ကရေးစာဟောင်းခေတ်တွင်မတွေ့ရ။ (Pe Maung Tin 1959: 83)

¹⁰¹ 原文：နာမဝိသေသနအဖြစ်သုံးသည်ဖြစ်စေ၊နာမ်စားအဖြစ်သုံးသည်ဖြစ်စေ‘ထို’သည်‘ငင်း’ထက်ရှေးကျကြောင်းသိရ၏။ (Pe Maung Tin 1959: 83)

¹⁰² 原文：အကယ်၍‘ထို’ကိုအသုံးမပြုလိုမှု‘ယင်း’ကိုသုံးနိုင်သည်။ (Pe Maung Tin 1959: 84)

¹⁰³ 原文：၆၂ခုနှစ်အဇောလတ်ကျောက်စာတွင်‘အဝှမ်းလယ်၁၀၀အယင်းလယ်ကားမခရာခွင်အဝှမ်းမည်သောရွာနို့က်၅၀၊ ရတပုထိုးဖြူမည်သောရွာအရပ်၅၅၀၊ဤအရပ်နှစ်စုံကိုအဝှမ်း၁၀၀ဟူ၍မိန့်သတည်း’(ကျောက်စာ-၉၁)ဟုဆိုရာ၌‘အယင်းလယ်’သည်ရှေ့၌ရှိသောအဝှမ်းလယ်၁၀၀ကိုဆိုသည်။‘အယင်း’သည်ယခု‘အ’ကျေသော‘ယင်း’ဖြစ်၏။ ‘ထို’အစားသုံးသောနာမဝိသေသနဖြစ်သည်။ (Pe Maung Tin 1959: 83)

¹⁰⁴ 原文：‘ယင်း’သည်‘အကြောင်း’ကကိုညွှန်းသောနာမဝိသေသနဖြစ်သည်။ (Pe Maung Tin 1959: 83)

¹⁰⁵ 本論でも Myanmar Language Commission (2005) と似たような考えではあるが、基本的には岡野 (2011: 77) の口語体ビルマ語における「指示語の分類」に従ったものである。

106 ウー・ヌ (1907-1995)の မြန်မာ့စွယ်စုံကျမ်း:「ミャンマー百科事典」(1954-76)のまえがきは注 97 をみられた
い。

107 dābèkālā s^hò-t̚s zǎgá-ŋi ʔǎdeiʔbè-k̚ò hyínlín-pí-tì-ŋi ʔǎc^hámê-hnaiʔ
NAME.place say-attr.RLS word-GEN meaning-ACC explain-finish-nc.RLS-GEN other.side-LOC
dābèkālā hù-t̚s ʔǎcìn tǎngà-ywà-k̚ǎlé-ŋi tì-yà ʔǎc^hè-hnaiʔ ʔàyà-pòun-k̚ò
NAME.place say-attr.RLS some.DET fishermen-village-DIM-GEN exist-place base-LOC pleasant-sence-ACC
yétá-ʔòun-ʔân. yín ywà-k̚ǎlé-k̚á ʔǎlùn nauʔcì-ywê hyùn-ʔǎtí + pí-t̚s
write-AUX-vs.IRR that.DET village-DIM-DIS.csubj very dirty-SEQ mud-whole+finish-attr.RLS
dābèkālā-c^háun-k̚ǎlé-ŋi bé-t̚wìn hyí-lè-tì.
NAME.place-river-DIM-GEN beside-LOC exist-AUX-vs.RLS
ダベカラーという言葉の意味を説明した後、一方ではダベカラーというこの魚介村がある背景の美し
さをまた書く。その村はとても汚く泥だらけのダベカラー川の横にある。

キッサン文学集: Theippan Maung Wa, p.78

108 時間の現場指示は近称による、現在を含む近い過去と近い未来などに限られる。

109 文語体ビルマ語では、-hmàは場所名詞に後続する場合の場所を表す格助詞‘LOC’として用いられる場合
もあれば、主語や主題を表す談話標識‘DIS’として用いられる場合もある。

110 指示代名詞 ṭi が空間的位置を対象とする例

...သည်တွင်ရွှေမြို့၊သည်သို့ရွှေပြည်၊သည်ဆီရွှေနန်း၊ဖြောင့်တန်းတော့မည်၊စိတ်ကရည်သည်၊ရွှေပြည်ဌာနဝေးသောကြောင့်။
လက်ဝဲသုန္ဒရအမတ်ကြီး (၁၇၂၃-၁၇၉၃ခန့်)၏မေတ္တာင်မြေပိုဒ်စုံရတုမှ

111 -káや-lé は主語・主題や対比を表す副助詞である。

112 この後に cāun ‘CAUS’が脱落している。

113 原文: နိုင်ပန်းလှဒေါက်တာ၊၁၉၉၇-၈၄။
ယင်း၊၈၄။

114 碑文の綴りは、本論ではすべて現代ビルマ語の正書法に統一してある。

115 ヤーザクマーラ碑文については澤田英夫 (2002-2006)「ラージャクマール (ミヤ=ゼーディー) 碑文 A
柱・ビルマ語面」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の下記↓のリンクを参照されたい。
<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/bagan/rkamrtxt.html>

116 原文: (၁)ကြိယာရဲ့နောက်ကကပ်နေပြီး၊ကြိယာရဲ့အဓိပ္ပာယ်ကိုထူးခြားသွားစေတယ်။(၂)ကြိယာရဲ့နောက်ကနေရာမှာအပိတ်စပ်
(close juncture)နဲ့နေတာဖြစ်တယ်။(၃)ကြိယာနဲ့ကြိယာထောက်ကြားမှာ‘မ’အပါအဝင်တခြားစကားလုံးမဝင်ရောက်နိုင်ဘူး။... 以
下、該当箇所は pp.85-88 の約 3 ページに渡っている。

117 ဟိုး /hó/は遠称①ဟို /hò/と声調だけが異なる形式であり、前者を強調した形式が後者であるという見方
ができるかもしれない。この「遠さ」を強調するためか、ဟိုး /hó/はしばしば長く発音される。

118 -mè は恐らく所格助詞-hmà の異形態と思われる。

119 ʔaiʔはʔédi の異形態。5.5 を参照のこと。

120 お米屋での用例は 2016 年 3 月 7 日に収録した 30 代の女性 2 名の自然会話データであり、店員 (A) と店
に遊びに行った友人 (B) との会話である。データを本論の用例として掲載するにあたり、会話協力者の
承諾をいただいている。

121 原文: ထိုထို-ညွှန်ပြအပ်သောသက်ရှိသက်မဲ့တို့၏များသောအဖြစ်ကိုပြသောစကားလုံး။ (Vol. 2: ဆ-န) p.146

122 原文: ထိုထိုဤဤ-အထွေထွေအမျိုးမျိုး။အဘက်ဘက်။အရာပပ်သိမ်း။ (Vol. 2: ဆ-န) p.146

¹²³ ဤယင်း /ŋyín/ の例

၄၆။အကြင်သမ္မာ(ချန်)ယောက်ျားနှင့်ကန်၊ဤဆိုဟန်၌ချမ်းမြိုက်အိုင်မင်း၊အပြစ်ကင်း၏၊ရှင်းရှင်းချိုးတွန်း၊စွန်းစွန်းဖွားဖွား၊
မဆေးငြားသည်၊ယောက်ျားသူနပ်ထိုကျွန်ပုပ်လျှင်၊ရှုပ်မျှအပြစ်တင်ရာဖြစ်၏၊စင်စစ်ဤယင်း၊ပမာခင်းသို့၊ဘင်တွင်းဟူသည်၊
လူတို့တဏှာ၊ ကိလေသာ၌(ချန်)အာလုပ်လှစ်သည်။ အပြစ်တစ်ပုံမကြီးတည်း။

အရှင်မဟာသီလဝံသဆိုဆုတောင်းခန်းပျို့မှထုတ်နုတ်သည့်သံဝေဂနိဗ္ဗိန္ဒဝိန္တုခန်းမှ

Burmese Literature Collection Vol. 1 (1991:138) より

- ထိုယင်း /tʰòyín/ の例

၄၉။(ချန်)ထိုယင်းအနာသည်းလေရာ၏၊ကြမ္မာလည်းတူ၊ယောက်ျားနှုန်းသက်ကူဇော်ဂီ၊နှစ်ပါးဤတွင်ပြစ်လျှင်တင်ရေး၊ဝေးသည်ပင်
ကိုဝိဇ္ဇာခိုရ်၌အမှိုက်ရှင်းရှင်းရိဖျင်းကင်း၏၊ထိုယင်းသူလောင်းအနာလောင်အား၊ ပြစ်များကြီးနယ်လခွေ တည်း။

အရှင်မဟာသီလဝံသဆိုဆုတောင်းခန်းပျို့မှထုတ်နုတ်သည့်သံဝေဂနိဗ္ဗိန္ဒဝိန္တုခန်းမှ

Burmese Literature Collection Vol. 1 (1991:138) より

- ထိုထို /tʰòtʰò/ の例

ထိုထိုကျိုက်ကျိုက်ထိန်ထိန်ရိုက်မျှ၊သောင်းသိုက်စကြာဝဠာ၊ရိုသောခါ၌ဗျာပါစို့မှန်၊ရှင်အာနန်မူ၊အကြိမ်ကြာ၊နုရဒ္ဒာကို၊
လျင်စွာမနေ၊ဤသို့မေး၏၊နောင်ထွေးနောင်ရင်း၊နောင်စိုးမင်း၊(ချန်)၊အဆင်းရွှေလား၊နောင်ဘုရားသည်၊စကားမပြန်၊
(ချန်)၊အာနန္ဒာအား၊သာယာလျောလျော၊ဤသို့ပြော၏၊ညီစောညီလှ၊ညီမွေးဘကြောင့်၊ကြောင့်ကြပူပြင်း၊စိုးရိမ်ခြင်းကို၊
ဖြည့်တင်းချုပ်ရုပ်(ချန်)၊ကျွန်ဘုရားဟု၊သနားဖွယ်သာ၊ငိုကြွေးရာသည်။ ဦးချာနုလုံးပူ၏တည်း။

ညောင်ရမ်းခေတ်ဟံသာဝတီရောက်မင်းလက်ထက်သက္ကရာဇ်၁၁၀၄ခုနှစ်တွင်ရှင်ဂုဏ္ဍလင်္ကာရေးဖွဲ့သောရွှေပြည်ဝင်ပျို့မှ

Burmese Literature Collection Vol. 1 (1991:285) より

¹²⁴ 下線部は本論で付したものである。

¹²⁵ なお、本論での研究対象は日本語の「この」と「今の」の両方の意味に対応するビルマ語の現場指示として用いられる指示限定詞 di を中心に考察するものである。?ăgû と gûnâ については本論を進めていくために必要最小限の記述のみにとどめる。また、本論で取り上げる?ăgû は名詞用法に限定し、?ăgû là-mè 「今行きます」などの近未来を指す副詞的な用法は扱わない。

¹²⁶ ビルマ語では親族名称を代名詞として使用できるので、初対面の女性にも?ămâ 「姉さん」を使用することができる。

¹²⁷ 原文: အရေအတွက်အနည်းအများ၊ပမာဏကိုပြသောနာမ်စားကိုသင်္ချာနာမ်စားဟုခေါ်သည်။ (Myanmar Language Commission 2005: 46-48)

¹²⁸ hnîn は文語体の形式。この引用箇所はセリフであり、全体としては口語体で書かれている。いくつかの助詞については、口語形式と文語形式との発音が非常に近い場合に、口語体であっても文語の綴りで書くことがしばしばある。

¹²⁹ 金水・他 (1989)からの例文は、本論で引用するにあたり、読点や句読点など本論の方式に変更し、振り仮名は外した。以下同様。